

---

# 永遠に続く刻の中で

抹茶ミルク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

永遠に続く刻の中で

### 【Nコード】

N 6 2 3 2 M

### 【作者名】

抹茶ミルク

### 【あらすじ】

死んだ。神がいた。異世界。原作ブレイク。俺 t u e e e。

異世界転生のテンプレ全開です。

ステータスを見て、さらにそれを好き勝手弄れる能力(+)を手に入れた神谷修司が様々な世界を渡り歩く物語。現在、オリジナル世界編です。

厨二、チートなどの言葉に嫌悪感がある方はブラウザバックをしたほうが宜しいかと思えます。

## 前書き

初めまして、抹茶ミルクと申します。

実は別の投稿サイトに違う名前で小説を書いているのですが、息抜きも兼ねてこちらに投稿させて頂くことにしました。

別のサイトで書いてる小説の主人公が超弱い。

そしてほとんど成長しないので強い主人公が書きたくなりました。

息抜きとはいえこうして公開する以上、読んでくださる方もいらっしゃるわけですので必ず完結まで書く事を誓います。

更新も定期的に出来ればなお良いのですが現在ストックは途中までなのでそれに追いついてしまつとどうなるか分かりません。

そんな感じに不安もありますが読んでくださると嬉しいです。

## 以下、注意事項

- ・厨二
- ・チート
- ・主人公最強
- ・最低系(?)
- ・神(笑)
- ・他作品の能力・技など
- ・ハーレム(になるかも)

など地雷原が盛り沢山です。

抵抗がある方はブラウザバックをお勧めします。

それでも読んでやるか、という方はどうぞよろしくお願いします。

## ブローグ

「お疲れ様です。お先に失礼しまーす」

バイト先のみんなにそう告げて店を出る。

店の入り口のすぐ横にある駐輪場。そこに停めてある原付に鍵を差込む。エンジンをつけるとライトが点く。ヘルメットを装着して店を出発。

バイト先の店から家まで片道一〇分。この辺りはそれなりに栄えてきたけどそれでもバイトの終わる時間になると閉まっている店のほうが多い。半分程度のところにある公園を抜ければ街灯もあまりない暗い道が続く。正直に言えば俺の住むこの町は駅前以外は結構な田舎だった。

この町 特に俺の家の家の近くでは娯楽は少ない。ゲームセンターでさえ駅前までいかないのだ。自転車で駅前まで行くのはなかなか辛い。片道二〇分程度とはいえ坂道が多いからだ。そこで俺は、一六歳になつてすぐ原付の免許を取った。校則違反なのだが学校は駅から電車で五駅離れているし、まずバレることはない。同じ学校でも免許を持っているやつは結構多い。免許を取ったその日のうちに貯めていたバイトの給料で中古の原付を買った。そうすると行動範囲はかなり広がる。少しぐらい遠くてもわざわざ電車に乗る必要がないし、電車で行くと駅から遠くて歩いては行けないようなところも簡単にいける。

行動範囲が広がったところで金がなきゃ何も買えない。そんなわけでも俺はバイトを続けていた。大体週五、学校が終わってから十時まで入っている。休日もたまに一日中やってたりする。それで月に八〜十万の稼ぎになる。

友達でバイトしてるやつは結構いるけど俺ほど稼いでるやつはそうはいない。今日も学校で「お前、そんなに働いてどうすんの？」と言われたばかりだ。

俺がこれだけ働くのには理由がある。

なんせ俺の趣味には金がかかるのだ。

月に決めた分だけ趣味に使うようにしているため自分で制限できているが金さえあればどれだけでも使ってしまうような趣味なのだ。

その趣味とは……いわゆるオタク趣味というやつだ。漫画やアニメ、それ関係のCDやDVD、ブルーレイ。それに服にもそれなりに気を使ってる。季節の変わり目に母さんと買い物に行けば買ってくれるけどそれだけじゃ足りない。シルバーのアクセサリーとかも好きだ。これは高いから年に一つか二つ買っぐらいなんだけど、中学から集めだして今では結構な数になっている。それに加えギターもやっている。こちらには最低限の金しかかけてない。エレキは従姉弟に貰った物だしアコギは父さんのお古。弦とかピックとかの消耗品を買っぐらいだ。機材は新しい物好きで飽きっぽい従姉弟がくれたりする。

そういう理由で俺はバイトを辞められない。特にゲームや漫画が買えなくなるのは辛い。中学時代バイトできなくてお年玉や小遣いを貯めて買ったのを大切に何度も読んだりやつたりして、ネットで二次創作を読み漁ってた。でも二次創作だって原作を知らなきゃ楽しみが半減する。その原作を買うために金が必要。そうなると俺が高校生になった時点でバイトをするのは当たり前のことなのだった。朝起きて学校へ行って学校が終わったらバイト。そんな毎日。

家に着く。

原付の鍵を閉め、シートを被せる。

「疲れた……宝くじ当たればバイトしなくてもいいのに」

いつも通りのことしかしてないのに、今日はいつもより疲れた気がする。

「ただいま」

玄関で靴を脱ぐ。

リビングには母さんがいて俺の分のご飯が残してあった。それを温めて急いで食べて風呂に向かう。

風呂を出た時点で十時四〇分。これから昨日録画した深夜アニメを観る。

「こりゃ今日も寝るのは日付変わるな」

テレビとレコーダーをリモコンで操作し時計を見て呟く。

明日も学校なんだけどなあ……。前回気になるとこで終わったし観ないで寝るなんて選択肢はない。

そしてアニメを三本観て　そのうち一本は二度観　時間が一時に近い事を確認してから就寝した。

\* \* \*

ふわふわする。

空に浮かんでいるような、水面に浮いているような。

ただ、ふわふわといつまでもこのままでいたくなる程の心

地良さ。

近くに気配を感じ、重いまぶたをどうにか上げる。

そこは白い空間だった。

目の前には金色の長髪で男にも女にも見える中性的な顔立ちの人物が見えた。

「神谷修司<sup>かみやしゅうじ</sup>で間違いないな？」

その人は目が合うとそう問いかけてきた。

「はい。俺は神谷修司です」

そして、ぼーっとした頭で考える。

……これ、二次創作でよくある神様展開っぽいよな、と。  
だとしたら、俺は

「俺は……死んだ？」

「そうだ」

「そっか……。死因はなんでしょう？」

二次創作で良く神に暴言吐いて暴力を振るうのがあるけどアレはダメだ。大体、初対面の人にあんな態度がとれるはずがない……。日本人的にはね。それにここは大人しくしておいた方が後々自分のためになるはずだ。

王道ではここで「こちらの手違いで殺してしまった。お詫びとして好きな能力を持って転生させてやろう」とかなるんだらうけど何だよ手違いって、有り得ないって。

「死因は心臓発作になる」

ほらね。

「そうですか……間違いじゃないんですね？」

「生まれたときからの寿命になる」

手違いの線は完全に消えた。

なら今の状況はどういうことなんだろう。

「死んだ人間は……みんなここに来るのでしょうか？」

「いや、死んだにしろ普通の人間はここには来ることができない」

それは俺は普通じゃないってことか？

「それはどういう……」

「お前の魂は私と同じ質を持っている」

「あなたと？」

「そして、その魂に普通の人間の身体は器として小さすぎた」

とても信じられない内容だった。

信じられない反面『キタ            ツ！』とか思ってしまったも

いる。

この、目の前の人と同じ質？ 魂？

そう思いながら目の前の人物を眺める。

「あの、あなたは神様なんですか？」

気になって尋ねる。目の前の人物は少し考える素振りをみせた。

「それが、お前たちの世界を創った者のことを指しているなら……」



「そうだ」

神様でした。

この人が神様で、そんな人というか神様と同じ質の魂を持つて  
るらしい俺って……なんなんだ？ 完全にオリ主なんじゃないだろ  
うか。

「それで……俺はなんでここにいますか？」

「私が呼び寄せた」

「それは……何故？」

「世界を創れる者を神というなら、それが出来る存在は数多くいる」

目の前の人物は語りだす。

「だが私ほどの質の魂を持った存在は今まで現れたことがなかった」

そう言われても、俺はこの神様がどれほど凄いのか理解できない。

「そこでお前の身体を魂に合うように創り変えることにした」

「何のために……ですか？」

「……………それほどの魂、消えてしまふには惜しい」

何か変な間があつた気がする。

「もし、創り変えたとして俺はどうなるんですか？」

「どうにもならん。好きなように生きていけばいい。ただ今までは  
使えなかった魂に合った力が使えるようになる」

え、まさか……やっぱりこれって……チート系と同じ展開？

「それってやっぱり元の世界には戻れないんですか？」

「戻る事は出来るがあの世界ではお前はもう死んだ人間だ」

そっか……そうだよな。

もう既に死んじゃってるんだよな。

なら……チートで異世界つてのやつてみたい。どうせ帰れないなら憧れてたけど出来なかった事をやってみたい。多分、その為の力も手に入れられる。

「では、作り変えても良いな？」

「はい、お願いします」

そう言つて俺は目を閉じた。

\* \* \*

一瞬だった。

身体が何か変わっていくのが自分でも分かった。

身体が……軽い。

「終わりだ」

その声を聞いて目を開ける。

「もう……ですか？」

「ああ。これからお前を別の世界に送る」

「別の……世界」

「私の創った世界のひとつだ。そこでなら力の使い方を覚えるのも丁度良い」

何かワクワクしてきた。俺が憧れのオリ主的な立場になれるなんて……感激だ。オタクとしてこんなに嬉しい事はない。

元の世界にも帰れるってことは俺もそんな力が使えるようになるはずだ。それなら続きが気になる漫画やアニメも心残りにならない。

「分かりました。送ってください」

俺は不安よりも期待を胸に目を瞑った。

「それでは……送る」

その言葉と共に、俺の身体は何か暖かいものに包まれた。

## プロローグ（後書き）

小説家になろう使いやすいですね。  
感想頂けたら嬉しいです。

## 第一章 一話 把握

暖かいものに包まれた一瞬の後、目を開けるとそこは別世界だった。少なくとも今まで俺がいた場所ではない。

一度死んではいるものの一通り確認してみると体は元のまま変わってなさそうである。

この場合、今の状況は転生なのだろうか、それともトリップと言われるものなのか判断出来ない。

まあそれでも転生系のテンプレを経験した俺はさしたる混乱もなく、手始めに自分の状況の確認を始めた。

「えーっと……持ち物は……」

言いながら服のポケットに手を突っ込んで確かめていく。

「あれ……何かあるぞ」

ズボンのポケットに入っていた何かを取り出してみると、それは携帯電話だった。

「……携帯？ 寝るときには持ってたはずなのに」

そこで気付く。

そつえば自分の着てる服……これも寝ているときの物ではない。最近一番良く着る外出着だ。

どうなってるんだと不思議に思うものの深く考えても多分意味がないだろうと思考を切り替える。

「電源は……つくな。でもやっぱり圏外か」

携帯の電源をつけて画面を確認する。

色々操作してみた結果、これは確かに俺の使っていた携帯だった  
が電話帳やブックマークなど登録していた情報が悉く消し去られて  
いた。メールや履歴も何もない、まさに新規で買ったばかりの様な  
有様だ。

「どうせなら見た目も綺麗に新しくしてくれてればいいのに」

長年使っていた携帯のため、見た目には結構傷が目立っているの  
だ。

それにしても、使い道もなさそうなんだけどどうしてこれが服に  
入っていたのだろうか　　と思ったとき、突然携帯の着信音が鳴り  
響いた。

「うおっ！　なんだ、って……メール？」

そこにはメール受信の文字。

圏外なのに何故……という疑問はあるがとりあえず受信ボックス  
を開いてみる。

f r o m

ゴッドさん

ゴッドさんて……神様だからゴッドさん？

もしかしてテンプレ転生物に良くあるハツチャケた感じの神様だ  
ったのか？　　だとしたら俺の前にはいたときの性格は演技だったのか  
……。　　。

というか電話帳には誰も登録されてなかったのに何で差出人に名  
前があるんだろうかと思議に思った俺は一度メールを閉じ、再び

電話帳を確認……さっきまで無かつたはずのゴッドさんが表示されていた。

もし本当にあの神様がハツチャケた神様ならあまり深く考えても意味が無い気がする。そう思った俺は考えるのをやめ、再びメールを開ける。

件名

能力と特典についての説明

なるほど。これ以上ないほどメールの内容が良く分かる件名だ。  
とりあえず本文を見てみるか

本文

急にそこに送られたことで何も分からないと思う。  
そんなキミに能力と特典について説明しよう！

これ、完全にハツチャケた神様だ！

何か愉しんでる感がひしひしと伝わってくる文面だ。

まあ、いい。続きを読もう。

まずは基本、自分の能力を把握しよう！

これは簡単。頭の中で『ステータス表示』と念じればいい。

これで自分の能力が把握できるぞ！　まずは実際にやってみよう。

……やってみようか。

（ステータス表示……っと）

念じてみたらあら不思議。目の前にウィンドウが現れる。

名前	神谷 修司
種族	神
職業	神
称号	神見習い
レベル	1
HP (体力)	26 / 26
MP (精神力)	15 / 15
STR (力)	6
VIT (耐久力)	5
INT (知性)	5
AGI (素早さ)	4
DEX (器用さ)	3
LUC (幸運)	2
カリスマ	3
CH R	2
アビリティ	
AP	0
スキル	
SP	0
ゴッド	
GP	0

こんな感じだった。

RPGとかやる人間なら大体は見たことのあるステータス表だった。一部訳の分からないステータスもあるが。

つか俺……完全に現代っ子ぽいステータスだな。平均が分からないからあれだけど、身体能力は軒並み低くて頭でつかちなのは部活も入らず学校の勉強とバイトだけの生活をしてたからかな。

自分のステータスに軽くガツカリしつつ、ステータスウィンドウを開いたままメールに視線を落とす。

上手く出来たかな？ 出来たとして話を進めよう。

種族辺りに関してはキミの知識の中で一番近いものを選んでおいた。



当然だけどレベルを上げることでステータスも上がるよ。  
そして特典その1！ 頭の中で『チート』と念じてみて。

チート……ね。

（チート……うおっ！）

チートと念じた瞬間画面に変化が起きた。  
なんかステータスを書き換えられるっぽい。  
試してみるか……。

（HPを50に）

そう念じた瞬間、ステータスのHPの表示が50に変わる。  
なんだか感覚も先ほどより疲労が少なくなったと感じる。  
これは確かにチートだ。メールの続きはどうなってる？

さらにそのチート能力ではステータスの数字以外にも書き換えられるものがあるぞ！

『技能』または『スキル』と念じてみるといい。

念じてみる。

ウィンドウが切り替わり、取得技能・スキルのページになる。

今はまだ何も習得していないようだ。

そのなかに技能取得とスキル取得という項目があった。それを見  
てみると技能の方は『取得経験値上昇』や『不老』、さらには『不  
死』など、スキルは魔法や体術の技などが表示されていた。スキル  
の方は、さらに『この世界』やら『神の能力』、さらには俺の知っ  
てる創作物がタイトル別に表示出来るようだ。

そこで取得のページに行こう。

そこでは様々な能力が取得できる。技能はA P、スキルはS Pを使う事によって取得できるようになっている。

今キミがいる世界の技術ならそれ以外にもその世界の正攻法でも取得できるぞ。

修行とか特訓とかしてってことか。

それはそれで面白いかもしれないな。

そこでチートと念じればA P・S Pに関係なく全てを覚える事が出来るんだ！

それは凄いな。

正しくチートじゃないか。

次にG Pの説明なんだけど……これは実際に見てもらったほうが早いかな。

最後に下記のU R Lに接続してみよう。

ちなみにその携帯のバッテリーは無限だから安心してね。

それでは異世界ライフを楽しみましょう。

あつ、私は観察する事はあるかもしれないけど基本干渉はしませんのでご自由にお楽しみください。

その後、U R Lが書いてあり、メールは終わっていた。

大体把握したところでメールに添付されたサイトに接続する。

またしても圏外にも関わらず接続された。

……。

……。

……。

目が……目が疲れた。

一通りサイトを観て回ったんだけど何で女子高生っぽいキラキラ、チカチカしてるサイト構成なんだよ！

ま、大体のことは分かったけどな。

このサイトでは貯めたGP（ポイント）を必要量支払う事で便利グッズを手に入れることが出来るらしい。数点みたけどすぐにでも欲しいのは、袋（ドラクエという袋で何でも入るしどれだけでも入る。しかも中は時間が止まっていて劣化がない）とPC（神製作。あらゆる世界のページにアクセス出来、あらゆる世界の創作物を見ることが出来る）。この二つはぜひ欲しい。

PCはゲームやり放題だし続きが気になってる漫画やアニメも観れる。もしこの先世界を渡れるようになって原作がある世界に行くことになっても原作知識をいつでも確認出来るようになる。

袋は言わずもがな。こんなに便利な物はない。しかもデザインも色々選べるようで麻袋的なダサいものではなかった。

「なんか……覚える事が多くて結構疲れたな」

呟いて頭を振る。

状況も把握したしそろそろ移動を開始しようと思う。よく考えたら俺はまだ森の中に突っ立ったままだった。町、最悪ただの開けた場所でもいいから落ち着けるところに移動しよう。

「つと……その前に」

俺はステータス表を呼び出し、ステータスを全て50程度まで上げた。

こんなことも何が出てくるとも知れない森で先程までの低いステータスでは不安過ぎる。

が、上げるのも一気に上げず少しずつゆっくりと上げていくことにした。

一気に上げるのも確かに俺 t u e e とか懂れるけど不安もあるからだ。その不安とは力の制御について。一気に上げれるところまで上げたとして上手く制御できるのかと言われれば『出来る』とは自信を持って言えない。下手したらちよつと道を尋ねようと街行く人の肩を叩いたらその人が『パーンッ!』という事にもなりかねない。

だから少しずつ慣らししていこうと思うわけだ。

とりあえず全ステ50で慣らしつつレベル上げ。慣れたら徐々にチートでも上げていくのが現実だと考えた。

ある程度の方針も決めまし、そろそろ本当に森を抜けるために行動しよう。ステータス画面を終了し、俺は歩き出した。

\* \* \*

歩き出して一時間は経つただろうか……途中手に入れた手ごろなサイズのこん棒を手に森を進む。

一向に森から抜け出せる気配はない。辺りも段々と薄暗くなってきた。

多分完全に日が落ちてしまつまであと一時間半〜二時間といったところだろう。

暗くなる前に森を抜け出さないと厳しいな。

「この世界、モンスターとかいるのかな……一応武器は持ってるけど」

こん棒を握り締めて呟く。

チートでステータスを上げたとは言え、やはり怖い。

でも、この世界に留まるにしても他の世界に行くことになっても戦いには慣れておいた方がいいだろう。

そう考えるとモンスターがいない世界だったら不運かも。最初から人間を相手にはしたくないし。いつかはそういう事もあるんだろうけど最初に命を奪うのが人間ってのは精神的に結構キツイと思う。慣れるって訳じゃないけどモンスターとかで経験しておいた方が絶対に良い。

と、そんな事を考えていると微かに水の流れる音が耳に伝わる。そういえば喉も渴いてきたな。そう思うと自然と水音に向け歩くスピードも速くなる。

十分ぐらいで水音の元に辿り着く。

二メートル程の小さな滝と、そこから続いていく小川。

そこは俺の目指していた開けた場所でもあり滝のそばには洞窟のようなものもあった。

ただその洞窟は奥行き五メートル程度でダンジョンと呼べるものではなかった。ただ雨風を凌ぎ、落ち着いて考えるには最適な場所だった。

何かの巣かと思いい中を確認してみるが少なくともここ最近何かを足を踏み入れた形跡は見当たらなかった。

水を飲もうと滝に近づくが、ここで重大なことに気がつく。

「コップがないし手で飲むか……あつ！ 洞窟で一晩過ごすとしても火を点ける道具なんてないぞ」

真つ暗な洞窟で一晩。森からは獣の声。想像しただけで怖いぞ。何とかしなきゃ……ってそうだ！

こんな時のためのチート（反則技）じゃないか！  
俺はすぐさまウィンドウを開き取得画面へ進んだ。

「まずは火、だよな。それだと魔法？ この世界のページを開いてみるか」

開く。

「お、あつた！ いきなり見つかったな。最初に表示されてるって事は簡単ってことか」

『魔法 ファイア：火をともし。攻撃魔法としては使えない初心者魔法。 S P 2 』

丁度良すぎ！

なんて俺の条件にピッタリな魔法なんだ！ 即効で取得。チートなのでS P Oでも取得できるのだ。

「うおっ、何だこれ！？」

取得した瞬間に使い方が頭に流れ込んでくる。

確かに今なら使えそうだ。力の使い方、自分の魔力も感じられる。

「あとはコップとかあれば便利だよな……魔法で出す……いや、創る？ なら錬金術とか？ 錬金術ならこん棒よりマシな武器も作れるし何かと便利だよな……」

くっそ！ こんな事なら積んであつた鋼の錬金術師（古本屋で二十五巻セットで買った）読んどくんだったぜ……。今の俺では自分の読んだ事のない創作物の技術は覚えられない。やはりG Pで交換

できるPCは早めに手に入れなくては。

それより今どうするか。鋼の錬金術師はダメで俺の知ってる創作物でそんな都合の良い……あった！

「ゼロの使い魔！　土メイジが錬金使えるじゃないか。しかもイメージでかなり精巧に作れるんだよな」

俺はすぐにゼロの使い魔の錬金を取得した……したのだが、決定的な欠陥に気付く。

「ゼロ魔の魔法って杖ないと使えない？」

頭に流れ込んできた使い方に杖を媒介にするという情報があったから気付いたのだが、原作では杖と契約って言っても詳しく語られてなかったような気がする。

振り出しに戻った？

「くっそう……駄目でもともと、一か八かやってやる。錬金！」

俺は地面に向けて手をかざしコップをイメージして錬金の魔法を使ってみた。

地面が少し光ったと思うと、そこに思い描いたコップ（というかマグカップ）が出現した。

「嘘っ！　出来ちゃった!？」

何で！？　杖とかないのに……俺が神的な何かだからか？　そういう事にしておこう。

俺は作ったコップを手に淹へ。飲んだ水は今まで飲んだどんな水よりも美味しく感じた。汚れてない天然水だし。地球ならペットボ

トルで高く売れそうだ。

水を飲むとだいぶ落ち着く事が出来た。

鍊金で今度は針と糸を作り出し、土を掘って餌を探す。

何匹か捕まえて小川で釣りをすると小魚を三匹釣り上げる事が出来た。

洞窟で焚き火をし、釣った魚を焼きながら鍊金で細身の剣を作り出す。

軽いし、今の俺の力でも軽々と振り回せた。

魚を食べると疲労からか眠気が襲ってきた。

睡魔に襲われつつも寝る前に糸と鍊金で作り出した鈴を洞窟の入り口に仕掛けておく。仕掛け終わったら焚き火に数本の薪を足して睡眠に入った。

この時、俺は警戒しているつもりでもまるで分かっていなかった、基本的なことなのにその考えが抜け落ちていた。

モンスターだって生きている以上、獣同様に水場に集まりやすいんじゃないかってことを。



## 第一章 一話 把握（後書き）

ブログのみなのお気に入り登録とかあってビックリです。  
何か凄い嬉しいっすね。

二話目投稿。

説明回です。

それにしてもこの主人公チートである。

あと一話の文字数ってこの程度で大丈夫ですかね。

長いのか短いのか丁度良いのか。

Vertical Editorで書いてるんですけどそのままコピ  
ペで投稿すると段落とかが変になる。

ストーリーエディターに変えようかな。

## 第一章 二話 慎重

あれから五日程経って 俺はまだ森の洞窟で過ごしていた。

この世界に来て初めての夜をこの洞窟で過ごした後、一応森を出ようと試みたのだ。試みたのだが……舐めてたね。ハッキリ言って異世界舐めてた。

洞窟を出た瞬間、そこには魔物の群れが存在していた。

姿形は何とえばいいのだろう……ゲームで言えばスライムになるのか。ジェル状で目と口がついている。某ドラ エミたいな可愛いもんじゃない。グチャツとして非常に気持ち悪い。確かスライムって洗濯糊とかで作れたけど、作るとき水の分量を間違えて失敗してしまった感じだ。しかも色は紫。

一匹一匹の大きさは大した事はないのだが、いかんせん数が多い。うじゃうじゃという言葉がピッタリだ。小川を囲んで水でも飲んでいるのだろうか。小川のそばにいた魔物が移動するとそこへ別の魔物が移動する。

突然の事態にビクリして足音を立ててしまった。その時、魔物たちの視線が一瞬でこちらに向く。そして一番近くにいた一匹が俺に向かって飛び上がり、突進してきた。

「う、うわぁっ！」

思わず顔の前で両手を交差させて目を瞑ってしまう。

ぽふっ。

衝撃は思っていたよりも遥かに軽いものだった。

が、それよりもおぞましい事態が発生した。

目を開けると突進してきたスライムが防御した腕にくっついてい

るのが見える。そしてそれは……ニチャアと粘り下のある感じに腕に張り付いているまま、少しずつズルズルと下に下がっていき、最後にはベチャツと地面に落ちた。

腕にはニチャネバな感覚と湿っぽい何かが残った。

「……………っ!？」

声にならない。

全身に鳥肌が立った。

死の恐怖とかじゃなく、ただ単に気持ち悪い。

「キモッ…………でも痛く、ないな」

腕を見るとスライム(?)の残りがす的な物についてるけど傷とかはひとつもない。

スライムってことを考えると多分RPGと言う序盤の弱い魔物だと思う。だとしても傷ひとつないってのはステータスを弄ったおかげなのかもしれない。

「上げといてよかったわ、ほんと。…………攻撃力とかはどうなんだろう?。」

気になった俺は先ほど突撃してきたスライムに向けて剣を振るった。

剣を錬金したとき軽いとは思ったが、実際魔物に向けて振ってみると自分でも驚くほどの剣速が出た。

スライムは「ピギャツ!」とひと鳴きして消えうせる。

「おお、こっちも消えた」

同時に俺の腕についていたスライムの一部も消え去った。

「それにしても……一撃か」

本当にステータス上げておいてよかったぜ。これならこのスライムの数が相手でも何とかかなりそうだ。

「よっしゃ、行くぜー！」

俺は剣を握り締めてスライムの群れに突っ込んだ。

\* \* \*

「はあ……はあ……あゝ、しんどっ！」

見渡す限りいたスライムを全て倒した俺は小川のそばに座り込んだ。

ダメージはほとんど無いし、全部一撃で倒したんだけど、疲労は溜まるようで相当疲れた。それでもステータスを上げているおかげで学校でやったマラソン大会ほどは疲れてない。多分それ以上には動いてるんだけど。

息が整ってきたところで考える。

ステータスを上げておいたおかげで今回は乗り切れた。もし上げてなかったらと思うとぞつとする。

それと、戦っていて気になる事もあった。

(ステータス表示、っと)

確かめるためにステータスウィンドウを出現させる。

名前	神谷 修司
種族	神
職業	神
称号	神見習い
レベル	7
HP (体力)	50 / 86
MP (精神力)	50 / 69
STR (力)	71
VIT (耐久力)	62
INT (知性)	87
AGI (素早さ)	68
DEX (器用さ)	60
LUC (幸運)	81
カリスマ	
アビリティ	
CHR	64
AP	52
スキル	
SP	52
ゴッド	
GP	100

やっぱり上がってたか。

戦闘中疲れは確かにあるんだけど、それ以上に動きが良くなった気がしたのだ。

ステータス表を見るに、LUCの上がり方が他のに比べ早い。

APとSPは多分倒した敵の数だと思う。GPはわかんね。丁度百上がってるけど初めての戦闘だからか？ そういう事にしておう。どうすれば貯まるかの説明もなかったし何かあることに入るのかもしれない。

上がったステータスから考えて、今の俺は普通のレベル10台後半辺りぐらいのものだと仮定する。

それだけあれば森を抜けて人里を目指すには十分か？

いや、だけど『もしも』のことがあるかもしれない。今まで生きてきた世界と違って旅をすれば死ぬ可能性だって高いはずだ。慎重にいくべきか。幸い洞窟という寝床もある。水もあるし火もおこせる。

問題は食料か。魚は昨日釣れたから大丈夫。あとは……動物を狩るか？ 捕まえられさえすれば、バイトで鶏は捌いた事あるし多分他の動物も出来ると思う。

植物は怖いよな……毒とか。

見分ける方法はないもんか。技能でそんな感じのはないかと考え出したままのウィンドウで探す。

『薬草採取：薬草を見つけられる 必要AP5』

薬草なら……食えるか。

APも問題ないし……取得、と。

APを使って『薬草採取』を取得する。取得技能のページに『薬草採取』が表示された。

薬草採取 LV

ん、レベル？

技能にもレベルがあるってことか。じゃあレベルが上がるほど出来る事も増えるんだな。薬草採取はLVの後が線になってるからレベルが上がらないってことか？

他のも取ってみるか。

そう思い、必要になりそうな技能を探す。

『危険察知』  
『気配を読む』

まずはこの二つを選んだ。APが足りなくてチート使ったけど。命に関わってくるから覚えておいた方がいいと思って。これはどちらもレベルが設定されていてどちらも今はレベル1。

他は今のところめばしい物は見つからなかったのでウィンドウを閉じる。これから何か必要になったときに応じてどんどん取得していこうと思う。いざとなればチートで全部取得してやればいい。

と、いうことで、とりあえず薬草採取の技能の性能を見るために食材集めを始めるのだった。

\* \* \*

それから四日。

これで冒頭に戻るわけだが、この五日でかなり戦闘に慣れた。この森にはスライム以外にも狼型の魔物とデカイ蜘蛛の魔物がいた。狼は見た目怖いけど何とかなった。でも蜘蛛は見た目でまず無理だ。基本見かけたら逃げていた。何度か戦う事になったが何とか勝てた。ただ蜘蛛の攻撃でダメージは受けないけど奴は毒を持っていた。このとき『薬草採取』を取得しておいて本当に良かったと思った。

この『薬草採取』だが、最初考えていたよりずっと便利だった。薬草と毒草を見分けるのは勿論、食べれるか食べれないかまで見分けることができたのだ。このおかげで食べられる木の実やきのこ何かを見つけることが出来て食生活に潤いをもたらしてくれた。

それから狩った動物を捌くのに抵抗がなくなった。最初は生き

ていたのを殺して捌くのに少なからず抵抗があつたが今では綺麗に捌いて食べる。干し肉も作った。サバイバルスキルがとてつもなく上昇した。あ、それと動物と魔物は簡単に見分けられる。死んだ後に消えるか消えないかだ。

レベルも上がってほとんどのステータスが百近い。ただし運だけは百五十近いのだが……。

APなどもかなり増えている。そこでひとつ新たな技能を取得した。

その名も

### 『薬剤調合』

その名の通り、薬剤を調合する。レベルは1。今のところちよつとした傷薬とMP小回復薬、毒消しの薬。それと二日酔いの薬に風邪薬、栄養ドリンク的な物まで調合出来る。

多分レベルが上がって最終的にはエリクサーとか蘇生薬とか作れるようになるはずだ。万能薬とかも。

錬金もかなり使いこなせるようになってきた。多分サイトと決闘した時のギーシュ程度には使えるはずだ。

GPに至っては狩る、捌く、初めて見た魔物を倒す等、ことあるごとに上がっていつて、今では千を超えている。

袋とPCがどちらも1000ポイントで交換できるのでもう少し貯めて一緒に交換しようか悩んでる。

悩んでる理由は袋についてだ。これって空間魔法を習得したら要らなくね？ ってことだ。ただ空間魔法は必要SPが高いので普通に取得するには相当な、多分年単位の時間が必要になる。チートを使えば今すぐ取れるけど。

まあ、あつて困るもんでもないし貰つところかな。



それはさておきこれから遂に森を出ようと思う。

正直、安全に森を抜けるためとはいえ、慎重になりすぎた感がある。とはいえまだまだステータスは上げていこうと思ってるが、その前に森は出たい。布団で寝たい。ちゃんとした料理も食べたい。

「それじゃ、出発しますかね」

俺はここで取れる薬草で作った薬類と使いこなせるようになってきた鍊金で新調した剣を持ち森を出るために歩き出した。

## 第一章 三話 村

洞窟を出発して歩く事数時間。

何度も同じような場所を通った、道なんてないし方向感覚なんて森に入ってすぐになくなった。この時初めて小川を辿って行けば良かったんじゃない？ と、思い至った俺は相当考えなしたと思う。

が、数時間後、やっとのことで人が手を入れたような歩道に出る事が出来た。

その歩道を勘で左に歩いていく。何か、そっちの方が森を出れる気がしたからだが根拠はない。

「俺って結構凄くね？」

勘で左を選んだがどうやら正しかったようだ。もしかしたらLUCが上がってるのも関係しているのかもしれない。

森を出ると遠くには山が見える……だけで後は見渡す限りの草原だった。俺のいた森は結構大きいらしく今の状況では森の向こう側は見る事が出来ないようだ。

「さて……」

呟く。

「町は……どこだ？」

絶望を込めて。

それらしいものは見当たらない。見渡しても人を見つけることも出来なかった。

森を抜ける間に日も大分傾いてきていたので、見当たらないとい

うことは今から町を探しても日が沈むまでに見つけることは難しいと思う。そのため今日はこの辺りで野宿する事に決めた。

良気な場所を見つけ薪を集めて火をつける。魚や肉を干した保存食を軽く炙って食べる。初めて作ったにしてはなかなか上手く出来ていた。

食べた後、少し剣を振る練習をしていたら空はすっかり暗くなっていた。

野宿なんてこの五日で慣れたと思っていたが、洞窟と違って完全な外のためなかなか寝付く事が出来なかった。

\* \* \*

まどろみの中、身体が揺すられているような感じがした。

「いつ いちゃん っ!」

揺さぶられながら声をかけられているようだ。

……なんだよ、人が気持ちよく寝てんのに。

そう思いながら目を開ける。

「おお！ 起きたか兄ちゃん！」

目の前には農民ぽい服を着ている髭面のおっさんがいた。

「え……あえ？」

寝起きで頭が回らない。

「つかこの人、誰？」

「大丈夫か？　こんなところで寝てっから死んでるかと思ったぞ」

おっさんはデカイ声で言った。

「はあ……こんなところ？」

言われて辺りを見回す。

草原と森が見えた。

「そう言えば野宿したんだっけ」

やっと脳みそが働き出したようだ。

「野宿……野宿だって!？」

おっさんが何やら驚いていた。

「そうですけど……」

何かおかしいのだろうか。この世界なら野宿も珍しくないと思っ  
たんだが、珍しかったのか？

あと、一応初対面だしちゃんと敬語は使っておく。

「兄ちゃん一人でかい？　連れはいないのか？」

「一人ですね」

「よくそれで寝れるもんだな!」

おっさんは俺からしたら大げさに驚いた。

……この世界の人は一人居や寝れないのか？  
ということとは

「うげえ……」

おっさんが誰かに「怖いから一緒に寝よう」と枕を持って言っているシーンを想像してしまった。相当気持ち悪い光景だった。

「……どうした？ 気分でも悪いのか？」

「いや、何でもない……です」

おっさんは心配そうにこちらを見た。

この人、いい人っぽいな。

「それより一人で野宿なんてして魔物に襲われたりしなかったのかい？」

ああ、そう言うことね。

「まあ……襲われてないですね」

「そいつぁ運が良かったな！ 森の近くは魔物も出やすいからな！」

やっぱりそういうもんなのか。

でも襲ってくるとしても森で戦った事のある魔物より強いのがいきなり出てくる事はないよな？

「まあ、森で出てくる程度の魔物なら問題ないですけど」

俺がそう言っておっさんは「なんだってえー！」と、今までで一

番驚いていた。

「兄ちゃん、魔物と戦ったのか!？」

「戦いましたけど……」

「ほお、兄ちゃんがねえ……。兄ちゃん、もしかしてギルド員かい?」

ギルド!

やっぱりあるんだな。それは是非情報が欲しい。

「ギルド? 別に違いますけど」

「じゃあ一般人だとも? 馬鹿言っちゃいけねえよ兄ちゃん! 一般人が魔物とやり合うなんて……」

そんなにおかしい事なのか? でもあいつらそんなに強くないし、ステータス弄ってなくても何とかかなりそうなんだけだな。

「そうなんですか?」

「おうよ! 少なくとも一般人が一人で魔物と戦うなんて無謀だ」

「それは……なぜ?」

「一般人でもこの森のスライム相手ならある程度は戦える。だが、殺せるのは魔力を持った人間だけなんだ」

と、いうことらしい。

それは、この世界には魔力を持った人間と持たない人間がいるってことか。

でも、俺戦いで魔力なんて使ってないぞ?

「それにしても一人で戦ったとか……ホラじゃないのか?」

俺が考え事をしていると、おっさんは何か疑ってる眼差しを向けてきた。

「ええ、まあ」

曖昧に返事をする。

「それで、何で兄ちゃんはギルドに所属してないんだい？」

「魔物を倒せる人間はギルドに入るものなんですか？」

「おいおい兄ちゃん。どんな田舎から出てきたんだ？ そんなのは常識だろう」

常識らしい。

何か、今で余計警戒されたっぽい……ここは何か上手く言い訳しなければ。

「えーと……ですね」

異世界からきました、何て言っても信じてもらえとは思えないし……どうしようか。ここは無難に気付いたら森にいたことにしよう。

「実は気がついたら森にいまして……名前以外は覚えてないことが多いんですよ」

記憶喪失ってどんだけベタなんだよ。信じるわけが

「記憶喪失かい！？ じゃあ、ここがどこかも分からなかったりするのか？」

信じた！？ いや、有り難いけど。

「はい。全然。ここ数日森を彷徨って、昨日やっと出れたばかりです」

「よく、生きてたな。……よし、兄ちゃん！」

「はい？」

「家に来るか？」

なんですと？

「……いいんですか？」

「ああ。行く当てもないんだろ？」

「……はい」

俺は素直に返事をする。行く当てもないのは確かだし、この世界の情報が少しでも欲しい。

「よし、家のある村はすぐ近くにある。話はそれからだ」  
「分かりました」

そう言うなり歩き出して先導するおっさんについていくのだった。

\* \* \*

おっさんについて行って二時間以上は歩いただろうか。たどり着いたのは小さい村だった。その中のひとつの家の前に着くとおっさ



んが言った。

「さ、ここが家だ。遠慮せず入ってくれ」

促して扉を開ける。

「おかえり、父さ　誰ですか？」

それに従いお邪魔する、と中から声と共に見た目十二十三歳ぐらいの少女が駆け寄ってきた。

「おう、サーシャ。帰ったぞ！　こっちは……そう言えばお前、名前は？」

おっさんはサーシャと呼んだ少女に俺を紹介しようとして、まだ俺が名乗っていなかった事に気がついた。俺もそう言えば言ってなかったなと起きてからのやり取りを思い出す。

「修司です。神谷修司」

名乗る。

「カミヤシュウジ……？　変わった名前だな」

おっさんが不思議そうに言う。

やっぱり西洋風なのか？　だったら

「えーっと、多分こっち風に言えばシュウジ・カミヤになります。シュウジが名前なんでそれで呼んでくれればいいです」

「おお、そうか！　ということでサーシャ、シュウジだ。今日は家

で面倒見ることにしたからよろしくな！」

「ど、どうも」

俺はサーシャちゃんに挨拶する。

「はあ……えっと、良く分かりませんが上がってください」

突然親が見知らぬ男を連れてきたと思えば面倒をみるなんて言い出して、状況がまだ理解できてない様子だったが、それでも家にかかる事は許してくれた。

それから中でサーシャちゃんの入れてくれたお茶を飲みながら話す。おっさんに言ったようにサーシャちゃんにも説明した。

「そうだったんですか……なら好きなだけいてくださいね」

と、輝くような笑顔で言ってくれた。とても良い子だ。

サーシャちゃんは明るめの栗色の髪が肩まであって、緩やかなウエーブがかかっていた。髪と同じ色の瞳はクリクリと大きく間違いない美少女（美少女？）であった。

「二人とも……ありがとう」

俺はおっさんとサーシャちゃん二人に対して頭を下げる。

「やめてくれ兄ちゃん。俺がしたいからしてるだけだ」

「そうです！ 頭を上げてください」

二人の優しさに思わず涙が出そうになる。良い人すぎる。それにしてもサーシャちゃんは歳の割にしっかりしてるな。

昼にサーシャちゃんが作ってくれたご飯を食べ、おっさんは畑仕事があると家を出て行った。俺は特にやる事もないためサーシャちゃんと村を案内してもらった。

一通り案内してもらったが、何にもねえ、としか言いようがない。家と畑しかない。あとは村のみんなが集まるような広場ぐらい。何にもないということは、案内はすぐに終わってしまうという事で……案内後、家に戻りサーシャちゃんにこの辺りの地理について聞いていた。

ここから歩いて三日程で村の人も物売り買いするために行くという町があり、その町からさらに五日ほどで王都に着くらしい。結構遠いな……まあ、歩きなら仕方ないか？

そうこうしている内におっさんが仕事から戻ってきた。

「ただいま……はあ」

仕事から帰ってきたおっさんは見るからに元気がなかった。

「父さんどうしたの？ 何かあった？」

サーシャちゃんもすぐにおっさんの顔に気付き問いかける。

「畑に……」

おっさんは悔しそうに話し出す。

「魔物がでやがった」

「ええっ!？」

サーシャちゃんが驚く。

「作物は全滅だ、……収穫前だったのに」  
「……父さん」

その言葉で二人とも暗くなってしまった。

「他の連中も相当被害にあっただろう」  
「そんな!？」

村の畑が魔物に襲われたってことが。  
収穫前の畑って生活がやばくなるんじゃないか？

「今までこんなことなかったのに、どうして……?」  
「さあな。魔物の考える事なんてわかるかよ」

今までは魔物が畑を襲う事なんてなかったらしい。

「まあ他の地域じゃそういうことがあったなんて噂も聞かし、たま  
たまウチの村は運が良かっただけかな」

それっきり二人は無言になってしまった。正直、部外者で知り合  
ったばかりの俺が畑や村の事に口出せる事なんてない。  
ただ俺にも出来ることはある。  
おっさんとサーシャちゃんには恩もある。  
だから

「俺がその魔物を退治する」

二人に向かってそう告げた。

折角のチートな力。こんな時に使わないでいつ使うんだっての。

## 第一章 三話 村（後書き）

アンケートにご協力ありがとうございます！

結果としては当分このままオリジナル世界を続けていこうと思います。

主人公が強くなる過程を省かず、この世界で強くしてから別世界へ行かせます。

と言ってもチートですから成長は早いと思いますけど。

それにしてもストーリーエディタの使いやすさはヤバイ。マジヤバイ。

## 第一章 四話 退治

俺は今、まだ被害を受けてない畑が見える位置に隠れていた。日はすっかり傾き、街灯もない村の中は微かな月明かりのみで視界はとも悪い。

あの後、村の人たちに話を聞いたところ、魔物が畑を荒らしたのは夜であるらしい。それは仕事が終わりに、朝仕事に行くと畑が荒らされていたという証言とも一致する。

その状況で魔物退治をしようと思えば視界が悪くなることは最初から分かっていた。だから、俺はその為の魔法を新たに二つ覚えた。その魔法とは『ライト』という。名前を聞けば大体の効果は分かるだろう。発動してから数分の間、自分を中心に辺りを明るく照らす魔法だ。

もうひとつは、まあいいだろ。簡単に言えば魔物が群れだった場合用の対象が複数の攻撃魔法だ。畑の中で使ったらそっちにも被害がでそうなので極力使うような状況にならないように戦うつもりだ。俺は腰に刺した剣 勿論、鞘も錬金で作った を握り締め、魔物が来るのを待っていた。

\* \* \*

最初、俺が魔物を倒すと言った時、サーシャちゃんは反対した。

「危険です!」

必死な様子だった。会って間もないのに凄く心配してくれてるのが伝わってきて嬉しくなっつてつい口元が緩んでしまう。

「そうだぜ、兄ちゃん。これはギルドに報告して依頼を出すから気にしないでいい」

おっさんもそう言ってくれた。

だけど俺はもう魔物を退治すると決めていた。

「そうは言っても、それじゃ時間かかるでしょ？ サーシャちゃんに聞いたけど依頼しに行くだけでも数日かかる。それじゃ畑が全滅するかもしれない」

俺はそう二人を説得する。が、そんな簡単に引き下がってくれないわけもない。

「それでも仕方ないんです！ 普通の人が魔物と戦うなんて……」

目に涙を溜めるサーシャちゃん。

俺は自然に、そんな彼女の頭を撫でていた。

「心配してくれてありがとう。でも大丈夫」

そう言って微笑む。

「大丈夫って……どうして、ですか？」

そんな俺の手を拒むでもなく、サーシャちゃんは上目遣いに訊いてきた。

その表情が可愛いとか思ってしまった俺は駄目な人間なのかもしれ



れない。……ロリコンじゃないはずなんだが、気付かないだけで素質があつたのか？ いや、そんなことはないはずだ。

「……………」

サーシャちゃんは自分の考えに口元をひくつかせる俺を涙を溜めたまま不思議そうに見る。

「俺には魔物と戦える。力がある。だから大丈夫」

安心させるように微笑んで優しく言う。

「確かにそう言っていたが……畑を襲った魔物は正体も分かってないんだ。危険すぎる」

そう言ったのはおっさんだった。

「そうですね。相手がどんな魔物が分からないのは確かです」

「なら、やはり危険を冒すことはない！ ギルドに頼めば何とかしてくれ」

「でもっ！」

おれはおっさんの言葉を遮って声を上げる。

「畑が全滅した後、村の人が襲われない保証はないんじゃないですか？」

俺がそう言うときサーシャちゃんもおっさんも驚いた顔をした。どうやら、その可能性についてまで考えていなかったようだ。

「だから俺が何とかします。絶対に！」

俺は二人の目をまっすぐに見て宣言した。

「……なんで」

サーシャちゃんが小声で何か呟いた。

「なんでっ……そこまで、してくれるんですか？」

堪えきれなくなった涙が頬を伝う。

「見ず知らずの俺に優しくしてくれた恩返し、っていうのもある。けどそれ以上に……俺はこの事態を何とかしたいと思った。そのための力もある」

俺の言葉を聞いてサーシャちゃんは俯いてしまった。

どうしよう……納得してくれなかったのかな。

なら

「大丈夫。魔物を退治して帰ってくる。絶対に、もう一度サーシャちゃんの作った美味しいご飯食べにくるよ。だから、帰ってきたら腹いっぱい食わしてくれ」

言いながらも一度サーシャちゃんの頭を撫でた。

「……………絶対です」

サーシャちゃんは俯いていた顔を上げ、

「絶対に帰ってきてください。シュウジさんの分、用意して待っています」

そう言って笑ってくれた。

「それじゃ絶対に帰ってこないかね」

俺も笑って言ったのだった。

\* \* \*

やべえ……思い出すとなんて恥ずかしい事言っちゃってんだよ俺は。

しかし美少女の笑顔は良いもんですね！ それだけで頑張れちゃう気がしなくもない。

……俺が死んだら多分サーシャちゃんは泣いてくれる、と思う。優しい子だから。

「やつぱ、絶対無事に帰らないとな。ま、最初から死ぬつもりなんてないし。いざとなったらチート全開で何とかなるだろ」

独り呟く。

そんな風に考えていると畑の方から物音が聞こえてきた。

「……………っ!？」

息を殺し、耳をすませる。

風の音じゃない。明らかに『何か』が這っているような、そんな音だった。

「……ライト」

俺は焔に近寄り魔法を唱える。

俺を中心に辺りが光に照らされる。

「……こいつら、か」

そこには無数の魔物。

森で戦ったスライムに似ているようだが、よく見ると違う。あれよりももっと毒々しい形、色をしている。ドロドロな感じ。

「はあっ！」

一番近くにいた奴に切りかかる。そいつはいとも簡単に真つ二つになった。

だが

「なっ！？ ……マジかよ」

二つになった体はもぞもぞと動き、再び一つになっていく。  
俺は飛んで後ずさる。

「これ……物理攻撃じゃ勝てないのか？」

言いながら剣を見る。

剣には切ったときのスライムのドロドロがこびり付いていた。こ

れじゃあ、攻撃する度に切れなくなるな。

剣を強く振り払ってもそのドロドロは取れてはくれない。

「魔法しかないか……でもここで使うわけには……」

何とかしてこいつらを魔法が使える場所まで誘き寄せるしかない。  
でも、どうやって？

攻撃してくるスライムを剣で弾きながら考える。

ただどなかなか良い案は思いつかない。その間にもスライム達は  
攻撃を緩めない。

ウザったくてこのまま魔法をぶっ放してしまいたい気持ちになる  
がなんとか抑えて他の方法を考える。

新しい魔法が使えないとなると、手持ちの魔法は最初に覚えたフ  
アイアと今使っているライトのみ。どちらも攻撃魔法ではなかった。

「こんなことなら他のも覚えとくんだった……なっ！」

良いながら襲ってくるスライムを跳ね返す。

その時、視界の隅に気になるものを捕らえた。畑の隅……そこに  
集められた枯れた雑草。そこに一匹のスライムが納まっていた。

「ファイア！」

俺はその雑草を魔法で燃やす。

「ピギヤア      ツ！」

火が燃え広がる、中にいるスライムの悲鳴が上がる。

そして、雑草が燃え尽きた後、そこにスライムの姿はもうなかつ  
た。

「……倒した、のか？ 火が弱点？」

その光景を見て呟く。剣で切ったときのように再生もしないようだ。

「試して……みるか」

火が弱点なら、と思いついた方法を試してみようと思う。その方は『ダイの大冒険』で主人公のダイが使った魔法剣……『火炎剣』だ。確かダイも大した魔法は使えなくて、でも普通の攻撃が効かない敵に使った技だ。

出来るかは分からないけどものは試しだ。

「えーっと……剣に魔力を纏わせて……」

ファイアは魔力を火に変化させる魔法だから、剣に纏わせた魔力をファイアで火に変えれば火炎剣の出来上がり……になるはずだ。

「くそ……上手く纏わせられねえ」

纏わせようとしても、剣全体を覆う前に霧散してしまう。

何度も失敗する。

今度は同じ魔力量でも薄く伸ばし、剣にピッタリとくつつけるイメージで魔力を流す。薄くした分、火の大きさは小さくなるだろうけど仕方ない。

「……出来た」

すると、今度は霧散することなく剣に魔力を纏わせる事に成功す

る。

「ファイア！」

その魔力を魔法で火に変える。

「おお………すげっ」

俺の持つ剣の刀身を炎が覆っていた。それに伴い、件に付いていたスライムのドロドロも蒸発するように消えていった。

火炎剣の完成だ。

「効いてくれよ………しゃらあっ！」

その剣でスライムを一匹切り裂く。

スライムは真っ二つになったが、刀身の炎も消えてしまった。

「やっぱ魔力が薄いからすぐ消えてしまっ、のか？」

まあ、それはいい。一度出来たんだからまた出来るはずだ。

それより スライムはどうなった？

火炎剣で切り裂いたスライムを見る。切った箇所から煙を上げ、ひと鳴きしたあと消え去った。

効いた！

「よし………これならいける！」

俺は再び魔法で火炎剣を作り出し、スライムに向かっていった。

＊ ＊ ＊

火炎剣で全てのスライムを倒すことに成功した俺は疲労からその場に座り込んでいた。

自分の中の魔力が減っているのが分かる。ファイアは消費MPは少ないが、それでもスライムを倒すことにかけて直し、あれだけの数（二十から数えてない）のスライムを倒したのだから、いくらチートとレベルアップでMPが上がっているとはいえギリギリだった。ステータス表で確認すると残りMPは20を切っていた。

そして 取得スキルに火炎剣が追加されていた。消費MPは3だった。普通にファイアを使うよりもMPを消費するようだった。

「こんな感じでもスキルは取得出来るのか。早く帰ってサーシャちゃんを安心させてあげたいけど……動きたくねー」

大の字に寝転ぶ。

周りに生き残りがいないか確認して目を瞑る。

いつの間にか眠ってしまっていたようだ。目を開ければ日が昇り始めている。

野宿は慣れてたし、危険察知の技能のおかげか敵が近づけば寝ても起きれるようになったのでそういう状況下で寝るのにも抵抗がなくなってきた自分にビックリする。

「早く帰らなきゃな」



立ち上がる。少し寝たおかげで体力も魔力も大分回復している。  
軽く伸びをし、畑が無事なのを確認してサーシャちゃんの待つ家  
へ向かった。

\* \* \*

「ただいま」

家に入る。

とてとて、と可愛い足音が近づいてきた。それに続いてどすどす  
とも聞こえるのがアレだけど。

「 シュウジさんっ! 」

「 兄ちゃんっ! ? 」

二人とも俺を見て驚いていた。  
もしかして……戻ってこないとか思われてた?

「 あゝ……なんだ。その……約束通り帰ってきたよ 」

行く前の会話を思い出し、恥ずかしげに頭を掻きつつサーシャち  
ゃんに言う。

サーシャちゃんは先ほどよりも目を見開いた後、俯いてしまった。

「 兄ちゃん、無事に帰ってきたのはいいが魔物はどうなった? や  
はりギルドに連絡するか? 」

何も言わないサーシャちゃんに代わっておっさんが効いてきた。

「倒しましたよ。とりあえず昨日出た分は全部」

そう言つとおっさんは少し固まった後、盛大に笑った。

「がはは！ 兄ちゃんが魔物を倒せるとは聞いていたがこれほどはな。この村を救った英雄だな、兄ちゃんは！ 早速村の奴らに話してくるか！」

そう言つておっさんは家を出て行ってしまった。

……英雄つて、大げさな。なんか恥ずかしいんだけど。  
出て行つたおっさんを見てそう思った。

「……サーシャちゃん？」

俯いて何も言わないサーシャちゃんを呼んでみる。

「うおっ！？」

サーシャちゃんが突進    じゃなくて、抱きついてきた。身長差もあつて胸より下にサーシャちゃんの顔があるので表情は分からない。  
い。

「サ、サーシャちゃん？」

俺は彼女の名前を呼ぶ。

「心配しました」

涙声だった。

俺は抱きついている彼女の頭に手をのせる。

「ごめん。心配かけて」

サーシャちゃんの頭を撫でる。

「無事に帰ってきてくれてよかったです」

「約束、したからさ。それに……」

サーシャちゃんの肩に手をかけ、少し離して顔を見る。

「サーシャちゃんの手料理、食べたかったから」

笑って言った。

少し見詰め合って、サーシャちゃんは涙を拭いた。

「ふふ、用意してありますよ」

そう言って笑い返してくれた。

「そっか。楽しみだ」

「帰ってくるって信じて作りました」

「そっか……ありがとう。嬉しいよ」

今回の魔物退治は結構焦ったし大変だったけど、このサーシャちゃんの笑顔を見たら、それだけで頑張ってたと思ふことが出来た。

## 第一章 四話 退治（後書き）

10000PV 2000ユニーク 総合評価100pt突破！

ありがとうございます。

こんな短期間にこれほどの方に読んでいただけたとは思っていませんでしたので凄く嬉しいです。これからも読んでくださると幸いです。

感想お待ちしております。

## 第一章 五話 旅

「今日はこの辺までにして休もうか」

日も暮れてきたことだし、暗くなってしまうては危険が増える。

「そうですね」

サーシャちゃんも同意してくれたので荷物を降ろす。

「それじゃ、用意しようか」

「はい！」

俺の言葉に元気良く返事をしてくれるところを見ると、まだまだ疲れはそれ程溜まっではないようだった。

「あとどれぐらいだろう？」

薪を取り出し、火をつけつつサーシャちゃんに尋ねる。

「そうですね……純良に行けば、明日の夜には着けると思います」

「そっか。それじゃ明日は早めに出発して、何とか明日中には着けるようにしたいな」

話をしながらもサーシャちゃんが食料の準備をしてくれている。

村から持ってきた物もあるが、肉や魚は見つけたら獲ったりして補充している。

サーシャちゃんが獲物を裁くのにそんなに抵抗がなかったのは驚いたけど、良く考えればこの世界なら日常的にそういう事をして

いても不思議じゃないなと思に至る。

村から王都を目指し七日程になる。

サーシャちゃんも一緒だし、随分と慎重に旅をしていたから聞いていたよりも時間がかかってしまったが、上手くいけば明日にも到着出来そうだ。

その間に、俺は何度もしたことはあったが、サーシャちゃんも旅や野宿に慣れてきたようだと手際良く料理する彼女を見て思った。

今、こうして俺とサーシャちゃんが二人で王都を目指しているのには理由がある。

あれは魔物退治をして数日経った日の事だった

\* \* \*

「検査？」

「ああ。大体十二丁十五歳までに必ず検査を受けなきゃいけない」

ギルドの話をしている時におっさんが言ったことだった。

なんでも、この世界の人間は絶対に魔力があるかどうかの検査を受けなくてはならないらしい。

「それで、魔力があつたらギルドに入れるのか？」

この数日で、俺はおっさんに対して砕けた話し方をするようになった。勿論おっさんが良いって言ったからだけど。

ちなみに名前も聞いたがその時には既におっさんと呼ぶのが定着していたのでそのままずっとおっさんと呼んでいる。

「いや、入れる……わけじゃない」

「どういうこと？ 魔力の量が一定以上無いと駄目とか？」

「魔力の量は関係ない。魔力があれば……強制的にギルドの学院に入ることになる」

「学院……？」

しかも強制的につて……義務教育みたいなもんか？

「簡単に言えば、ギルド員を育てるための場、だな。魔力を持つ人間は少ないしギルド、といか国にとつては喉から手が出るほど欲しい存在だからな。だから学院に通うための費用は国が出すんだが……」

……」

それで学院を出た後はギルドに所属して国のために働け、って訳ね。

魔力持ちは自分の意思で将来は決められないのか。

「それで……サーシャちゃんを？」

「ああ。連れて行つてくれないか？ 行くんだろ、ギルドに」

まあ、ギルドには行くつもりだったけど。

「今まで検査に行けなかったからな。行くにも長旅になるから護衛を雇わなきゃならんし……その点、兄ちゃんが連れてつてくれれば助かるな」

俺なら魔物とも戦えるしな。

「そういつことなら引き受けるけど……もしもサーシャちゃんが魔力持ちだったら」

「その時はアイツのことを頼む」

おっさんは俺に頭を下げた。  
それに俺は慌てる。

「ちょ、頭なんか下げなくてもそのつもりだって！俺にとってもサーシャちゃんは家族みたいなもんだしさ」

出会って数日だけど、あの魔物退治の日からサーシャちゃんは結構俺に懐いてくれていた。俺もそんなサーシャちゃんを妹みたいにしてる。

「そう言ってくれるとありがたい」

おっさんは下げていた頭を上げた。

「絶対無事にギルドまで送り届けるよ」

「頼む」

\* \* \*

と、まあ、そんな事があつたわけだけど。  
実は、ギルドの検査を受ける前に既に……サーシャちゃんが魔力



持ちであるのは確定なんだけど。

何で分かったかと言えば、まあ、俺の能力でとしか言えないんだけどな。

その能力は 『ステータス表示』だ。

最初から使えたこの能力だが、実は相手に触れることで、その人物のステータスまで見ることが出来るのだった。

気付いたのは全くの偶然なんだけどね。

サーシャちゃんが寝た後でステータスを確認しようとしたところ、その瞬間に彼女の腕が俺に当たった。それで表示されたのが俺ではなくサーシャちゃんのステータスだったから驚いた。さらにMPを持つてる事から魔力持ちであることにも気付いてそれ以上の驚愕。思わずサーシャちゃんの寝顔を凝視してしまった。

ちなみにサーシャちゃんのステータスは

名前	サーシャ
種族	人間
職業	農家の娘
称号	村娘
レベル	1
HP (体力)	15 / 15
MP (精神力)	21 / 21
STR (力)	8
VIT (耐久力)	7
INT (知性)	37
AGI (素早さ)	14
DEX (器用さ)	23
LUC (幸運)	12
カリスマ	
CHR	6

一般的なRPGっぽくHPが少なくMPが多い。INTもこの年頃の子にしては多分高い。あとは……基本的にこの世界に来たはかりの頃の俺よりステータスは高い。腕力とかも俺の方が低かったのは軽く落ち込むけど。

ま、そんな訳で、サーシャちゃんは検査後、確実にギルドの学院ってやつに入る事になるだろう。

「あ、シユウジさん。すみませんが、お水貰えますか？」

と、これまでの出来事を思い出していると料理中のサーシャちゃんから声がかかった。

「水？ えっと……はい、水」

袋から水筒を取り出して渡す。

「ありがとうございます！」

受け取って料理を再開するサーシャちゃん。

「もう使わない道具はある？」

「そうですね……包丁はもう使わないです」

「わかった。片付けとく」

「すみません」

「いやいや、これぐらいはしないかね」

そう言って包丁を水筒の水で洗って、布に巻いて袋に仕舞う。

「不思議ですね。それ……どこに行ってしまうのでしょうか？」

サーシャちゃんが料理の手を止めることなく、包丁を仕舞った袋を見て言う。

「いや、俺にもわからないけど……まあ便利だから気にしないでいいんじゃない？」

実は神様の道具です、なんて言えないしな。

「確かに便利ですよ。何でも入っちゃうし」

そう。この袋は『あの』袋なのだ。

何でも入る。しかも生ものも腐らない。

村を出る日、GPと引き換えに出来るあの携帯サイトでポイントを使い入手した。空間魔法覚えればいいやと思っていたが、予期せず大量のGPを入手できたので交換することにしたのだった。

その時、手に入れたGPは今まで集めていたGPの数倍だった。

なんで手に入ったのかは正しくは分からないけど、多分村の畑を魔物から救ったことが原因だと思うんだ。ただ魔物を倒すよりも人の為とかで倒した方が入手できるGPは多いんじゃないかなあ、と当たりをつけてみた。

まあ、ギルドに入れば確認できる機会も増えるだろう。

それにしても、ポイントを支払った瞬間、突然目の前に袋が現れたのはビックリしたな。

あ、ちなみに袋の中には同時に購入したPCも入っている。

このPCも優れものでバッテリーは無限。モニターの大きさも自由に変化させられるし、本当にどんな世界のサイトにもアクセス出来る。創作物もバッチリ見ることが出来た。著作権とかは……神だから多分関係ないんだと思う。うん、そういうことにしておこう。

食事の後は明日に備えて早めに寝ることにした。

ま、俺は見張りで起きてるんだけど……。

火に薪を追加してサーシャちゃん眠っていることを確認する。  
眠っているようなので自分のステータス表を表示した。

名前	神谷 修司
種族	神
職業	神
称号	神見習い
レベル	17
HP (体力)	158 / 158
MP (精神力)	129 / 129
STR (力)	123
VIT (耐久力)	115
INT (知性)	162
AGI (素早さ)	124
DEX (器用さ)	112
LUC (幸運)	203
カリスマ	
CHR	117

アビリティやらスキルやらは魔物退治の時から変化なし。

ちなみに、魔物退治のときに取得した方がいいが使わなかった魔法は『ブラスト』。これは小範囲、小爆発の魔法。まだ使ったことはないためどんな感じかは分かってない。

それにしても 随分強くなってるんじゃないか？

でも、この世界に来てチートを使ってから随分経つし身体能力にも慣れてきた。ここらでもう一度ステータス上げてみるか？ 今のままでも良いと思うんだけど、何かあったとき確実にサーシャちゃんを守るかと問えば出来ない可能性もあるし。

よし！ 上げよう！

全てを倍近い200程度まで上げる。

「うおっ！　これは……凄い」

上げた瞬間、身体が変わったのが分かった。  
ちよつと拳を突き出してみた。

「おお、『ブオンツ』だったのが『ボツ』に変わってる」

勿論拳を放ったときの音のことだ。

これ以上ステータスを上げてしまうと慣れるのに時間がかかりそうだ。時間かけてチマチマ上げていくつもりだし良いけどね。今回はこの程度にしておこう。

「あとは……」

『危険察知』と『気配を読む』のレベルもひとつ上げておく。

すると目指している王都の方角に沢山の気配というか、『気』を感じることが出来た。このままレベルを上げていけば「なっ！？」

この気は　！？」とか個人を判別出来るようになるかもしれない。  
ちよつと楽しみだ。

「スキルも覚えちゃえ」

呟いてスキル欄を表示する。

魔法ばかりで技術系のものがないのでそれ系を覚えることにする。  
そして覚えたのは　テイルズシリーズから『魔神剣』と『獅子戦吼』の二つを覚えた。魔神剣は剣技、獅子戦吼は剣が使えない状況がもしもあつた時のために覚えることにした。

「あれ？　てか二つとも衝撃波とか闘気とか出すよな……」

何か……もつと普通の人でも頑張れば使えそうな技も覚えとくか。ということで覚えたのが同じシリーズから『虎牙破斬』。これは上空に切り上げて跳躍、切り下げに繋げる技だ。上げと下げの間に蹴りを入れてもいい応用性！ テイルズでは繋ぎの技として使いやすかった記憶がある。何よりかつこいいい！

「チート終了……っ」と

満足してウィンドウを閉じる。

これで相当強くなったはずだが、これから力と技を使いこなせるよう努力しなきゃな。

そう思いながら、再び薪を足すのだった。

## 第一章 五話 旅（後書き）

主人公ドンドン強化するよーっ！  
てか話全然進んでないですね。

もっと早く進めてしまった方が良いかどうか。描写不足になりそうなのも気もする。

## 第一章 六話 ギルド

王都に着いたのはまだ夕方になる前だった。

夜までに着けばいいと思っていたものの、朝早く出発したこともあり予定より随分早い到着だった。

「ここが王都か」

でっかい門で検査され中に入るとやはり王都というだけあって活気のある街だった。それでも現代日本に住んでいた身としては驚くほど大きいと言うわけではない。大通りだって普通の道に見えるし。

「初めて来ましたが……凄いですっ!」

村からあまり出たことがないというサーシャちゃんは凄いはしゃぎようだった。

「街見るのは後にして、早く着いたことだし先にギルドに行く?」

本当は一晩宿に泊まって、検査には明日行くつもりだったけど、この時間なら今日でも大丈夫だろう。

それにこれから寮に入ればいつでも、どれだけでも街を見る時間はとれるだろう……言わないけど。

「そうですね。そうしましょう!」

テンションの高いサーシャちゃんはとても子供らしく可愛かった。



＊ ＊ ＊

「ここがギルドかあゝ！」

中央通りを少し進んだ先に大きな建物があった。看板には『ギルド』と書かれている。見たこともない字だったけど。何故か読むことが出来た。

そういえば、この世界でも普通に話せてるけど……よく考えたらおかしいよな。転生ってか身体を創りかえられたときにそういう能力みたいなのがデフォでついたのかもしれない。まあ便利だから深く気にしないことにしよう。

その大きいギルドの建物の向こうにはさらに大きい建物が見える。多分あれが学院なんだろうと思う。

「ギルドの検査って何するんだろう？」

「えっと……魔力があるか調べるらしいです」

それは知ってるけど、どうやって調べるんだ？

「魔力ってどう調べるの？」

「……分かりません。ごめんなさい」

「え、いやいや、サーシャちゃんは悪くないって！」

答えられなかったのが悪いと思ったのか俯いてしまったサーシャちゃんに慌てて声をかける。

「ま、行けば分かるんだしさつさで行こうか！」

誤魔化すように無駄に元気良く言ってみた。

「はい……そうですね！」

サーシャちゃんもそんな俺を見て笑顔になってくれたので良しとしよう。

\* \* \*

「いらっしやいませ。本日のご用件はなんでしょうか？」

ギルドに入り、正面にある受付。

受付嬢は金髪の美しいお姉さんだった。思わず見とれてしまうものの、横からサーシャちゃんの冷たい視線を浴び何とか言葉を紡ぐ。

「あ、あの……検査？　つてのを受けに来たんですけど」

「そちらのお子さんですね？　それではこの用紙に必要事項を記入してください」

そう言つて受付さんが一枚の紙を差し出してくる。

「あの、俺も……なんですけど」

なんか、サーシャちゃんだけが検査しに来たと思われてるっぽい

ので訂正してみたのだが、受付さんはジッと俺を見て、

「貴方も……ですか。失礼ですがお歳はいくつでしょう?。」

あゝ……そう言えば、普通検査を受けるのは十五ぐらいまでって聞いたな。俺は普通に高校生の平均ぐらいは身長あるし、実際年齢も一七歳なわけで……ここじゃこの歳で検査してないってのは不審に見えるのかもしれない。

「えゝ……十七です」

「その歳まで検査を受けていないのですか?。」

やっぱり不審者に見られてる。

「あゝ……その……えつと」

どう言えばいいんだろ?

「あ、あの!。」

そこでサーシャちゃんが言葉を発した。

「シユウジさんは記憶喪失なんです!。」

「記憶喪失?。」

サーシャちゃんの言葉を受け、俺に尋ねてくる受付さん。

「はい……まあ」

曖昧に返事をする。

「何か身分を証明できるものはありますか？」

「ない、ですね」

「それでは……どうしましょう」

受付さんは困ったように笑った。

「シユウジさんは魔物を倒せます！」

そんな受付さんにサーシャちゃんが言った。

「それは魔力があるということですか？」

「はい！」

答えるのはサーシャちゃん。

なんでサーシャちゃんがこんなに張り切ってるんだろう。

「記憶喪失……」

受付さんはそう呟いて、

「ではお名前をお聞かせ願えますか？ ギルド員かどうか調べますので」

「あ、はい。分かりました」

紙に名前を書いて渡す。

ま、ギルド員な訳ないんだけどね。普通に入学できるのかな……。その間にサーシャちゃんも用紙に記入していた。

「ありがとうございます。それでは一応二人とも検査しますので二

階の検査室へ移動してください」

俺たちから用紙を受け取って階段を指し示す。

「わかりました」

お礼を言っ て俺とサーシャちゃんは二階へ上がった。

\* \* \*

検査はすぐに終わった。

水晶のような物に手をかざすだけという、なんとも拍子抜けな検査だった。

「私にも……魔力があるなんて……」

結果は二人とも魔力持ち。分かったことだけだね。

俺はまだだけど、サーシャちゃんは学院への入学が決定した。

俺の方は明日には照会が終わるらしいので、明日もう一度ギルドに来るようにとのことだった。

サーシャちゃんのギルド校入学のことについての詳しい説明も明日一緒にするようだ。

「入学前に帰ればいいんだけど駄目ならおっさんに手紙書かないとな」

「そうですね……」

「やっぱ嫌？ ギルド員になるの」

「嫌、というか……怖いです。魔物と戦わなくちゃいけないのとか」

そりゃそうだ。今まで魔物は恐怖の対象だっただろうからな。いきなり、そんな魔物を倒せる力があるんですなんて言われても普通は怖いよな。

夜だからはぐれない様に繋いでいる手も若干震えている。

俺はなんつか、チートな力があつたし、命のやり取りをしてるってよりもゲーム的な感覚のが強かったかもしれない。人が相手だとどうなるかは、まだ想像も出来ないし。

「でも……シュウジさんと一緒にいられるのは嬉しいです」

そう言つて握る手の力を強め、俺を見て微笑んだ。

「……………」

あまりの可愛らしさに絶句してしまった。

そんな無邪気に嬉しいことを言われると「あれ？ 俺、惚れられてる？」って勘違いしちゃうじゃないか！ てか俺はロリコンじゃねえっ！ でもサーシャちゃんならイケル……って何をだよ、何をだよっ！？

「あの……どうしたんですか？」

繋いでない方の手で頭を抱え苦悩する俺を心配そうに覗き込む。

ヤメテ！ そんな純真な眼差しで俺を見ないで！

「い、いや……何でもないよ！ そ、それより……宿でも探そう！ 探さなきゃ野宿だよ」

考えていたことを悟られないよう必死に誤魔化す。

「そうですね。まだ空いてる宿があれば良いんですけど」

素直なサーシャちゃんは疑うことなく強引に変えた話についてきてくれた。

「そっか。早く探さなきゃ満室になることもあるのか。……じゃあ早速探そう！」

その日、三軒回り何とか小さめの宿屋で部屋をとることが出来た。ただし、一部屋しか空いてないのでサーシャちゃんと同室だが。

今まで近くで寝てたけど、野宿と部屋の中では何か全然違う。やたらと意識してしまう……これは、今日は寝れないかもしれないね。あと、久しぶりに風呂に入りたいです。このところずっと水浴びしかしてないもので……でも、小さい宿なため風呂なんてありませんでした。

さらに翌日　俺とサーシャちゃんのギルド学院入学が決定しました。

## 第一章 六話 ギルド（後書き）

お気に入り登録が100件に届きそうで驚き喜んでいます。

とりあえず今回はちょっと短いですが、これで第一章は終わりです。  
次からは新章に入ります。



## 第二章 一話 学院

ギルドで検査を受けて数日、遂に入学の日を迎えることとなった。すぐに入学出来ることになった俺は検査を受ける時期がよかったらしい。時期によっては結構な時間待たされるらしい。

説明されたシステムは、一年を四回に分け、その時までに参加した生徒を 期生として入学させるんだそうだ。

ちなみに俺は四期生。

四期生の中で一番年上……というか、ギルド学院始まって以来の高年齢になるそうだ。中学生か、下手したら小学生に混じって高校生が勉強するみたいなものだと予想して少々憂鬱になったが、サーシャちゃんが嬉しそうにしていたので気にしないことにした。

検査の翌日に宛がわれた寮の部屋でベッドから起き、制服に着替える。

白いシャツに黒いズボンという、現代日本の学生服に近いものだった。生地は勿論違うけど。

寮は当然のように男女別なのでサーシャちゃんとは別部屋になったのは良かった。ずっと同じ部屋だと心配……心配？ まさか俺がサーシャちゃんに欲情すると心では思っているのか！？ 別部屋になったと聞いて俺はホッとしたがそういうことではないはずだ！

まあ、いい。俺はロリコンじゃないってのは当然のことで疑うこと自体が無駄なことなのだ。

俺は思考を切り替えて朝食のために食堂へ向かった。

\* \* \*

「おはよう、サーシャちゃん」

先に食堂にいたサーシャちゃんに挨拶をして隣に座る。

「おはようございます！ 制服似合いますね」

俺を見て、そう言ってくれるサーシャちゃん。いきなり褒められてちよつと恥ずかしくなる。

「そういうサーシャちゃんこそ、凄く似合ってるよ」

女の子の制服も現代日本とそう変わらない。白いブラウスに黒いプリーツスカート。あと、リボンは何種類かあるようだが、サーシャちゃんは黒系のリボンだった。

「え、あの、ありがとうございます。でも、あの……スカートが短くて……恥ずかしいですね」

顔を赤らめてお礼を言いながらスカートの裾を押さえるサーシャちゃんが凄く可愛かった。

「それにしても、朝から豪華だよね」

二人して気まずい雰囲気になりかけたので話を変える。

「そうですね。こんな贅沢していいのでしょうか？」

野宿じゃ普通の食事は難しいし、サーシャちゃんの家在世話にな

つてた時もスープとパン。夜には俺の狩った肉が出てくるぐらいだった。普通に村で過ごすならそれが普通の食事なんだろう。だが、今日の前にあるのは具沢山のスープに卵料理、サラダにベーコン。さらに数種類のパン。

これは今までの食糧事情からすればかなり豪勢なものだ。

「ま、いいんじゃない？ 無料だし」

言つて、俺は「いただきます」して食べ始める。

基本、このギルド学院内において生活するためのもの、授業に必要な物は全部無料だ。その代わり、卒業後にはギルドに所属して働かなきゃいけないわけだけどね。

サーシャちゃんも「そうですね」と言つて、俺と同じ仕草をしてから食べ始めた。

実は初めて俺が「いただきます」って手を合わせたときには不思議な顔をしていた彼女だが、俺がそうする理由を話すと私もしますと言つてしたのが最初。それからはいつも彼女も「いただきます」と手を合わせるようになった。

食事を食べながら周りを観察するが、やはり同期生同士でグルーブになつていっぽい。

そりゃそうだよな。同じ時期に入学して同じ教室で学んでるんだから友達にもなりやすいよな。

当たり前だけど食堂にいる誰もが俺より年下に見えた。見えたつてか多分確実に年下なんだろうけど。中にはまだ十歳にも満たなそうな子もちらほらというっしやる。

つか俺、周りは年下ばかりで友達とか出来んのかな？

サーシャちゃんしか話し相手がいなくて寂しすぎる。そのサーシャちゃんだって、仲の良い女友達でも出来れば俺と話すことも

少なくなるだろうし。

……やばい。マジで心配になってきた。

\* \* \*

朝食の後、教室に向かったわけだが……学院広すぎ。

入り口に案内あったけど何度か迷ったぞ。その度に年下の子供に道を尋ねる一七歳の俺。正直言つて恥ずかしかったけどサーシャちゃんに代わりに訊いてもらうなんて出来なかった。だって、俺よりも歳が他の生徒と近いとはいえ、やっぱり恥ずかしいだろうからな。そんな思いさせるぐらいなら自分で効いたほうが良い。

そんなこんなで何とか教室に着いたんだけど……これまた予想以上の低年齢。サーシャちゃんよりも明らかに年下なのが七割。サーシャちゃんぐらいの子が二割。あとの一割は十五歳ぐらいに”見える”子だった。

”見える”ってのは大人びてるだけかもしれないし本当に十五歳程度なのか分からないからだ。まあ、一六歳以上ってことは有り得ないだろ。

そんな状況な訳で、どう見ても年上の俺は結構な注目を集めてしまった。注目されるのはまだいい……。問題は注目しつつも誰も話しかけようとしてこないことだ。これが結構辛い。

辛いので、俺は壁際の一番後ろの席に座って先生が入ってくるまで壁でも見て過ごそうかと思った。

「なんだか注目されてますね」

思ったのだが、サーシャちゃんが隣に座って話しかけてきた。

「されてるね」

サーシャちゃんを無視できるはずもなく、視線を壁からサーシャちゃんへと移す。

「やっぱり……田舎者だと思われてるのでしょうか」

サーシャちゃんは自分のせいで注目されてしまっていると思ったみたいだ。

「そんなことないよ。サーシャちゃん可愛いし。てか注目されてんのは絶対に俺だと思うよ。普通に入学する年齢より歳が上なんだからさ」

フォローしておく。俺が原因のことなんだからサーシャちゃんが気負うことなんて何もないんだ。

「え、そ、そんなっ……可愛いなんて……ありませんよ!」

サーシャちゃんは顔を赤くして頭と手をブンブン振った。

「え? 気になったのそっち?」

「……え、何がですか?」

「いや……何でもないよ。とにかくサーシャちゃんが気にすることじゃないって」

「そうですか……分かりました。それよりもっ!」

なんだか、突然サーシャちゃんが声を大きくした。

「と、突然どうしたの？」

俺はビックリして訊く。

「教室で”ちゃん”と呼ばれるのは恥ずかしいので呼び捨てにしてもらえないでしょうか!？」

なんか鬼気迫る勢いだった。

「う、うん。分かった。……サーシャでいい？」  
「はいっ!」

サーシャちゃ      サーシャは嬉しそうに返事をした。

「じゃあ俺のことも呼び捨てで良いよ」

「駄目です!」

「えー、何で？」

「シュウジさんは年上じゃないですか。それにシュウジさんはシュウジさんです!」

良く分からない論理で反論されたのだった。

\* \* \*

まずクラスメイト達の簡単な自己紹介。

やはり殆どは見た目通りの年齢みたいで、一人だけ十五歳がいた。その後、魔物の話やギルドの話を聞かされ、早速実技に入った。

最初は自分の魔力を感じるところからだった。小さい杖のような物が全員に配られる。これは魔力を集めやすいアイテムらしい。これに魔力を集め、普段感じない感覚を感じる、と言う。

「……………なんつゝ大雑把な説明」

若干呆れつつ、集めて見る。

俺は普通に魔法も使えるし簡単に出来た。ちゃんと魔力も感じる。ただ、サーシャ含め他のクラスメイトたちは苦戦しているようだった。

「サーシャ、出来た？」

隣でうんうん唸っているサーシャに声をかける。

「……………難しいです」

まあ、あの説明じゃそうだよな。  
なんかアドバイス出来ないものか……

「じゃあさ、身体全体を血液みたいに魔力が流れてるのを思い浮かべてみて」

「……………はい。分かりました」

俺が言つとサーシャは目を瞑って集中する。

「その流れが手のひらから伝わって杖にいくようにイメージして」

「……………はい」

俺も大雑把にしか説明出来なかった。チートだから普通に使うことに対して上手く説明出来ないのです。

「あつ！ 出来ました！」

目を開けて俺を見る。

「お、ほんとに？」

「はい！ 手から杖に何かが流れるのを感じました！」

嬉しそうに杖を両手で握る。

あんなアドバイスで簡単に成功するって……もしかしたらサーシヤは優秀なのかもしれない。

「感じたら、次はその魔力を火に変えるようイメージしてください！それがファイアの魔法です」

教師の人の大きな声。

またそんな大雑把な………つつても、それ以外に説明のしようがないつてのもあるけどな。覚えたときに頭に流れ込んできた使い方もそんな感じだったし。

あの時はなんとなく出来ちゃったし、そんなもんなのか？

「……………全然出来ません」

これにはサーシヤも苦戦しているようだ。アドバイスも出来そうにない。

他の子もみんな出来ていないし、まだ魔力を感じることが出来ない。



い子も結構いるみたいだ。

なんて考えていると、少し離れた所でどよめきが起った。  
なんだろうと見てみると　そこには杖の先に火を灯す少女がいた。

「凄いです」

サーシャもそれを見て感嘆の声を上げる。

「今期はここ最近で一番の優秀なのが入ると聞いていたが、さすがだな！」

教師が少女に話しかけ、

「別に……この程度で褒められても嬉しくありません」

少女は鬱陶しそうにその場を離れた。

「うわゝ……可愛げのない子供だな」

思わず呟くとキツと睨まれた。

結構離れてるはずなのに聞こえてるとは……恐ろしい。

それにしても、一発で成功させると優秀になっちゃうのか。下手に目をつけられるのも嫌だな。

平凡な感じが良いよな、やっぱ。

そうなるとこのクラスの平均のステータス値を知りたくなるな。

「彼女は天才だからね。大人顔負けの賢さだし他人を見下している節があるね」

と、俺の呟きに答えるように誰かに話しかけられた。

「だよな……って、だれ？」

振り返るとそこにはクラス唯一の十五歳である少年が立っていた。

「やあ、僕はレイ。歳が近いもの同士仲良くしよう。そちらの可愛いお嬢さんも宜しく」

爽やかな笑顔で言った。

「あ、はい。よろしくお願いします」

サーシャは頭を下げた。

俺は差し出された手を握り

「……あん？」

「どうか、したのかな？」

「あ、いや、何でもない。よろしく」

握手を終え、立ち去るそいつの背を睨みつける。

「どうしたんですか？」

サーシャが俺の様子がおかしいことに気付いたのか問いかけてくる。

「あいつにはあんまり近づかない方がいい」

「……何かあったんですか？」

「いや……まあ、気をつけて」  
「……？ はい」

良く分からないといった風だが一応返事はしてくれた。

名前	シュナイツ
種族	人間
職業	ギルド所属、諜報員
称号	ローレル帝国の間者
レベル	28
HP（体力）	108 / 108
MP（精神力）	210 / 210
STR（力）	80
VIT（耐久力）	73
INT（知性）	102
AGI（素早さ）	148
DEX（器用さ）	132
LUC（幸運）	57
カリスマ	
CHR	28

握手したときに見た奴のステータス。

怪しい要素満載と言うか、そういう要素しか見当たらなかった。

絶対面倒なことになると半ば確信めいた予感を胸に、俺は頭を抱えるのだった。

## 第二章 一話 学院（後書き）

またロリっ子が増えちまったよ……。

何か今回は文が安定してない気がします。  
何がどう、とかは分からないんですが。

## 第二章 二話 友達

レイと名乗った男。本名シュナイツは目立たないよう、何度かわざと魔法を失敗する振りをしてから成功させる。ということを授業中繰り返していた。

俺もそんな風にして目立たないようにしようと思ったが、問題が発生した。

俺は 魔法を失敗できなかったのだ。

隅でコソコソとやっていたため、成功した目撃者はサーシャだけだったのが幸いしたが、これでは不用意に魔法は使えない。

一発で成功したのは、あの天才少女だけ。ここで俺も魔法を使ってしまったたら確実に注目されてしまう。

これは授業後、失敗する練習をしなければならない。

もうひとつ、授業でまだ俺が覚えていない新しい魔法を教わった。風を起こす魔法だ。風を起こすと言っても初日に授業なので、フアイアと同じく実践では使い物にならない程度の魔法だが。

それは何度か失敗して覚えることが出来た。

フアイアでイメージのコツを掴んだサーシャより遅く、クラスの平均より若干早いぐらいの習得速度だった。

普通に覚える分には、俺は優秀とまではいかないが、まあまあ早いぐらいらしい。

わざと魔法を失敗できるようになるまでは新しい魔法は能力を使わず授業で覚えた方がいいだろう。

授業以外での出来事といえば……この日の授業でクラスの半分ほどのステータスを入手した。

平均が分かれば、手加減の度合いも分かるし……最悪、平均値までステータスを下げれば怪しまれることはないだろう。

学院生活……予想以上に不自由だ。

初日の授業はもうすぐ終わる。

出来れば今日中に天才少女のステータスを見たかったのだが難しいようだ。

「それじゃあシュウジさん。夜、食堂で」

「あいよ。昨日ぐらいの時間に行くから」

「はい！」

寮が分かれているサーシャとは授業が終わったら別々になることになった。

そして

「リヴィちゃん、一緒に帰ろっ！」

サーシャは、あの天才少女に声をかけた。

「……うん」

少女も拒むことなく、一緒に教室を出て行く。

誰に対してもキツイ感じのあの子が、何故かサーシャには普通に接していた。

いつ、二人が仲良くなったのかは知らない。気がついたら仲良くなっていた。サーシャは素直な良い子だし、もしかしたら誰とでも仲良くなってしまう才能があるのかもしれない。

これは……今日はステータスが見れなかったけど、意外と簡単に見える日がくるかもしれないな。

＊ ＊ ＊

部屋に帰った後、早速魔法を失敗させる練習を始めた。

「……上手くないかな」

これが全然出来ない。

失敗がこれほど難しいとは……。

「どうすりゃ失敗出来るんだ？」

これも全く分からない。

俺は杖を放り出してベッドにダイブした。

「魔法失敗させる技能とかないかな……使い道殆どなさそうだけど」

仰向けに寝転がってステータス画面の技能欄を表示させる。

数が多くて把握しきれないけど、それだけに無駄技能もあるんじゃないかと期待出来る。

「おっ、これなんか良さ気だな」

目についたのは『魔力操作Lv1』という技能。

余ってるポイントで取得してみる。

取得した瞬間に変化が起こる。

「おお！ 魔力の流れつてのがハッキリ分かるぞ！」

今までは漠然と「これが魔力か」ってこの世界に来るまでの身体との違いで分かってたものがハッキリと自分の身体の中にあるのが分かった。

右の手のひらに集まるよう集中してみる。

「なんか……今までと全然違う」

手を中心に周りに溢れる位の魔力が集まった。見えないけど。今までは魔法を覚えて、使う感覚が流れ込んできて適当に使ってたから魔力を自分で動かすなんてことはなかったからな。

ああ、魔法剣使ったときにちよつと操作した……のか？ でもあの時よりも全然操作できる量が増えた気がする。今なら、前みたいに薄く伸ばさなくても魔法剣が使えるはず。

「これなら……出来るか？」

ふと思いついたことを実践してみようと、放り捨ててあった杖を拾う。

「魔力を流して……ファイア！」

唱えると同時に魔力の流れを止めてみた。すると

「出来た！ 失敗出来た！」

杖に送り込んでいた魔力が霧散。火はおこらなかった。てか、失敗して喜ぶって相当変だよな。



「ま、これで授業も受けやすくなったな」

悩んでいた事柄が、意外にも簡単に片付いてしまい拍子抜けする。良いことだけどさ。

悩みというか心配事がひとつ解決して気分が良くなった俺は、そのままベッドに腰掛けて技能欄を流し見ていた。

「なっ……これは……」

とんでもない物を見つけてしまった。

これを取得したら俺はあの病にかかってしまうかもしれない……が、チートな能力を手に入れた俺としては、手に入れるべき技能でもあるそうだ。

その名も

「……『リミッター』だと!？」

しかも説明文が『力・能力を制限する。リミッターレベルの数と能力は自由に設定できる』とある。

これはリアルに『後一回……後一回、俺は変身を残している』的なことが出来るようになるじゃないか! さらに『くっ……やつが……あいつが出てくる! 俺が抑えているうちに早く行け!』みたいな。いや、リミッターだから外しても“あいつ”が出てくることなんてないけどさ。

「どうする……ポイントはギリギリ足りるぞ」

本当にチートを使わなくてもギリギリで取得できるだけのポイン

トはある。

ただし、他の技能を取得できるだけのポイントは残らないが……。

「取得」

してしまった。

というか、これは男の子なら、こんな能力を手に入れてしまったら取得するしかないじゃないか！ 厨二がなんだっ！ この世界じゃそんな病気は存在しないんだ！

「さうて、レベルとステータスはどうしよっかな」

俺はノリノリでリミッターの設定を考えた。

とりあえず、一番リミッターがかかっている状態のLv3はサーシヤより少し上、Lv2でステータス数値100程度。さらにLv1でリミッターかける前の状態。さらにさらに、リミッター解除でその倍になるようにした。これは不足の事態に備えてのことで、基本的に使うつもりはない。

これからの成長、展開次第でリミッターの数値も弄っていくことになるだろう。

\* \* \*

翌日 朝、食堂にて。

「サーシヤがどうしても言うから…… 本当は嫌だけど仕方なく

宜しくしてあげてもいいわよ」

不遜な態度で目も合わせずに言ってきたのは 例の天才少女だった。

彼女は俺の席の隣に立って手を差し出している。

「……………はい？」

思わず聞き返してしまった。

「だから、サーシャがどうしてもって言うから！」

少女は怒ったように声を大きくする。

「言われた……って、何を？」

「だ・か・ら！ アンタと仲良くして欲しいって！」

俺は少女の顔を半目で見つめ、

「いや、これは仲良くしようって雰囲気じゃないだろ」

何も考えずに思ったままを口にしてしまった。

「なっ！」

少女は顔を赤くして、初めて俺の顔に視線を向けた。

「あ、あたしは別に仲良くなんてしたくないけど！ でもサーシャが！ サーシャが言うから！」

必死になって叫ぶ少女。

不覚にも可愛いと思ってしまったが、何度だって言おう俺はロリコンじゃないと。

「ちょ、リヴィちゃん！？ シュウジさんも！」

そんな時、サーシャが慌ててやってきた。

「二人ともなんで喧嘩してるんですか！？」

「だって、あたしはサーシャの言うとおりにしたのに、こいつが！」

すぐに答えたのは少女だった。

「俺は何がなんだか分からないままこんな状況に」

俺もありのまますを答える。

「あゝ……えっと、なんとなく分かりました」

俺と少女を見比べて困ったように笑ったサーシャ。さすが賢い子なだけある。すぐに状況を把握してくれたようだ。

「えっとですね」

サーシャは少女を宥めつつ俺に説明を始めた。

サーシャの説明はこんなところだ。

目の前の少女は天才と呼ばれ、さらにこの性格もあって友達がない。サーシャが始めての友達らしい。そこでサーシャは俺とも仲良くして欲しいと少女に言ったそうだ。

そして、

「リヴィちゃん、言い方はこんなですけど照れてるだけですよ」  
「だそうだ。」

「へえ」

俺は少女を見る。

「な、なんだよ？」

相変わらず顔は真っ赤だけど、どうやら怒っている様子はない。  
これが照れているということなのか。

「ま、そういうことなら。俺はシュウジ。呼び方は好きにしてくれ」  
手を差し出す。

「リ、リヴィエド」

少女 リヴィエドがその手を握り返した。  
それにしても……なんだか名前がゴツくないか？

「リヴィで……いい」

耳まで真っ赤になって言う。

「よろしく、リヴィ」

「あう……よ、よろしく。シュウジ」

呼び捨てかい！

ま、まあいいけど。好きに呼べつつたしな。

「ちょ、リヴィちゃん！？ さすがに呼び捨てはどうかと思うよ！ シュウジさんは年上なんだし」

サーシャが慌てている。

「え？ あたしは誰でもそう呼ぶぞ」

サーシャに答えながらリヴィは俺の手を離す。

「だ、駄目だよ！」

「じ、じゃあ何て呼べば良いんだ？ サーシャみたいに呼べばいいのか？」

「リ、リヴィちゃんぐらいの子だったらお兄ちゃんとかでいいんじゃないかな！？」

な、なん……だと？

サーシャの言葉に戦慄する。

「や、やだっ！」

即効で否定するリヴィだった。

「な、なんで？ 呼び捨てよりいいと思うんだけど。仲も良さそうだし。ほら、呼んでみて」  
「ぜ、絶対やだっ！」

そこまで拒否されると若干悲しくなるぜ。

「ほら。シュウジお兄ちゃんって」

「う、うううう………」

顔は真っ赤でプルプル震えているリヴィイ。

「シュ、シュウジおに、おにい………お兄ちゃ　　やっぱり無理！　絶対だから！　絶対だからなっ！」

言いかけて、やっぱり無理だったのか、リヴィイは捨て台詞を残して食堂を飛び出してしまった。

「なんであんなに嫌がるんでしょうか？」

「……さあ？」

あの様子じゃ呼んでくれないかと、ちょっとガツカリしてる自分がいた。

サーシャに『シュウジお兄ちゃん』と言われ、リヴィイも言いかけたとき、俺の胸に何か熱いものがよぎった気もしたがきつと気のせいだろう。

「と、とりあえず………食事にしようか」

「そうですね」

俺とサーシャは二人並んで朝食を食べるのだった。

\* \* \*

ちなみに、握手の時、当然リヴィのステータスは入手していた。  
これがそのステータスだ。

名前	リヴィエド
種族	人間
職業	ギルド学院生
称号	天才少女
レベル	5
HP（体力）	23 / 23
MP（精神力）	105 / 105
STR（力）	12
VIT（耐久力）	14
INT（知性）	62
AGI（素早さ）	31
DEX（器用さ）	37
LUC（幸運）	26
カリスマ	
CHR	3

こんな感じだった。

CHRが3って……まあ、あんな性格じゃ人望はないか。

それにしてもMPがバカ高い。さすが天才ってところか。

スキルは初級魔法は全て取得済み、さらに数個ほど中級の物まであつたのには驚いた。



## 第二章 二話 友達（後書き）

なんか、このロリッ娘書きやすい。  
そしてロリコンの道を進む主人公。  
話が進んでないのはどういことだろう？  
学院編は基本マツタリ進行かもしれないです。

## 第二章 三話 罫

「どう、みつけた？」

俺とサーシャにリヴィが尋ねてくる。

「私はこれだけしか……」

袋から中身を取り出し両手に広げるサーシャ。

「あ、それ毒草よ」

「あ、ほんとだ！」「ごめんなさい」

その中のひとつを指差してリヴィが告げるとサーシャは恥ずかしげに慌てて謝った。

「謝らなくていいよ。それを学ぶための授業なんだからさ」

「……はい」

俺がフォローするも落ち込んだ様子のサーシャは結構気にしてしまっタイプだった。

「あんたは？」

リヴィが話を変えるように俺に問いかけてくる。

「ん……ああ、こんだけ」

俺は授業用に買った普通の袋をリヴィに投げ渡す。

「はあ！？　なんでこんな一杯あるの！？　まさかアンタ……その辺の雑草詰め込んだんじゃないの？」

「違うから。中、確かめてみればいいじゃん」

「勿論よ」

リヴィは袋の中身を地面に出して調べ始めた。

俺たちは今、授業で薬草採取をしていた。

ギルド員になれば怪我をすることもある。そんなときに薬草の知識があるのとないのでは大きな差がある。なので、今日は、昨日教室で習った薬草を学院所有の森で採取することになった。

実技を行うにあたり、三人一組でチームを組んだのだが、俺たちは考える間もなく一瞬で決まった。

リヴィと友達（一応）になったあの日から、俺たちは一緒に行動することが多くなった。俺とサーシャは元々入学前からの知り合いと言うことで入学後も寮以外では良く行動を共にしていた。そこに俺たち以外とはほとんど話もしないリヴィが入ってきた形だ。

そんな三人だから他の誰かと組むなんていう選択しは出てこなかった。サーシャは他の女子とも上手く付き合っているようだが俺やリヴィ程は仲良くない、と思う。

まあ、そんな風にすぐに決まったがチーム編成が自由で本当に良かった。教師が強制的に決めて、あのスパイと同じ班になったら気が休まらないからな。

そんなことより、今は実習の話だ。

勿論実習前に見本は見せてもらったが、サーシャが間違える程度、薬草に良く似た毒草も生息しているのだ。

俺たち三人は別々にある程度集めてから集合して採取した物の確認作業をしているのだった。

「……ほんとに全部薬草だ」

確認していたリヴィが感心したような声を出した。

「はっは。見直したか？」

「ま、まあ………少しだけ」

滅多な事では人を褒めないリヴィにそう言われ、俺はちょっと嬉しくなった。多分リヴィより多く集めたのが良かったのだろう。

「さすがシュウジさんです！」

先ほどまで落ち込んでいたのが嘘のように、両手を胸の前で合わせ輝く瞳で見つめられて恥ずかしくなった。

「なんでそんなに薬草に詳しいのよ……普通見分けることが出来てもこんなに集められないのに」

集めた量で俺に負けたのが余程悔しかったのだろうリヴィが忌々しそうに俺を見て言った。

「ん、まあ俺の場合、こんな作られた森じゃなくて野生の天然産な森で生活してたからどういう場所にどんな薬草があるのか分かるんだよね」

リヴィの疑問にそれらしい答えを返す。

実際は『薬草採取』の技能のおかげで簡単に見分けられるからな

んだけどね。

「はあ！？ 森で生活！？」

薬草とかよりもその事にひどく驚いている。

「うん。普通に森で狩りして生きてた」

「野生児？」

野生児で……まあ今の話だけだとそう思つのも無理ないか。

その後、学院に帰りながら俺が記憶喪失であるという設定をリヴィに話した。

目立ちたくないからクラスでそれを知っているのはサーシャだけだったのだが、一緒に行動することが増えているリヴィには話しておいた方が良さだろうと思って教えることにしたのだった。

リヴィの反応と言えば、

「その歳で何で学院に入ったのか疑問だったけど、それで納得した」

と、そんな感じのあっけないものだった。

だけど、そこから話が膨らんでいき、サーシャとの出会いまで離れたところでサーシャが

「シュウジさんは私の村を救ってくれたんですよ！」

嬉しそうに言ったサーシャのその一言で話す予定のなかったことをリヴィに追求される破目になる。

「救った？ どういうこと？」

「シュウジさんは村を襲う魔物を倒してくれたんです！」

「……………魔物を、倒した？」

段々と鋭い目つきになっていくリヴィイ。

俺は心の中で、サーシャもうヤメテと祈り続けていた。

「そうです！ 村を襲う魔物は俺が倒す。だから安心して待っていてくれ。必ずかえってくるから。そう言って次の日には本当に魔物を倒しちゃったんです！」

「へえ〜」

何故か目を閉じてウツトリした感じに話すサーシャにリヴィイが冷めた目を向ける。

てか、何か実際と違くないですか？ 俺が何かイケメンになってるんですけど。

「……………ねえ」

リヴィイはウツトリしているサーシャを放置することに決めたようだ。まあ、それでも俺たちの後ろを歩いてきてるから放つといっても大丈夫か。

「なに？」

「魔物倒したって……………本当なの？」

ああ……………どうしよ。

「えっと……………まあ、一応」

なんか今更誤魔化せそうもないし……………話してもいいかな？

「どうやって？ 授業もそんなに優秀じゃないし……倒せると思えないんだけど」

疑わしげな眼差しで問い詰めてくる。

やっぱりそれ聞くよな。学院じゃサーシャの方が優秀だし、俺はまだ攻撃魔法も使えない戦いの素人だしな。剣だつて使つて見せたことはないし、ステータスだつてサーシャより強く、リヴィより弱いぐらいに抑えてるからな。まあ、力とかそいうのはリヴィより高いけど学院じゃ見せる機会もないからな。

じゃあ、実は使えるんですって……言うか？ 言つていいのか？ でも言わなきゃこの状況は誤魔化せないよな。

「あのさ……話してもいいんだけど」

「なに？ 早く教えなさい」

「誰にも言わないで欲しいんだけど、いい？」

「……………いいわよ」

少し考えた後、リヴィは頷く。

「実は学院に入る前から魔法使えるんだよね。それも戦闘向きの奴」

比較的軽めに言つてみた。

「はあっ！？ なんで黙つてたのよ！ 授業は手抜いてたわけ！？」

凄くお怒りになりました。

「手は抜いて……まあ抜いてたみたいなものか。だけどさ……」

「……なによ？」

不機嫌にこちらを睨みつけるリヴィ。

「俺、こんな歳で入学ってたでさえ目立つのに、さらには記憶喪失で魔法使えて魔物を倒しました、なんて言ったらとんでもないことになりそうだろ？」

「まあ……それもそうね」

俺の説明にリヴィは納得したものの、その表情は不機嫌そうなままだった。

「だから黙ってて欲しいんだけど」

「いいわよ」

即答。

「その代わり！」

「な、なに？」

「今度、アンタの使える魔法見せなさいよね」

「それで黙っててくれるなら」

俺はリヴィの言う通りにすることにした。

「もう隠し事はないでしょうね？」

「えっと……ない、かな」

あるけど、それは絶対に言えない。サーシャにだって教えてないんだ。

ステータス関係のことは絶対に言っちゃいけない。



「なら、いいわ」

「ごめんな。隠してて」

俺はリヴィに謝った。

折角仲良くなれたんだ。隠してたことで嫌われたりしたら嫌だしな。

「いいわよ、もう」

リヴィは一瞬目を合わせたあと、すぐにそっぽを向いて小声で呟いた。

数日後の休日。

リヴィには魔法剣を見せた。

教えるとせがまれたため教えることに。俺もリヴィに学院では教えてもらってない攻撃魔法や役に立つ魔法を教えてもらう約束をした。

\* \* \*

さらに時間は経ち 学院卒業が近づいてきた。

最初に決めたグループで授業を受けてきたが、卒業試験もそのグループで受けるらしい。つまり。俺、サーシャ、リヴィの三人が俺たちのグループだ。

今日、これから、その卒業試験について説明がある。

「卒業試験って何するんだろうな？」

教室で教師を待つ間、俺は隣に座る二人に話しかける。

「さあね。ま、なんになろうとあたしに掛かれば楽勝ね」

リヴィは不適な笑みを浮かべる。

「シュウジさんとリヴィちゃんが居れば何だって大丈夫です！」

サーシャが自信たつぷりに人を当てにする意見を言う。

「いや、サーシャだって優秀なんだから頑張ろうよ」

「はいっ！ 頑張ります！」

他の班は結構みんな緊張してるのが分かるけど、うちの班はのほほんとした空気が流れていた。

ま、リヴィは魔法教えあったあとも一緒に勉強してたからお互い学院生レベルじゃないのが分かってるし、サーシャも一緒になって学院の魔法以外にも勉強している。リヴィが言うように普通の試験なら楽勝で合格出来るはずだ。

少しして、教師が教室に入ってくる。手には大きめの箱を抱えていた。

「卒業試験について説明する！」

教師が声を上げると生徒たちは一斉に静まりかえった。

「この箱に紙が入っている。その紙にはそれぞれ別の任務が書かれている。その任務を達成することが卒業試験だ」

「任務ってギルドのですか？」

生徒の一人が質問する。

「そうだ。その中でも比較的簡単な任務を厳選している。勿論魔物が出る任務もあるがな」

生徒たちが息を呑んだ。

「ま、余程のことがなけりや死ぬことはないから安心しろ」

教師は笑いながら言うが……余程のことがあれば死ぬんだろ？

「じゃあ班の代表はくじを引きにくるように！」

それで教師の話は終わった。

そこら中で生徒たちが騒ぎ出す。

「んで、俺らは誰が行く？」

俺は二人に問いかける。

「シュウジでいいんじゃない？」

「私もそれでいいです！」

「あいよ」

軽い返事を返してくじを引きに行く。ま、誰が行っても同じだろ。

くじを引いて二人の下へ戻る。

「どんな任務でしたか？」

サーシャがすぐに話しかけてくる。

「王都から二日ほど歩いたところにある洞窟の奥にある珍しいコケを採ってくることだって」

所謂、採取系任務ってやつかな。

「ふん。簡単そうじゃない。で、そのコケって何？」

「光ってるからすぐ分かるって。ヒカリゴケって言っらしい」

「コケが光ってるなんて凄いです！」

薬とかになんのかな？

「期限は明日から一週間だって」

俺は紙に書かれた期限を伝える。

「それじゃ今日は街に行って準備ね」

「だな」

「はい！」

\* \* \*

準備して旅に出て、何事もなく洞窟のある山に辿り着いた。

洞窟の前に来た瞬間、俺たちの来た方とは逆側から爆発したような物凄い音が聞こえてきた。

「な、なんですか!？」

「……爆発?」

二人もそちらを見ている。

音がした辺りから煙が上がっていた。

「ちょっと見てくる。二人はここに居て!」

「あ、ちょっと!」

「シュウジさん!？」

俺は一言言っただけ煙の方に走る。

二人に呼び止められた気もしたが走り出していたせいもあってそのまま向かうことにした。

走って五分ほどで煙の上がつている所に出た。

地面が抉れ、周りの木は倒れ、近くに人が倒れていた。

「おい! 大丈夫か!？」

俺は近づいて倒れている人物を抱き上げる。

「……ぐっ」

呻き声を上げたその人物は、サーシャと同じぐらいの歳の少年だった。

「お前は……」

顔を見て、同じクラスの学院生だと分かった。

「大丈夫かつ！？ 何があつた！？」

話しかけるが返事はない。

「一体何が　っ！？」

周りを確認しようとしたとき、俺は何かを感じた。  
その一瞬後

「フレイムバーストッ！」

声が聞こえて反射的に身体を横に逸らす。  
燃え盛る巨大な火の玉がこちらに向かってくる。

「くっ！」

が、左腕を魔法が掠める。

「誰だ！？」

魔法が飛んできた方に視線を向ける。

「まさか避けられるとは思わなかった」

そこから現れたのは……

「お前……」

その人物も学院生だった。

最初に見た目で十五歳ぐらいだと思った少女だった。

「簡単に罠にかかってくれて嬉しいわ」

「……罠だと？」

腕を押さえて睨む。

くそ……予想以上にひどい。治療しないとともに動かせそうもない。

掠めただけでこの威力。こんなの学院生が使えるレベルの魔法じゃないぞ。

「ええ。貴方たちをバラバラにすること」

「狙いは……何だ？」

バラバラにして一人ずつ始末しようってか？

……まさか、それが卒業試験？　って、んなわけないよな。

「狙いは、そうねえ。最初はあのむかつくガキだけだったんだけど……もう一人の子も結構優秀みたいだし一緒に頂いちゃおうかしら」

狙いはリヴィ？　それにサーシャもだと……？

「何で二人を狙う！？」

俺は叫ぶように問う。

「それを知る必要は無いわ」

「……何？」

「貴方はここで死ぬんだからねっ！」

言って杖を向けてくる。

「フレイムバースト！」

「ぐっ！！」

転がって避ける。

「フレイムバーストッ！」

避けた先、別の場所から別の声。

「ぐああっ！」

その魔法の直撃を受ける。

「はぁ……くっ、はぁ……」

転がって身体に纏わりつく炎を消す。

「ぐう……なっ！？ お前は」

そこには先ほど倒れていた少年が俺に杖を向けて立っていた。

「ふふ。だから言ったでしょ？ 簡単に畏にかかってくれて嬉しい



わって」

女のあざ笑うかのような声。

「お前ら……思い出した！」

こいつら……あのスパイの奴と同じグループだ！

## 第二章 三話 罫（後書き）

まったり進行はやめにしたぜ！

学院編をマツタリ進行したら全然話が進められなかったので書き直しました。

日常編はやめても、これから結構長い話になると思いますので。あくまで予定ですが。

## 第二章 四話 解除

「お前達も……帝国の間者か？」

魔法を撃たれ、転がった先に生えている木に体を隠すよう寄り添わせ様子を伺いながら問いかける。

「へえ……なんでアンタが知ってるんだい？」

女が俺の言葉に表情を愉快なものに変える。

「俺の質問が先だろ……。で、どうなんだ？」

女の質問に答えるつもりはない。

だが、こいつ等が持つてる情報は引き出せるだけ引き出してやる。まず間違いなく、この二人はあいつの仲間だ。

なんでギルドの学生がスパイの仲間をしてるのか分からない。だからここで必ず聞き出す。……そして、その理由次第で、絶対に倒さなきゃいけない。

初めて人を殺すことになるかもしれない……それは怖い。怖いけどサーシャとリヴィが危険な目に遭うのを防ぐためなら……やってやる！

「まあ、仲間と言えばそうだね」

女が笑いながら言う。

「……何故答える？」

少年が女を睨みつけた。

そんな少年を楽しそうに見て、

「どうせ殺すんだからいいだろ？」

「必要ない。殺すならすぐに。彼は何か企んでいそうだ」

「分かってるよ。でもその方が面白そうでしょ？ ま、何を企んだところでどうすることも出来ないだろうけど」

楽しそうな女とは対照的に少年は表情から何も読み取れず、冷静にこちらの思惑を分析していた。

サーシャも随分と子供らしくない子だけど、こいつも相当だ。雰囲気ですぐに普通の学生なんかじゃないのが良く分かる。あの少年からは情報は引き出せないだろう。

だとすると、やはり

「どんな繋がりだ？ お前も帝国の者か？」

この女から聞き出すしかない。

俺をナメてくれているうちに全部吐いてもらっぜ。

「はあ？ ふふ、アタシは帝国なんてどうでもいいのよ」

「……なんだと？」

帝国の関係者じゃない……？

「というか、帝国ってゆーか国自体がどうでもいいの」

「あんたはこの国の出身だろ？ なんで奴に味方する？」

「ん？ 確かにその通りだけど……さっきも言ったようにアタシはこの国もどうでもいいの」

やっぱり出身はこの国、エスティアであるようだ。

「どうでもいいなら、何で帝国につく？」

俺は一番訊きたかったことを尋ねた。

「簡単なことよ。この仕事が上手くいった暁には帝国でそれなりの地位を用意してくれることになるのよ」

「地位……だと？」

そのためにサーシャたちを犠牲にする気ってことか？

「そう。アタシはね……上に行くためならなんだってするわ。それこそ裏切りだってするし、そのために必要な殺しだって厭わない。上に行けるなら別にこの国でなくても構わない」

なるほどね。

こいつは自分本位な人間だ。自分のためなら他人が犠牲になろうともどうでもいいと思ってる。しかもその犠牲が、いくら天才とはいえリヴィのような幼い子でも構わないときてる。

「……気にいらねえ」

呟きが漏れてしまう。

「別にアンタに気に入られようが気に入られまいがどうでもいいんだけど」

女は気にした風でもなく言った。起こった様子も無いことから、

本当にどうでもいいのだろう。

「ま、でも……だったらこの坊やはもつと気に入らないかもね」  
「……おい」

そう言っで自分を指差した女を睨む少年。

「……どういう事だ？」

俺は訊きかえず。

もつと気に入らない理由だと……それは一体なんだ？

「こいつは自分より優秀なあのガキが嫌いなのださ」  
「……………ふん」

少年は不貞腐れたようにそっぽを向く。

「嫌い……だと？」  
「ああ、そうさ。嫌いだから消えて欲しい。そして自分より優秀な人間がいなくなれば自分が一番優秀だ。てことらしい。ま、ガキの嫉妬だね」

女が少年を厭らしい笑みで見つめながら言う。  
そんな……ことで？  
そんなことでリヴィを殺すっていうのか！？  
ふつつつと怒りがこみ上げてくる。

「テメエらはそんな下らない理由であの二人を犠牲にするってのか！？」

感情的に叫んでしまふ。

「……………下らない？」

が、その言葉に女は表情を一変させた。

「お前に何が分かる！」

女が叫ぶと同時に、俺が隠れている木が衝撃に揺れる。  
見ると、女が木を蹴りつけた体勢でこちらを睨んでいた。

「わかんねえよっ！ 自分のために他人の命すら犠牲にする奴の気  
持ちなんて！」

俺も腕を押さえたまま立ち上がって女を睨み返す。

「あんたは知ってるかい！？」

女が腰の剣を抜き斬りかかってくる。俺も動く方の腕で剣を取り  
防ぐ。

「……………くっ」

焼かれた方の腕に痛みが響く。

「知ってるかって 何をだ！？」

痛みを堪えて問いかける。

「底辺の人間がどう扱われるか、さっ！」

底辺……って、どういうことだ。

「虫けら……いや、それ以下のゴミのように扱われるんだよ！」

剣戟の速度が増す。

防ぐのに精一杯で話す余裕がなくなってくる。

「殺されても文句も言えない。アタシの両親だって……」

まるで奴隷だな。

こんな世界じゃ奴隷なんてモンがあっても不思議じゃないけど。そんな奴が上に行きたいと思うのも分かる。

「それで、裏切って地位を得て……それで自分を蔑んできた人間のようにになりたい訳だ」

「何が言いたい？」

確かに話を聞く限り、コイツは奴隷のような生活をしてて、両親は殺されて、でも何も言えなくて……って、同情しちまいそうになる。

けど

「お前……そのままじゃ、お前の言う底辺をゴミのように扱う人間と一緒になっちまうってことだよ」

女は無言で俺を睨む。

俺は女が動かないのを確認してから、今度は少年に目を向ける。

「お前は……何か理由、あんのかよ？」



「僕？ 僕には大層な理由はないよ」

少年は涼しげに表情ひとつ変えずに答える。

「言う気はないけどね。ただ……僕は一番でなきゃ意味がないんだ。一番じゃなきゃ生きていく必要がない」

淡々と告げる少年。

コイツ……くそっ！

どいつもこいつも厄介な……女もそうだし、この少年も何か大きなモンを抱えてそうだ。

完全に悪い敵って断言できないからやり難いつての！

でも、このままじゃ遅かれ早かれ殺される……リヴィやサーシャも心配だ。あのスパイにはいくら天才のリヴィでも手も足も出ない。それ程、二人のステータスには差がありすぎる。

「もう訊きたいことはないね？ 答える気もないけど」

少年が俺に杖を向ける。

「何を言われようとアタシは上にいくよ……だからっ！」

女も少年に並んで杖を向けてきた。

二人の杖の先に魔力が集まっっていく。

「リミッター」

やってやる！

考えるのはサーシャとリヴィを助けた後だ。

出来ればこの二人も何とかしてやりたい。今ならまだ間に合うし、

ちゃんと理由が分かれればチートを使っても救ってやる！

『フレイムバーストッ！』

二人の杖から魔法が放たれる。

二つの大きな炎の塊が俺に向かって迫ってくる。

「解除、L V 1！」

急激に上がる身体能力。

腕の傷も急速に治癒されていくのが分かる。

剣を握る手に力を込める。

前、迫ってくる火炎に目を向けて、

「海波斬っ！！」

剣を振った。

\* \* \*

シュウジが去って少しして、

「く……かはっ」

「リ……リヴィ……ちゃん」

サーシャとリヴィは地に倒れ伏していた。

「どうか……大人しく言うことを聞いてくれれば、これ以上痛い目に遭わなくてすむけど」

普段と変わらない笑みで二人を見下ろす男、帝国の者であるレイ  
本名シュナイツ。

「なんで……あんななにかに……」

シュナイツを睨みつけてリヴィが言う。

「ふふ、天才の自分が何でこんな男につて？ ……簡単なことだよ。  
単に君よりも僕の方が強いだけのことさ」

シュナイツはそう言って、倒れたままのリヴィの頭を踏みつけた。

「あうっ！？」

「リヴィちゃん！？」

サーシャが悲鳴のような声を上げるも、身体は動かすことが出来ず、リヴィの元へ向かうことが出来ない。

「サーシャだっけ？ 君も優秀なようだし、帝国に従うならこれ以上手荒な真似はしないよ」  
「……………」

サーシャは無言で、普段の彼女からは想像も出来ない険しい表情でシュナイツを睨みつけていた。

「リ、リヴィちゃんから……足を……どけてください」

ボロボロの体でフラフラになりながら立ち上がるサーシャ。

「従う気は……ないと?」

「絶対にありません!」

サーシャは断固とした態度で言い切ってシュナイツに杖を向けた。

「ほう。僕とやると言つのですか?」

「……………」

「ふふふ。杖が震えていますよ」

面白そうにシュナイツはサーシャを見る。

「サーシャ……逃げ……」

リヴィイは頭を踏みつけられながらもサーシャに逃げろと言おうとした。が、

「余計なことは言わなくていいんですよ」  
「がはっ!」

お腹を蹴られて地面を転がる。

「リヴィイちゃん!？」

サーシャが心配そうな声を出し、リヴィイとシュナイツの間に移動した。

「……………サー……逃……………」

お腹を蹴られた痛みでリヴィは声を出すことが出来なかった。

リヴィは初めてだった。

自分を一方的に痛めつける程の敵を前にしたことも、こんな風に地面に這い蹲ることも。

でも、そんな悔しさや惨めさよりも、目の前で、自分を庇うように敵との間に立っている“攻撃魔法の使えない”優しい少女が心配だった。

初めての友達。

そんな友達のことが心配だった。自分のことはいいから逃げて欲しかった。

そんな風に自分より誰かの心配をするのは初めてだった。

「では、少し痛めつけてあげましょう。最悪、帝国に連れて行ってしまうかどうかでもなりますし」

シュナイツは杖を取り出しサーシャに向ける。

『ブラスト』

シュナイツが唱えると、サーシャを中心に爆発が起きた。

「……………っ!？」

リヴィの瞳に、宙を舞うサーシャが映る。

サーシャはそのまま、受身も取れずにリヴィの後方、地面に叩きつけられた。

「サ……サー……シャ……」

首だけ動かしてサーシャを見ても、彼女はピクリとも動かない。

「……あ……っ」

目を見開くリヴィ。

彼女の瞳に映るサーシャの姿は、服はボロボロに破れ、身体は傷だらけだった。

「どうしました？ 声も出せないほどショックでしたか？」

シュナイツが楽しそうにリヴィに近づいていく。

「う……ああ……サー……シャ」

敵の魔法に倒れた“親友”を視界に映す度、リヴィは自分の中から何かがこみ上げてくるのを感じた。

「あ……ああ……あああああああっ！」

出せなかったはずの声が出る。

「な、なんだ！？ これは……」

「うあああああ！」

力の入らなかった身体に力が入るようになる。

「魔力……？ まさか、目に見えるほどの高密度な魔力が全身から噴出しているというのかっ！？」

シュナイツの驚愕の叫びが響くがリヴィには何も聞こえない。

「アアアアアアアアアアアアアアッ!!」

立ち上がったリヴィはシュナイツに顔を向け、彼女の物とは思えない、低く大きな雄たけびを上げた。

## 第二章 四話 解除（後書き）

お気に入りが200件突破。

ありがとうございます！

そして、やっぱり文が安定しない。

苦戦したらチートじゃないじゃんと思わなくもない。

まあ全開なら指先ひとつでパーンだけど。



## 第二章 五話 全開

リヴィとの魔法訓練中。

俺は魔法を使う敵に対抗できる手段がないことに気がついた。そこで思いついた手段というのがダイの大冒険の中に出てくる剣術であるアバン流刀殺法。その中のひとつ、『海波斬』だった。

海波斬は原作で主人公のダイが海を割った技であり、炎や風といった魔法にも有効なスピードを重視した剣術だ。

さすがアバン先生。

海波斬で俺に迫ってきていた炎は真つ二つになった。

使ったのは初めてだったけど想像通りの効果をもたらしてくれた。

「なにっ!？」

女が信じられないといったような声を上げた。少年も目を見開いて驚愕した。

「魔神剣っ!」

叫ぶと共に、剣を振る。

地面を這う衝撃波が女と少年の間を目掛けて奔る。

「っ!？ くっ!」

「当たらないよ!」

魔法とは違う俺の剣技に驚いていた二人だが、かろうじて魔神剣の衝撃をかわした。

……それぞれ“別の方向”に飛び退いて。

「それが狙いだ！」

元々、魔神剣はゲームでも繋ぎや牽制に使うことが多い技である。俺も二人を分散させる目的で放ったのだった。

「なっ！？」

飛び退いた二人が着地する前に体勢を低くして最速で女の前に駆ける。

覚悟は決めた……人を攻撃することに、もう躊躇は無い！

「虎牙破斬ッ！」

低い体勢から女を切り上げる。

「おらぁ！」

身体を回転させ、女の手を蹴り杖を落とす。

「うおおおお！」

そのまま、今度は剣を振り下ろす。

「がはっ！」

地面に落ちた女は肺にある息を一気に吐き出し、動かなくなった。

「ふう」

着地して女を見て、安堵の息を吐き出す。

まあ、峰打ちだし、生きてはいるだろうとは思っていたが実際に呼吸をしているようで胸が上下に動いているのを見て安心した。

そして、俺は残る少年に視線を移す。

「……………」

少年は俺が女をあつさり倒してしまったのが信じられないのか、半ば呆然とした様子で倒れた女を見つめていた。

「……………んだ？」

少年が何かを呟く。

「あん？ 何か言ったか？」

「何なんだ、今のはっ！」

くわつと此方を睨みつけてくる。

「何なんだと言われても……………剣技だけど？」

俺は剣を見せ付けるようにして答える。

「違う！ そうじゃない！ 最初に僕たちを狙ったあの技だ！」

「……………魔神剣の事か？」

「そうだ！ あれは何だ！？ あんな魔法は聞いたこともない。風の魔法か！？」

少年は見たことも聞いたこともない俺の技を見て焦っているようだ。戸惑っているようにも見える。

なら、少年には悪いけど今のうちに

「魔神剣！」

衝撃波を飛ばし、先ほどのように少年の懐へ駆ける。

「同じ技は効かない！ ウィンドブレイク！」

衝撃波を避けると同時に杖を構えていた少年が俺に魔法を放つ。

「くっ！」

少年の魔法に剣が弾かれ、後方へ飛んでいってしまった。

「これであの技は使えない。僕の勝ちだ！」

少年が笑い、杖を向けてくる。

が、俺は足を止めることはしない。そのまま少年の懐に駆け寄り、

「勝ったのは俺だよ」

手のひらを少年の腹に打ち込み、

「なあ！？ くっ、フレイムバ」

少年は剣を落としても構わず懐に入ってきた俺を驚愕の表情で見、焦ったように呪文を唱える。

「獅子戦吼ッ！！」

だが、それよりも早く、俺の技が炸裂した。  
腹に打ち込んだ手のひらから衝撃波を撃ち出す。  
その衝撃波は獅子の形を形成する。

「ぐああ!!」

衝撃に少年は後方へ吹っ飛び、その先にあつた木にぶつかってダウンした。

\* \* \*

一応、二人とも杖は取り上げた状態で安全な場所に寝かせておくことにした。

「……………負けたんだね」

運んだときの衝撃かしらないが女が意識を取り戻して呟いた。

「ああ、俺の勝ちだ」

「……………そうか」

俺の言葉に女は一言、そう言った。

「ま、今は寝てな。サーシャたちを助けたらトコトン話聞いてやるから」

「ふん。……………アンタに話してどうなるってんだい。大体、ギルドに

報告したらアタシたちは処刑……良くて牢獄暮らしだ。話なんて出来ないよ」

力なく笑う。

「……ギルドに報告なんてするつもりないけど？」

女は目を見開き俺を見る。

「アタシは……アンタを殺そうとしたんだよ。アンタの仲間も犠牲にするつもりだった」

「そうだけどさ。……俺は死んでないし、仲間も絶対に助ける。あいつらが赦しや問題ないだろ？」

女は少し考えて、

「……赦すと思うのかい？」

「ああ、当然。元々あの男が居なかったらこんなことしなかっただろ？」

「出来なかった……てのが正しいけどね」

「それでもいいさ。結局、全ての元凶はあいつだ。お前らはつけ込まれただけだろ」

俺が言つと、女は信じられない物を見るような目で俺を見た。

「おかしい奴だね。アタシはただの野心家だよ。ただ上に行くためにアンタたちを利用しようとした、ね」

「自分からそう言う奴は根っからの悪人じゃないって思うよ、俺は。それにあの時、必死に叫んでたお前は余程の理由があるんだろうし、演技には見えなかった」

「……………馬鹿だね」

「馬鹿で結構だね。俺は俺のやりたいように生きるだけだ」

お前らを救ってやりたいとか、自己満足の押し付けだ。

でも、やりたいからやる。

折角チートな力を手に入れたんだ。自分の信じた道を真っ直ぐ突き進んでやる。

「じゃあな。ちゃんと二人を助けて戻ってきて話をするぜ。トコト  
ン、な」

「……………ふん」

女はそっぽを向いて鼻を鳴らした。

俺は二人を助けるため走り出した。

……………走り出したのは良かったのだが、

「……………マジかよ」

「……………アンタ、あの子たちの所に行ったんじゃないのかい？」

十分以上走った末に女と少年を寝かせた場所に戻ってきてしまった。

端的に言えば迷ったというやつである。

……………森で迷ったのはこれで二度目か。自分が方向音痴だと認めるべきかもしれないと思った。

「あの……………洞窟はどっち、ですかね？」

恥ずかしさで顔が熱くなる。

「……………あっち」

女が呆れた顔で洞窟の方角を指差した。

「あ、あはははは……………じゃ、そゆことで！」

ビシッと腕を上げて、俺はその場を走り去った。  
なんとも締まらない俺だった。

\* \* \*

などということがあり、二人の元に辿り着いたとき事態はとんでもないことになっていた。

「……………なんだ、これ」

目の前の光景に思わず呟いてしまう。

リヴィの身体から目に見えるほどの魔力が噴出している。

それに 予想……………いや、事実ステータス数値からしてリヴィでは男の相手になるわけがないのである。

それなのに

「ウアアアアアッ!!」

「くっ!!」



対等に男と戦りあっていた。

いや、対等以上だ。とんでもないスピードで男を翻弄している。

「アイシクルレインツ！」

男が唱えるとリヴィの上空に大小様々な大きさの氷柱が現れ、リヴィ目掛けて襲い掛かる。

「ガアアツ！」

が、リヴィが吼えると襲い掛かるうとしていた氷柱が霧散した。

「アアアアツ！！！」

そして、魔法を撃った体勢で固まっている男に向かい腕を振り下ろす。

「ちっ」

男はバックステップでかわすが、着地と同時に男の服が何かに引っかかれたように裂けた。

良く見ると、リヴィの手の先から出ている魔力が鋭く尖った爪を形作っていた。

「リヴィ……キレてる？ てかアレはなんだ……リヴィは人間だな」

ステータスを見たしリヴィが人間であることは確かだ。

まさか、この世界の人間はキレるとあんな感じになるのか？  
でもなんでリヴィイはキレて

「サーシャ！？」

守られるようにリヴィイの後方に倒れ伏しているサーシャを発見する。

「サーシャ、どうしたっ！？ 無事なのか！？」

サーシャに駆け寄

「ガァ！」

「っ！？」

サーシャに近づこうとした途端、リヴィイが俺にまで攻撃を加えてきた。

……見境がなくなってるのか？

「リヴィイ！ 俺だ！」

「フシユウウウ！」

呼びかけても、リヴィイは俺を睨み威嚇してくるだけだった。

「くそ。天才ではなく化け物だったか」

男が少し離れたところで呟く。

「ああ！？ リヴィイは化け物なんかじゃねえよ！」

反射的に言い返す。

「ふん。お前がここにいるということはあの二人は失敗したわけか……役立たずめ」

男は吐き捨てるように言い、

「あれが化け物じゃなくて何なんだ？ 人にあんな真似は出来ない。目に見える魔力を集めるだけならまだしも、それを物理的に傷を与えられる武器に変化させるなどとはね」

「ちよつと特別なだけだろ！ あいつは化け物なんかじゃない！」

お前がリヴィをこんなにしたくせにフザけるな！

「ふん。まあいい。ここはお前らが同士討ちしている間に退散することにしよう」

そう言つて男は背を向けた。

「待て！      ぐっ」

追おうとするもリヴィの攻撃によって阻まれる。

「はっはっは。君程度でどうにかなると思えんが、時間稼ぎは頼んだよ？」

男の余裕ぶつこいたセリフにカチンときた。

「リミッター      」

「シャアッ！」

リヴィの攻撃を腕を掴むことで阻止する。

「 全解除!! 」

「 ツ! 」

叫び、リヴィの腹に一撃を入れると、彼女は声を出すまもなく意識を失った。

## 第二章 五話 全開（後書き）

またまた少し短めでごめんなさい。  
今更なのですが、ちよつと夏バテ気味です。  
もう夏も終わるのに……。

## 第二章 六話 帰還

二人とも気を失っているだけで呼吸もちゃんとしていることを確認してから立ち上がって逃げようとしていた男に対する。

「絶対逃がさねえ……」

睨みつけながら呟く。

まずは全力で男を捕まえる。

二人をちゃんと回復させたいが、のこのこと逃がすわけにはいかない。だから即効で捕まえて二人を治す。

リミッターを全て開放した今なら何だって出来るはず！

「時間をかけると二人が心配だ。だからすぐに終わらせてやる！」

何の躊躇いも容赦も無く捕まえる。情報はその後に関き出せばいい。今は二人が心配だ。

「ふん。厄介なそのガキは魔力の放出を限界までして気絶したようだけど、君一人でどうやって僕を捕まえるんだい？」

不敵な笑みで余裕な態度で言う。

「どうやらコイツにはそう見えていたらしい。ということは俺のリヴィエの一撃が見えなかったということか……ま、それだけステータスに差があるってことだろうな。」

「……………行くぞ！」

が、そんなセリフにいちいち返答してやる余裕はない。

「アイシクルレイン！」

剣を構えた俺を見て、即座に魔法を放ってくる。

さすがに反応速度がさつき戦った二人とは比べ物にならないくらい早い。

だけど

「甘いっ！」

俺は氷柱がある上空へと跳躍する。

「なにっ！？」

勿論、ただ跳躍するだけではない。

俺の身体は炎を纏っている。

炎に触れた氷柱は蒸発し、俺の身体に届くことはなかった。

「行くぞ！ 鳳凰」

ジャンプの高度が最高点に到達し、落ち始める前に剣を構えて技を繰り出す。

身体に纏わりつく炎が段々と鳥の形に変化していく。

「天駆ッ！」

叫び終わると同時に、俺の身体は男に向かって滑空する。そのまま剣の峰で切りつける。

「ぐああ！」

男の後方に着地し振り向きざまに剣を逆手に持ち替える。

「今なら使える最強の技を喰らえ！ アバン流刀殺法奥義」

逆手に持った剣が光り輝きだす。

「アバン……」

男に向かって突進。

「ストラアアツシュー！！」

男の横を駆け抜け抜けると同時に腹を薙ぐ。

「ぐあはっ！！」

勢いの収まったところで振り返ると、男はピクリとも動かない。近づいて男の顔の横に立つ。

それでも動かないところを見るに、男は本当に気絶しているようだった。

俺は袋からロープを取り出し、男を嚴重に縛り上げた。

それからサーシャとリヴィの元へ向かう。

「待たせたな……。今から治療してやるから」

持っていた剣を置いて、まずは傷の多いサーシャの身体に手を添えた。

手のひらから青白い光が溢れ、サーシャの身体を包んでいった



\* \* \*

「今回はほんと大変だったな」

ギルドの食堂。

そこで今、サーシャとリヴィの三人で食事をしながら話をしていた。

「大変つて……あたしは最後の方は良く覚えてないし、サーシャなんて死にかけてたはずなんだけど……」

元気にパンを頬張っているサーシャを見、

「なんでそんなに元気なのよ!? ていうか傷ひとつないのはなんで!?」

叫ぶ。

「ふえ? ……ごくつ。えっと、私もあの人に魔法撃たれてから覚えてないです」

口に含んでいたパンを飲み込み答える。

「アンタ!」

ギロリと俺を睨みつけてくるリヴィ。

「なに？」

何を言われるか大体は想像出来ているので、それ程慌てることなく先を促す。

「アンタがあたしたちをここまで運んだんでしょ？」

「うん。まあね」

「あの状況からどうやってあの男を退けたわけ！？ それにサーシヤやあたしの傷が治ってるのは！？ それにあの状況だとアンタの方でも何かあつたんじゃないの？」

やっぱりそれか。

そうだな

「俺が駆けつけたときには何か凄く強そうな人があの男を退治したあとで、その仲間の回復魔法の達人が二人を治療してくれたんだ。俺の方も通りすがりの仮面で顔を隠した強い人が助けてくれた」

超適当に作った言い訳を自信満々に言い切った。

実際はリミッターを全て開放した状態でなら回復やら蘇生やら結構何でもありな魔法が色々と使えるようになるのでそれで治したのだが。さらに、ステータスで確認したところ ちなみに、その時に確認したんだけどリヴィの特殊技能欄には『オーバードライブ魔力暴走』という項目があつた。これはマイナスの技能であり、自分では制御不可能らしい。訓練やレベルアップなどの成長である程度は抑えることが出来るらしいが……これは後日良く調べることにした リヴィはMPがゼロに近かったので自分の物を分け与えておいたのだった。

「へえ、そうなの……って、んなわけあるかあ！！」

ぽかっと頭を殴られるが、天才少女といっても、それは魔法に關してのことで筋力その他は比較的ステータスの低いリヴィにされたところで大して痛くもない。しかも俺の頭を叩くためにジャンプする様がとても可愛らしかった。

が、言い訳は即座に見破られてしまった。  
どうしようか……。

事実を言えば簡単なんだけど、それを言つて、二人に拒絶されるのは怖い。今までどおりでいらなくなるんじゃないかって思つてしまふ。サーシャやリヴィのことは勿論信用してるけど……簡単に言えることじゃない。

「はあ………まあ、いいわ。言いたくないなら別に無理に聞こうとは思わないし、ね？」

俺が悩んでいると怒気を沈めたリヴィがそう言い、

「はい。良く分かりませんがシユウジさんのことは信じてます」

「ご、ごめん。ありがとう。でも言いたくない………つてのとはちょっと違つて言うか………いつか話すよ。決心がついたら必ず」

とりあえず、それで二人とも納得はしてくれた。

「でも、最後にひとつだけ、これだけは聞かせて」

リヴィが真剣な表情で俺を見る。俺もその目を見返す。

「あたしたちを助けてくれたのは………アンタ？」

「うん。方法は言えないけど………そうだよ」

俺はそれだけはちゃんと答えることにした。

「そう……ま、いいわ。いつか話さないよね！」

「あ、ああ。サーシャもそれでいいかな？」

「はい。私はシュウジさんを信じてますから」

屈託のない笑顔で言うサーシャ。

ここまで信用してくれてるなんて、と嬉しくなる。と同時に話せないことに罪悪感も大きくなる。

いつか、話そう。

そう心に誓った。

\* \* \*

「ああ……っ！ てか、卒業課題どうすんのよっ!？」

食事を食べ終えたところで急にリヴィイが叫んだ。

「どうしたの、リヴィイちゃん？」

サーシャが口を拭いて突然立ち上がって叫びだした友に尋ねる。

「サーシャ！ アンタは何で落ち着いてるの!？ このままじゃあたたたち卒業出来ないのよ!？」

「あ、そういえば……そうでした」

今気付いた、サーシャの表情はまさにそんな風だった。

「まあまあ、落ち着いてリヴィ」

「アンタも少しは慌てなさいよ！」

宥めようとしたら、また殴られた。

「あたしがっ！ 天才のあたしが卒業出来ないなんて！！」

この世の終わりのような勢いで頭を抱える。

「あのさ、そのことなんだけど……」

「なによ？」

ギロツと据わった目で、今まで聞いたこともない低い声で、リヴィは俺に答えた。

「課題のブツなら……実はここに」

袋から課題の目的『ヒカリゴケ』の入った瓶を取り出す。

「あ、ああ、アンタ、な、なんで……？」

「洞窟で出会った通りすがりの親切な人に貰った」

「またそれかっ……！」

ぽかつ。

「いや、実は……普通に採ってきた」

実は二人の治療後、リミッター無しのステータス全開&身体強化の魔法を使って最速で採取してきたのだった。

「アンタは……………もういいわ。このぐらいじゃ驚かない」

「さすがシュウジさんです!!」

リヴィは呆れたように、サーシャはキラキラと眩しい瞳で俺を見た。

「まあ、これで卒業出来るよな?」

「そうね。それを提出すれば無事……………って、今日は何……………日?」

リヴィの顔が引きつる。

「もしかして……………今日が期限じゃないの?」

俺とサーシャを見てリヴィが告げる。

「……………え?」

「……………そういえばそうですね」

俺はハッキリと忘れていて、サーシャも今気付いた様子だった。

まあ、無理もない。

洞窟に着くまで二日。

さらに戦闘&二人をこの町まで運ぶのに二日。

さらにさらに、その後疲れて一日眠り、忘れていた襲撃者三名を連れて戻ってくるのに二日。

サーシャとリヴィが目覚めたのがつい先ほど。

今は日付が変わりそうな時間。

ということは、

「い、急ぐのよっ！ 早く提出しないと!!」

「そ、そうですね!」

「お、おう！ 走るぞ!」

俺たち三人は受付へ向けて全力で走るのだった。

## 第二章 六話 帰還（後書き）

やっぱり戦闘は難しい。

チートで苦戦はほとんどしないっただけで戦闘は『バーン、ドーン、倒した』的な感じになってしまいそうですけど、そうはならない描写が出来ればいいと思います。

次から新章入ります。



### 第三章 一話 クラン

今日から、学生ではなく正式なギルド員としての生活が始まる。学生として安全な敷地で魔法の練習などしていた生ぬるい環境から、魔物討伐、盗賊退治など、時には命がけの任務を受ける厳しい環境へと激変する。

学生上がりにいきなり危険な任務をさせることもそうそうないと思うが気持ちは引き締めていこう。

特に俺は他のクラスメイトと違い、そんな悠長なことを言ってる環境ではないのだから……。

\* \* \*

卒業数日前

「はあ……学生ももう終わりかあ」

朝食の席、食器の片付けられた机に頬つぺたをくつつけて感慨に浸りながら呟く。

学生生活……最初は年齢とか能力とかのことで不安があったけど、思い返せば中々良い生活だったな。

サーシャは相変わらず俺を慕ってくれているし、リヴィという仲間も出来た。

それにこの二人ほどではないが、そこそこ仲良くなれた奴らもいる。

もう別れなきゃいけないとなると寂しい気持ちが沸いてくる。

「何をダレてるのよ。今日はこれからこのことを決める大事な日じゃない」

呆れた眼差しで俺を見るリヴィー。

「いや、分かってるんだけどさ……」

今日は卒業試験に続く大イベントがあるのだ。

「だったらそんな風にしてないで考えなさい。まだ決めてないんでしょ？」

リヴィーに尋ねられる。

俺は突っ伏していた顔を上げ、姿勢を正した。

「そうだけど……決めるったって良く分からないしな」

肩を竦めてみせる。

「分からなくても決めなきゃ仕事も貰えなくなるわよ」

「らしいな……決めなきゃだよな」

ため息を吐く。

「リヴィーは決まってるんだっけ？」

「まあね。ここに来る前から決めてたからね。ま、上手くは入れのかは分からないけど……」

さすが天才。将来のことも良く考えてるねえ。

「サーシャはどうする？」

「シュウジさんと一緒にいいです」

サーシャは即答で返す。

「アンタ……少しは考えなさいよ」

「でも……私も良く分からないし」

サーシャも元々は村娘。ギルドなんかは所属するなんて夢にも思  
つてなかった子だからな。ギルド関係のことに疎くても仕方がない。

「サーシャ、ずっと俺といることないし、自分で決めなよ」

「え……迷惑ですか？」

泣きそうな顔になるサーシャ。

「違うから！一緒に居てくれるのは嬉しいんだけどさ。会えなく  
なるわけじゃないし、自分の行きたいところに行った方がよいよ。  
それがサーシャにとっても良いことだと思う。それに……」

俺はそこまで言つてリヴィイを見る。

「な、なによ？」

不審な目で此方を見るリヴィイ。

「リヴィイだつてサーシャと別れるのは辛そうだし、そっちの方が良  
かったらリヴィイと一緒に居てあげるのも良いと思うぞ」

「な、なにをつ　別にそんなことっ」

「ないと?」

「ない……わけじゃ、ないけど」

顔が真っ赤なリヴィだった。

「リヴィちゃん……」

サーシャは嬉しそうな表情だった。

「うっ……サ、サーシャが一緒なら、そりゃあ嬉しい、けど」

「リヴィちゃん!」

リヴィに抱きつくサーシャ。

なんとも微笑ましい光景だった。

「……まあ、これから説明があるからしっかり考えなさいよ」

『はーいっ!』

リヴィの言葉に元気良く返事をする俺とサーシャ。

そんな俺とサーシャを見て、リヴィは深いため息を吐くのだった。

今俺たちが話していたことは卒業後について。

どうやら学院を卒業しただけではまともな仕事にはありつけないらしい。

教師から、そしてリヴィから受けた簡単な説明によると

卒業後、卒業生はギルド所属のクランに所属するらしい。クラン

というのは簡単に言えばギルド員で結成されたパーティ、チーム、組、という……まあ、組織のような物だ。

ギルドには、そのクランがいくつかあり、そこに所属し仕事を請ける。

クランには古い物から新しい物まであり、実績や名前が売れていればそれだけ仕事を貰いやすくなる。クランを指名で入ってくる仕事もあるらしい。

つまり、ここで入るクランによって、これからの生活が決まるといっても過言ではない。

さらに、クランは設立するための規定があり、どんな新クランであろうと高ランクのギルド員が所属しており、新人はその高ランクギルド員に学ぶことが出来る。クランとしてもクラン員を育て、その新人がこなせる仕事が増えればクランの評価も上がるので、大抵はこのクランでも新人育成には力を入れているようだ。

上昇志向の強い者は実績あるクランを目指すのは当然で、リヴィもギルド一の地位を確立しているクランに行くことを希望している。俺はと言えば……リヴィとの会話通り決めかねている。

リヴィのような生き方もいいとは思うが、中堅ギルドで平穩に生きるのもいいんじゃないか、とも思うのだ。

何が正しいなんてない。

思ったように行動すれば良い……か。  
なら

「んじゃ、説明行きますか。今日は各クランの代表者たちも来るんだしな」

この目で見て、実際に話をして、そして入りたいと思ったクランに入ることにしよう。

リヴィやサーシャと、これまでのように三人一緒にいたら良いと思うが、学院の成績からしてそれは難しそうなのだ。

だったら自分が一番やりたいと思うことをするのが一番だろう。

俺の言葉に三人一緒に立ち上がり移動するのだった。

\* \* \*

学院の廊下を一人の女性が歩いていた。

少女とも大人とも呼べる、その中間ほどの年齢の女性だった。その少女の前方から大柄な体躯の青年が歩いてくる。

「よう、クロエ。お前克蘭抜けたらしいな」

男は軽薄な笑みを浮かべクロエと呼ばれた少女に話しかけた。

「あら、ガイじゃない。相変わらず暑苦しい身体してるわね」

立ち止まったクロエは挑発するような笑みで返す。

ガイと呼ばれた男はあからさまに表情をイラついた物に変え、

「ふん。馬鹿な女だ。あの克蘭に居りや嫌でも順調に出世できるつてのにわざわざ新克蘭なんぞ設立するとはな」

「私は別に出世に興味なんてないわ。それに私は私の理想を成し得るために克蘭を作ったのだから後悔なんてありはしないわ」

クロエは当たり前のように言った。

それを見て、ガイは厭らしい笑みを浮かべ、

「ならば俺が力を貸してやろうか。俺が居れば名声などすぐに手に

入る。なんせランクAの優秀な魔導騎士だからな。こんなところでランクの低いガキを捕まえるよりよっぽど役に立つぜ」

それに対しクロエは、

「間に合ってるわね。大体クランは家族よ。貴方を家族だなんて思えないわね」

「はっ、家族だあ？ 所詮は他人、より高い位置に行くためにお互い利用しあう仲だろうが」

「……はあ。だから貴方とは合わないのよ」

ガイの言葉にクロエはため息を吐く。

「ま、これ以上話すことはないわね。それじゃ」

そう言って立ち去ろうとするクロエにガイが言葉をぶつける。

「いつか、後悔するぜ」

一瞬立ち止まったクロエは振り返ることもなく、

「後悔？ 残念だけどあり得ないわね」

背後から『ちっ』と舌打ちをする音が聞こえたが、それだけ言っ  
て立ち去った。

\* \* \*

リヴィたちと別れ説明会場を回る。

リヴィとサーシャは、リヴィが所属したがつているクランの説明を受けている。リヴィはともかくサーシャまで熱心に説明されていたことから、もしかしてサーシャもギルドーと言われるクランから見ても欲しいほどの人材なのではないかと思った。

なぜなら俺に対しては説明を簡単に受けた後、熱心に勧誘されることもなく出て来ることが出来たが、俺に着いて来ようとしたサーシャは引き止められたからだ。

サーシャには悪いが一人で回らせてもらおう。

それに、サーシャに関しては慕われていると言えば良い事だが、もしかして村を助けた俺に依存してしまっているのではないかと考えたこともある。

これから先のことを決める大事なことだ。サーシャにはキチンと自分の意思で決めて欲しい。

一人だけ勧誘されなかったことは能力で力を制限していたからとは言え、やはり悔しかったようで、ちょっとイジケながら会場を歩いていた。

その時

「ねえ君！ もう所属するクランは決まった！？」

俺よりひとつかふたつほど年上の女性に声をかけられた。

声からは何か必死な様子が伝わってくるところを見るに、学生たちから良い返事を未だに貰っていないのかもしれない。

「えーっと……はい、まあ」



女性の剣幕に気圧されて引きつった笑顔で返事をする。

「じゃ、じゃあ説明聞いて！ ほら、お菓子もあるよ！ 飲み物だつて！」

女性は俺に説明を受けるよう、この町で結構有名で高級なお店のお菓子とフルーツのジュースを差し出してきた。

こうでもしないと誰もこの人の話を聞いてくれないのだろうか？ 涙ぐましい女性の努力に本当に涙がでそうになった。

聞きます！ 俺が聞いてあげますとも！

心の中で涙を流し、女性に促され椅子に座った。

女性もテーブルを挟み、俺の対面に座りクランについての書類を差し出してきた。

「私はクロエって言います！ 君は？」

読んでいた書類を机に置き、答える。

「シュウジ。シュウジ・カミヤです」

最初の方しか読めてないけど……どうやらこのクランは出来たばかりのようだ。

「シュウジ君か。え〜と……あ、あった！ シュウジ君はどのクランに行きたいとか、どこから誘われた、とかあるのかな！？」

クロエさんは手元の書類 卒業予定の生徒の資料だろう を見てそう言った。

「い、いえ……これと言って……」

「そう！　じゃあウチに来ない！？」

直球……飾り気もないほど直球だった。

「えーっと……あの……」

「あ、ごめんね！　ちゃんと説明しないと駄目だよねっ」

焦っちゃったよ、と苦笑する。

「えーとですね。……ウチは書類にあるとおり新設です。新設って言うとみんな不安がつて来てくれないんだけど……ウチは私を含め三名のクラン員が居ます。でもね、みんな有名クランのクラン員に比べても引けをとらないほど優秀だから　って自分のこと良く言いきりですけど！　でも私はともかくみんな優秀なの。だから新設だからといって他のクランに劣るとは思わない。それどころか人員が少ない分、君のことを良く見れるから成長も早いと思うの！　私はクラン員を家族だと思ってる。勿論みんなもそう思ってくれてると思うからクラン内の雰囲気は凄く良いよ。……だから、どう、かな？」

凄く真剣に説明してくれる。

必死さは凄い伝わるし、学院での成績は、まあ普通の俺……そんな俺の資料を見た後でもこんなに必死に勧誘してくれると悪い気はしない。

それに『クランは家族』という言葉にも惹かれるものがあつた。

「えーっと……俺で良ければ」

俺は自然にそう答えていた。

この人の所なら楽しくやれそうだな、と。

勿論楽しいだけじゃないだろうけど、それでもきつと、この人のクランなら上手くやれる、そう思った。

「ほ、ほんとっ!？」

上半身を乗り出し、俺の手を両手で握り締めてくるクロエさん。

「あ、あの……はい。俺なんかで役に立てるか分かりませんが」「うっん！ そんなことないよ！ 本当にありがとう!」「い、いえ……どういたしまして?」

なんかここまで喜ばれると嬉しいけど期待されすぎてる気がして不安にもなる。

「そ、それじゃあ、ここに名前を書いてくれるかなっ!」「……はい」

言われるままに差し出された書類に名前を書く。

「あっ、そっだ」

名前を書いて思い出した。

「どうしたの?」

名前を書いている途中で手を止めた俺を見て不安そうに尋ねてるクロエさん。

「あの……二人、どこにも所属してなくて結構優秀な奴ら知ってるんですけど、会ってもらって良いですか？ 人間的にも良い奴らな

んで」

「うん？ それは是非こちらからお願いしたいぐらいだけど」

「ほんとですか！？ あの、じゃあ医務室まで着いてきてもらってもいいですか？」

「うん。いいよ」

そうして、名前を速攻で書き終え、俺はクロエさんを連れて医務室へ向かった。

### 第三章 一話 クラン（後書き）

最近、ちよつと文字数が少なかったので今日も投稿。  
新章開始で新キャラ登場です。

やつとロリじゃないメインキャラが出せた。

感想頂けると嬉しいです。

### 第三章 二話 目標

学院卒業を昨日済ませ、明日からクラン員としての生活が始まる。そして今日は休日。

明日から仕事を始めると次に会えるのはいつになるか分からないため、今日は俺とサーシャ、それからリヴィの三人で町へ遊びに行くことになった。

なった、のだが……

サーシャの機嫌がすこぶる悪い。

「あの……サーシャ？」

「……………（ふいつ）」

今、俺たちは町の中を歩いていた。

サーシャは呼びかければ一応反応して目を合わせてくれるけど、その後、頬をぶくつと膨らませてそっぽを向いてスタスタ先に進んでいってしまう。

全身から『私怒ってます』ってオーラを出している。

「ちょっとつ、原因アンタなんだからなんとかしなさいよ！」

隣に並んだリヴィが小声でそう言ってくる。

「そう言われても……な」

取り付く島もねえよ。

原因は分かってる。

あのクラン説明会での出来事がその原因だ。

理由は簡単。あの日、俺がサーシャに何も言わず勝手に入るクラ  
ンを決めてしまったから。しかもサーシャもサーシャでリヴィが入  
ったところからの勧誘を断るに断れず、あれよあれよと言う間に入  
ってしまっていたらしい。

その時点で俺とサーシャは別克蘭に所属することに決まってい  
ました。

サーシャは俺も同じとこに誘う気満々だったらしく、既に決めて  
しまったと言ったらこうなってしまった。

説明会から数日経ってるし機嫌も直ってるだろうと思っていたが  
……この通り。全然直っちゃいない。

「なあ、機嫌直してくれよ。今日は全部奢るからさ」

金で機嫌とろうだなんて汚いと思うけど、それ以外に方法が思い  
浮かばない。

「やった！　じゃあ、これとこれとこれと、ここからここまで全部  
下さい！」

「お前に奢るとは言っていない！！」

俺の言葉で即座にスイーツショップに駆け込み、嬉々として注文  
するリヴィに怒鳴る。

「なんでよ？　サーシャにだけって……差別じゃない？」

まるで軽蔑するかのような視線をくれるリヴィになんて理不尽な  
と思いつながら財布を取り出す。

学院が休みでサーシャたちとも予定が合わない日はギルドで学生  
でも出来るバイトのような依頼をして稼いでいたとはいえ二人分は  
心許ない。

「つーかりヴィ。そんなに頼んでちゃんと食えるのか？」  
「当然」

当然なんだ……。

と、そこで背後からジメツとした視線を感じて振り返る。

「あ……サーシャ」

元々サーシャに話しかけたつてのにリヴィに氣をとられて忘れてた……。

「むーっ……」

店の入り口に立ち睨むように此方を見るサーシャの頬がさらに大きくなる。

ハムスターみたいで可愛い……が、これは怒りのためにこうなっているのであつて決して和んではいけないのだ。

「サ、サーシャは何頼む？ な、なんでも好きな物頼んでくれよっ！」

取り繕うようにサーシャを店内へと誘う。

「ささ、選んで選んで！」

「……じゃあ、これで」

「……それだけでいいの？」

サーシャが指差したのはイチゴのショートケーキひとつ。リヴィの後だったのもあり、拍子抜けしてしまう。



「リヴィみたいに……とまでは言わないけど、もっと頼んでいいぞ？」

「……じ、じゃあ、これも」

今度指差したのはチョコレートケーキ。これもまたひとつ。

「そ、それだけ？」

コクツと頷く。

機嫌悪く、あまり喋らないようにしているが、よく見ればサーシヤの口元が緩んでいるのが分かった。

やはり、女の子に甘い物は効くらしい。

「……テ、テメエ」

注文の品を受け取りテーブルへ移動すると、そこには先に注文を済ませていたリヴィがフォーク片手にケーキを貪り食っていた。見ただけで既に三つは食っている。

「ふお？ おふおはっふあはひゃい」

「……飲み込んでから話せ」

何を言ってるのか分からねえよ。

「……ごくつ。遅かったじゃない」

口の中の物を飲み込んで言いなおすが大したことじゃなかった。

「ほら、サーシヤも座って食べなよ」

運んでいたサーシャの分のケーキと紅茶をテーブルに置き、椅子を座りやすいように引き出す。

サーシャが座ったのを確認して俺も座る。

「サーシャは何頼んだの？」

「これ」

自分の皿を見せるサーシャ。

「え？ それだけしか頼んでないの？」

「……うん」

「折角奢りなんだから遠慮しないでもつと頼めばいいのに」

お前が言うな！

てかお前はもつと遠慮しろ！

そう言いたいのが、先ほどのようにリヴィに構ってサーシャが機嫌悪くするといけないので、ここはぐつと我慢する。

「シュウジは？」

「俺はこれ」

今度は此方に尋ねてくるリヴィにサーシャと同様、皿が見えるようにして答えた。

「あ、そのプリン一口頂戴」

俺のプリンを見てリヴィの一言。

ちなみに俺が頼んだ物はプリンとショートケーキ。それにコーヒ  
ー。

実を言うと、俺は結構な甘党だ。リヴィほどではないが、食べようと思えばもつと食べれる。だが、今回は財布も寂しいし、この後のことも考えて控えめにしておいたのだった。

「まあ、いいけど」

スプーンでプリンを一口掬いリヴィの口に持っていく。

「あゝ……ぱく。美味い！」

食べたリヴィは大声で叫んだ。

それ程かっ！？ 店で大きな声を出すなとは思ってたが、それ以上にこのプリンに対しての期待が嫌でも高まる。

それにしても……リヴィも普通に食べたからあれだけど、今のつて『あゝん』ってやつだよな。リヴィはサーシャより小さいし、まだまだ子供って感じだからドキドキとかはしないけど……。  
すると

「……………じとっ」

とした目でサーシャが俺とリヴィを見つめていた。

「えと……サーシャも、いる？」

もう一度スプーンにプリンを乗せ、サーシャに問う。  
サーシャは無言で頷いた。

「……………はい」

「……………ぱく」

緊張した。

サーシャは顔を赤くしながらリヴィと同じようにあぐんでプリンを食べた。

サーシャの顔のせいか分からないけどドキドキした。

「じゃ、じゃあ俺も食べるかな！」

必要以上に大きな声で言ってプリンを掬う。  
が

「……………」

口に運び辛い！！

なぜならサーシャが使ったスプーンだから。

しかもサーシャが赤い顔のまま俺をジッと見つめているから。

「……………」

つばを飲み込む。

大丈夫……サーシャは子供。まだまだ子供！  
だから気にする必要なしっ！

「ぱくっ！」

スプーンを思いっきり口に突っ込む。

「がっ！ ……」

むせた。

「馬鹿じゃないの」

リヴィが冷めた目で（ただし口にクリームがついている）言った。

\* \* \*

ケーキを食べたサーシャは若干だが機嫌が良くなった。

「会えなくなっちゃうのは……どうでもいいんですか？」

帰り道　サーシャがそう切り出した。

「それは、ないよ」

こっちの世界に来て知り合って、それから数ヶ月。ずっと一緒にいたんだ。寂しくないとか思っわけがない。

それでも、

「もう会えなくなるってことじゃないしさ。休日とか予定が合えばいつでも会えるしさ。これからずっと一緒にいるってわけにもいかないだろ？」

そう言う。

これは本音だ。

というか、これからもずっと一緒にいたら多分……俺がサーシャから離れられなくなってしまっんじゃない、と思う。

「一緒に……一緒にいればいいじゃないですか」

サーシャの声が震えていた。

きつと、これをクランを決めてしまう前に聞いていたら、俺は何も考えずにサーシャと同じクランに入ってしまう筈だ。

そう言ってくれるのは嬉しいし、こんな声を出すんだから……きつと、サーシャは俺を慕ってくれてるのも分かる。

だからこそ

「嬉しいけど、俺もそうしたいところだけださ」

「だったらっ！……だったら、そうすればいいじゃないですか」

「でもさ、いつも一緒にいないと何も出来なくなっちゃったら困るだろ？ だから一人である程度のことは出来るようになるよ。俺も……サーシャも」

こんな仕事だ。

何が起こるか分からないのに俺がいなきゃ、サーシャがいなきゃ何も出来ない……なんて、そんなことになっては不味い。

俺は多分死ぬことはないだろうけど、それでもいつもサーシャと入れる状況な筈がないんだ。たとえ同じクランだったとしても。だから、サーシャのためにもここは一旦離れた方が良さんだ。

「ま、そうよね」

今まで黙っていたリヴィイが口を開く。

「仲が良いのはいいけど……依存するのは駄目だよ、サーシャ」

リヴィイがサーシャを諭すように話す。

「……でも」

「シュウジの言うように、ずっと会えないってわけじゃないんだし、少し我慢してみよ」

「……………」

サーシャは俯いてしまう。

もしかしたら泣いているのかもしれない。

「サーシャ」

「……………っ!？」

俺が呼びかけるとサーシャは顔を上げる。

やはり、その瞳には辛うじて零れてはいないが、涙が溜まっていた。

「ずっと別の場所にいるって訳じゃない。俺はさ……………」

クランを決める説明会。

そこで話を聞いてからずっと思っていたことを口にする。

「俺が、いや、俺たちが強くなったら一緒にクランを作りたいんだ」

クランは『ランクA』以上が一人と『ランクC』以上が二人の計三人以上で創設することが出来る。

「へえ」

リヴィが面白そうといった表情で唇の端を持ち上げる。

「だから強くなるっ、サーシャ」

俺はサーシャの肩に手を置く。

「そのためには今は別の道を歩いた方が良いと思ったんだ」  
「わかり……ました」

サーシャが一筋の涙を零した後、頷く。

「じゃ、アタシが一人は必要なランクA……うっん、この国一のギルド員になってやるわ」

不敵な笑みでリヴィイが宣言する。

「へっ、そいつは頼もしいな」

俺もリヴィイに笑い返す。

「わたしもっ！」

サーシャが突然大声を出した。

「私も、早く強くなります！ シュウジさんに心配されないぐらい」  
拳を握り決意するように叫ぶ。

「すぐに……すぐにまた一緒にいられるように頑張ります！」

何か目的が……あれって感じだけど納得してくれたみたいだからいいか。



「俺も一番の年長者として負けられねえな。誰よりも早くランク上げてやるぜ！」

二人に向かって言う。

きっと、俺たち三人なら数年と経たずに出来る！

「は？ アンタ、あたしに喧嘩売ってる？ 天才のこのあたしに！」

俺の言葉が気に食わなかったのか詰め寄ってくるリヴィ。

「はっ！ ガキには負けるわけにはいかな！」

肩を竦めて言ってる。

「誰がガキよっ！」

「お前以外に誰がいる？ 小っちゃい小っちゃいリヴィちゃん？」

「うがーっ！ 絶対アンタには負けないんだから！」

「ほえ面かせてやるぜっ！」

喧嘩腰に言い合う俺とリヴィ。

「あは……あはは……」

「……ふえ？」

「……ひゃーふぁ？」

突然の笑い声にお互いの頬を引っ張り合ったままそちらを向く俺とリヴィ。

「ふふふ……あは。私も二人に負けないです！」

サーシャが両手の拳を胸の前で握り締め、俺たち二人を真正面から見て告げた。

「……へっ。そいつは楽しみだ」

「……ふふん。シュウジにも　サーシャにだって私は負けないわよ！」

そんなサーシャを見て、俺とリヴィは頬をつかみ合ったまま笑って言う。

サーシャもそんな俺たちを見て、涙を拭いながら笑うのだった。

### 第三章 二話 目標（後書き）

今年はまだまだ暑いみたいですね。

10万PV超えました！

やっぱり戦闘よりこういう話のほうが書きやすい。  
でも、これから戦闘は増えるという……どうしよう。

### 第三章 三話 仲間

「今、帰りましたー」

夕方、一日中仕事をこなし、泥だらけの格好で、クランの事務所兼我が家でもある建物の扉を開いた。

「あ、おかえり。お疲れさま、仕事はどうだった？」

出迎えてくれたのはエプロン姿のクロエ。

最初はクランのリーダーが何故にこんなことを、と思ったものだが最近はどうも慣れた。クロエは説明会で言っていた通り、クランのメンバーを家族として扱ってくれた。

ランクAのクロエと学院を卒業したばかりのランクFの俺とでは絶対的な差があり、普通こんな風に接することなどありえないのだが、このクランではランクなど関係なく過ごしている。

「あゝ……どう、と言われても一日中草むしってただけだし……」

思い出すだけでも疲れる。

炎天下の中、草むしり。むしってもむしっても一向に減らない雑草。

「あはは……大変だったね。お水飲む？」

クロエの用意してくれた水の入ったコップを受け取り飲み干す。

「ありがとう」

空になったコップをクロエに渡す。

「身体洗って着替えたら？」

「……そうする」

今の自分の格好を見てクロエに言われたままに行動する。  
服を取るために二階の自室へ移動。そして一階の風呂場へ。

現在、クランのメンバーはこの事務所となっている建物 紹介  
されたとき、普通に一軒家なのは驚いたが 共同生活を送っている。

家事はその日、仕事のない人が担当することになっていて、その  
担当する人によつては大変なことになるのだが……今日の担当はク  
ロエのようで、これは晩御飯も楽しみに出来る。

クロエはランクAという凄腕のギルド員なのに料理やらの家事ま  
で凄腕なのだった。クラン員になった初日の歓迎会でクロエの料理  
に感動したのは記憶に新しい。

身体を洗い、新しい服を着て、部屋に戻る前に水を飲もうとキッ  
チンへ向かう。

「ふう、さっぱりした。クロエ、水頂戴」

料理中のクロエに声をかける。

とても上司と部下の会話には聞こえない。

「冷たくする？」

「お願い」

すると、クロエは魔法で氷を作り、それを水の入ったコップに入れた。

「はい、どうぞ」

「ありがとう」

受け取って飲む。

うん、美味しい！

本当に魔法って便利だ。冷蔵庫なんてなくても冷たい物が飲めるし、食材を凍らせて長期保存なんてことも出来る。

ただ、魔法で出す水は純度が完璧すぎて美味くなかったので、水だけは井戸とかから調達しなくてはいけない。これは毎朝の男たちの日課になっている。

「あ、シュウジ帰ってきてたんだ」

飲み終わったところで二階から降りてきたクラン員に声をかけられる。

男にしては少し眺めの青い髪に利発そうな顔をした少年だ。名前はジル。

「おー。ちょっと前にな。お前は？」

「僕もさっき帰ってきたばかりだよ」

へー、俺が風呂入ってる間にでも帰ってきたのかね。

「そうか。仕事はどうだった？」

「ペットの犬の世話。十匹ぐらい飼ってて大変だったよ……散歩とかね。そっちは何だったの？」

「俺はやたらとでかい庭の草むしり。ずっとしゃがんでたから足がヤバイ」

腿を叩きながら苦笑する。

「そつか。座る？」

「そうするか」

キッチンの横の部屋。仕事用の事務室兼応接室に移動し、ソファに座る。

ぐでぐとした体勢で座り、足を投げ出すと疲労感で気だるげな感覚が足全体に広がった。

「あゝ……マジでもう動きたくないわ」

一旦座ってしまえばもう動くのが億劫になってしまう。

「ほんとにお疲れだね。肩でも揉もうか？」

なんて、思いやりの溢れた言葉を投げかけてくれる。

「……いや、いいよ」

が、断る。

実際肩は凝ってない。疲れているのは断然足だ。

身体能力は上がってるはずなのに前に自分の家の草むしりしたときの疲れと大差無いのはどういうことか……あ、広がったからか。

それにしても疲れてると思う。これは精神的にきてるのかもしれない。

「……そう」

俺が断ると若干悲しそうな声で言って、それから話しかけてくることはなかった。

二人とも声を発することなく数分が経った頃、誰かが玄関のドアを開ける音が聞こえてきた。

「たっだいま〜！」

その音を出した主は元気な声でそう言って、この応接室にドタドタと足音を立て近づいてきた。

「シュウ！ 会いたかったあ〜！」

「うわっ！ なんだよ!?」

部屋に入ってくるなり抱きついてきたのはアリアという名前の少女。

勿論このクランのメンバーだ。

長いブロンドの髪を後ろで束ねたいわゆるポニーテール。青い綺麗な瞳。

十五歳という年齢にしては発育の良いモデル顔負けのスタイル。

つまり

「ちよっ！ む、胸！ 胸当たってるって!!」

「んふぅ〜、当ててるの〜！」

そう言ってさらに身体を密着させてくる。

この誘惑はこの世界に来て……というか、今まで生きてきた中で初めての誘惑だった。サーシャと暮らしたときも、リヴィと仲良



くなつてからもこんなことはなかったから　こんなことあの二人には言えないけど……物理的な理由で。

そんな誘惑を、このクランに入ってから毎日のように受けている俺の精神は結構やばいことになってたりする。

焦りすぎて、それをアリア本人に言ってしまったことがある。その時……『別にいいよ……シュウジなら』って少し頬を赤くしながら言われて頭が真っ白になった。

好意を持たれているのは嬉しいが……この行動は遠慮してもらいたいのだった。

そして、このアリアという少女　実は、卒業試験のとき俺を襲ってきた襲撃者である。

さらに

「やめなよアリア。シュウジが困ってる」

俺からアリアを引き剥がそうと頑張ってくれている少年　さっきまで俺が話していたジル　もあの時の少年だった。

二人とはとつくに和解済み。

俺は最初からさして気にしていなかったし、サーシャとリヴィも直接被害に遭ったのは俺だけで自分たちは何もされてないし、俺が気にしてないというのもあってすんなりと二人の謝罪を受け入れた。そして卒業試験を受けた後、クランで働き始めるまでの間にこの二人があんなことになった原因を探り、解決するために奔走したこともあり、

「男はこうされると嬉しいものよ。ジルはお子様だから分からないでしょうけど」

アリアはこれでもかと胸を押し付けてくる。  
さらに背後から横に回りこみ、俺の顔を掴んで胸に抱き寄せてきた。

「うぶっ……い、息が……」

柔らかくて気持ちがいいやら息が出来なくて苦しいやらでもう何がなんだか分からない。

困ったことにその一件以来、アリアは俺に対して過剰なまでのスキンシップをとってくるのだった。

「だから困ってるって言ってるだろお！ ていうか、ほら！ やばいよ、シュウジの顔が青くなってるいく！？」

ジルはジルで、あの一件以来、俺の従者のような振る舞いで、先ほどの肩を揉もうかと提案したように何かと俺の世話を焼きたがるというか、俺の役に立ちたがるというか……。

さらに困ったことにこの二人 何故か俺の意見には絶対服従で反対などしないのだった。

例えば……もし、俺とクランのリーダーであるクロエの意見が分かれたら、この二人は確実に俺につくだろう。  
本当に困ったものだ。

そんな訳で、もう危険はないだろうとクロエに全部話した上で二人をクランに入れてくれと頼んだ訳だ。

二人と話をさせて欲しいと言うクロエとこの二人の三人を残し、俺は別の場所で待機していたため、そこでどんなやり取りがあったのかは知らないが、二人は無事クランに入ることが出来たのだった。

「ア、アリア!? ほ、ほんとにシュウジが死んじゃうよ!?」  
「えっ……ちょ、シュ、シュウ!? だ、大丈夫!?」

ようやくアリアから開放され息をすることが出来た。

「あ、あはは……や、柔らかか死ぬ……」

が、どうやら遅かったらしい。

俺は薄れ行く意識の中でどうでもいいことを思いついてしまった。  
今自分が死んだら死因は何になるんだろう……あ、そうか『乳死』  
か、と。

「ほら三人ともじゃれあつてないで、ご飯出来たわよ。って、シュウジ!? ちよつと大丈夫なの!?」

クロエがやってきたことを理解したところで俺の意識は完全に落ちた。

「シュ、シュウジ……? シュウジ ツ!」

「シュウ! しっかりして! 私を残して逝かないでっ! 貴方が死んだら私も死ぬ つ!」

「あなたたち落ち着きなさい! このぐらいで死なないから!」

その後、クロエの的確な処置で俺はすぐに意識を取り戻し、無事晩御飯を頂くことが出来たのだった。

### 第三章 三話 仲間（後書き）

更新遅くなってすみません。  
ちよつと体調崩しちゃいました。

それにしてもお気に入り登録がもう300件とか……ありがたい限りです。

### 第三章 四話 依頼

克蘭メンバー全員が集まった夕食の後、それぞれが思い思いに寛いで過ごしていた。

「良い仕事が見つかったわ!」

クロエが高らかに言い放ち、持っていた書類をテーブルに叩きつけた。

「良い仕事ですか? それは一体どういったものでしょう?」

それを聞いて、まず最初に口を開いたのは俺と同じ十七歳でギルドランクCのスウィード。身長は俺より少し高いぐらいで、細い身体は決して華奢というわけではなく無駄な筋肉がついていないとも言えばいいのか。青みがかった髪を肩辺りまで伸ばし、髪と同じ色の瞳は穏やかな光を放っている。

彼は誰に対してもこういった丁寧な物腰で話す。これは彼の癖のようで、遠慮や堅苦しいのは無しというクロエの方針がある克蘭の中でも直すことはなかった。というか、タメ口で話すのは逆に神経が疲れるらしい。その証拠に一番年下であるジルに対しても敬語だった。

それよりも、今はクロエの持って来た良い仕事のことだ。俺も興味がある。

てか、スウィードが訊かなければ俺が訊いていた。

俺が克蘭に入ってから請けた仕事は、正直に言って魔法が使えない一般人でも何とかなるようなものしかなかった。というか任務で魔法を使った覚えが無い。それは他のメンバーも同じで、ランク

Aのクロエでさえ最高でランクCの仕事までしか請けているのを見たことが無かった。

高ランクの人間は引く手数多とはいえ新興クランでまだ何の知名度も無い俺たちでは大した仕事は回ってこないのだ。

……いい仕事は大抵他の有名なクランの人間にとられてしまう。

さて、そんな俺たちにも遂に良い仕事が回ってきたらしいが果たしてどうなのってことなのだが……俺はクロエが叩きつけた書類を覗き込む。

「仕事はふたつ。ランクBとランクCの仕事がひとつずつ」

「なにい!？」

覗き込み、書類の文字を確認する前に放たれたクロエの言葉に驚きを隠せない。

それは俺だけではなく、声に出さなくともみんなが目を見開いて驚愕の表情でクロエと書類を見比べている。

「ふふん」

満足げに胸を張るクロエ。

ランクCは今までも何度かクロエとかが請け負ってた仕事であったりしたけど、ランクBだって!？ Bっていうと強力な魔物討伐やらも組み込まれて難易度が格段に上がるランクじゃないか！

「そ、それはマジなんだよな？」

俺は聞き間違えでは無いのかと、もう一度訊きなおした。

「勿論。ランクBとランクC、書類も確認してみるといい」

が、返ってきた答えは先ほどと同じもの。念のため書類を確認するが、どうやら間違いない。

「すごいすごいっ！　ね、シュウ？」

アリアもいつもよりハイテンションで抱きついてくる。

「あ、ああ、そうだな」

俺は返事をするも振りほどくほどの余裕も無いほど驚いていた。スウィードは一瞬驚いていたものの今は割と普通。最年少のジルは瞳をキラキラさせ、視線をクロエと書類を行ったり来たりさせていた。

「それで組み合わせはどうするの？」

間延びした声でそうクロエに問いかけたのは克蘭メンバー最後の一人。

克蘭メンバーで一番年上……と言っても、ついこの前二十歳になったばかりの女性。名前はフェルディアーネ。みんなからはフェルと呼ばれている。

背中の中ほどまである薄い桃色のウェーブのかかった髪、背は低い。サーシャとそう変わらないんじゃないだろうか。が、胸の差は結構ある。アリアほどの巨乳とまではいえないが適度に大きい。

そんな彼女であるが……実はクロエと並びランクはAである。

「そうですかあ……じゃあ、わたしはお留守番で」  
「却下！」

フェルの言葉を一瞬のまもなく却下するクロエ。

「ならわたしはランクCの方がいいですう」

洪々な様子で言うフェル。

それというのもクロエが完全な戦闘タイプであるのに対しフェルは研究者タイプ。

つまり、戦闘が苦手なのである。

普段の彼女は仕事よりもここで研究していることが多い。新術開発から魔法の力を込めた武具や道具、いわゆる”魔導具”と呼ばれるものの作成。実は俺を含め克蘭メンバーの武具は彼女が作成したものだ。

ま、俺の場合は武器だけは自作なのだけど。

「仕方ないわね……それじゃ私とスウィードはランクBに確定ね」  
「わかりました」

依存は無いと頷くスウィード。

「問題は貴方たちをどう分けるのかだけど……」

そう言っただけクロエは俺、アリア、ジルのランクFトリオを見る。  
ギルドの規定で仕事を請けるための条件というものがある。

まず自分と同じランク、これは一人でも請けることが出来る。さらに同ランクが三人以上でふたつ上のランクの仕事を請けることが出来るようになる。

俺、アリア、ジルが一緒だとランクDを請けられるということだ。  
そして……Cランク以上はひとつ上のランク保持者と一緒ならばランクが低くても請けられる。

それとは別にランクSという仕事もあるらしい。これは難易度に関係なく国が出す依頼なのだという。



「あ、わたしの方にシュウジくんを入れてほしいですう」  
「え、俺？　なんで？」

急に名前を出されキョトンとしながらフェルを見る。

「シュウジくんの戦い方を見たことってないですからあゝ。把握すればいろんな道具を作る参考になりますしい」

あゝ……そういうことね。

俺はフェルが武器も作ると言ったときに俺は戦い方が特殊だから自分でなんとかするって答えたんだよなゝ。

「そういうことならシュウジはフェルの方ね」

クロエも納得したように頷く。

「はいはい！　シュウがフェルの方なら私もそっち！！」

アリアが拳手して大きな声で言った。

「却下。アリアは私たちと一緒にBランク」

「ええっ！？　死ぬって絶対！」

「何事も経験よ。それにアリアは攻撃、補助、回復で苦手な系統はないしこっちでも何とかなれると思うから」

「無理だつてば　っ！」

ランクFアリア、ランクBの仕事が決まった瞬間だった。

確かに俺はリミッターを付けた状態じゃ魔法よりも剣術とかそういう技術で戦うのが主流な前衛型だし、ジルは天才的な攻撃魔法

と申し訳程度の補助魔法。

苦手なものが無いアリアがクロエのパーティに入るのはバランスが良いと思う。

「それじゃ、シュウジくん、あしたは宜しくねえ」

満面の笑顔で俺とジルの手をとるフェル。

「あ、うん。宜しく」

「ランクC……シュウジの足手まといにならないようにしないと」

俺は普通にフェルへ返事をし、ジルは返事も忘れて期待と不安の表情で呟いた。

てかジルよ、なんで俺？

ランクAのフェルが一緒なんだぜ？俺よりもフェルの足手まといにならないよう頑張るんじゃないのか？

「ま、お互い頑張ろうぜ」

「うん！」

ジルと笑いあう。

「いやあ　　っ！」

そんなアリアの悲鳴をBGMに俺は明日への期待を膨らませた。

\* \* \*

翌日。

『今日はみんな頑張ろう！』

朝食の後、クロエのその言葉で各パーティに別れ目的地を目指す。俺たちのパーティが請けるランクCの依頼はある村の付近の洞窟調査。

なんでも、最近になって急に魔物が増えたのだとか。

今までもたまに目にするくらいはあったそうだが最近は頻繁に現れ、村の外では被害にあった人もいるらしい。

まだ村自体は襲われていない。

そこで目にする魔物はランクで言うと大体D程度の魔物らしいが、急激に増えてきたこともあり洞窟の中では何があるのか分からないためCランクの任務となっている。

クロエたちの方は強力な魔物の討伐らしくアリアが直前まで必死に行くことを抵抗していたがクロエに引き摺られ泣きながら任務に向かっていった。

まあ、大丈夫だと思うが無事であることを祈っておく。

俺たちは目的の洞窟付近の村へ向かう馬車に乗り込んで思い思いの過ごし方をしていた。

ジルは隅の方で魔導書を読み耽っている。

馬車の中でそんなものを読んで酔ってしまわないか心配になるが今のところ大丈夫そうだった。

「そんなことしなくてもわたしが作ってあげるのにいゝ」

「それもいいけど何かあったとき自分で出来るのが一番いいからね」

俺はフェルの隣に座り、魔導具の作り方を教わっていた。

そもそも、俺は自分の武器は錬金で作り出したもので、そのうち使いこなせるようになったらもっと良い武器を作るつもりだ。その時に魔導具の作り方を知っていれば自分で武器に何らかの付与効果を与えられる。

そう思っただ数日前からフェルに弟子入りした状態だ。

目的の村まで馬車で一日半はかかるし、その間は他にすることもないし教わるには良い時間だ。

能力の方も色々新しい発見があった。

今回新たに見つけた能力の使い方は中々に使い道が良さそうなのだった。

まずジルとフェルの二人のステータスだが……

名前	ジル
種族	人間
職業	ギルド員
称号	攻撃魔法の天才
レベル	6
HP（体力）	28 / 28
MP（精神力）	62 / 62
STR（力）	14
VIT（耐久力）	18
INT（知性）	53
AGI（素早さ）	47
DEX（器用さ）	40
LUC（幸運）	18
カリスマ	
CHR	8

名前	フェルディアーネ
種族	人間
職業	ギルド員
称号	研究者
レベル L V	3 2
HP (体力)	7 2 / 7 2
MP (精神力)	2 3 6 / 2 3 6
STR (力)	5 4
VIT (耐久力)	5 1
INT (知性)	1 7 3
AGI (素早さ)	1 1 4
DEX (器用さ)	2 2 1
LUC (幸運)	8 2
カリスマ C H R	4 9

とりあえずスキルとかは表示しないで身体能力だけだとこんな感じ。

と、二人のステータスを確認したときウィンドウにあった“ある表示”に気が付いた。今までは見逃してしまっていたらしい。

その名も『パーティー登録』である。

試しに二人を俺とパーティー登録してみたところ

パーティー名 神と従者と研究者

そのまんまだった。

もつと他になかったのか……と思い色々操作してみると他にもいくつかの名前から選択出来るようだった。

面倒だし害もないからそのままだけど。他に良いのもなかったし。まあ名前のことは置いておいて、さらにパーティー登録にはある特典があった。

それは、

パーティー技能

取得経験値up

ステータス上昇率up

攻撃魔法威力上昇（低）

魔導具作成、生産・鍛冶スキル経験値up

といった効果がパーティーメンバー全員に付与されたのだった。それにパーティー登録するとメンバーの誰が魔物を倒しても等しく経験値が振り分けられる。

これは初心者というか低レベル者が高ランク者と一緒に任務を請ける価値が随分上がる。高ランク任務で経験値の高い魔物と戦うことになって自分は補助だけでも大量の経験値が取得できるわけだ。

ちなみに、パーティー登録してから魔導具作りを教わったところ村に着くまでにここ数日以上にスキルレベルが上がったのだった。

### 第三章 四話 依頼（後書き）

本格的に仕事開始。

能力も使いこなせるようになってきたし、主人公強化速度アップするかも。

### 第三章 五話 予感（前書き）

遅くなつてしまい申し訳ありませんでした！



### 第三章 五話 予感

目的地に到着し、俺たちは依頼者である村長宅を訪れていた。

「お、このお茶、王都のとはまた違った味で美味いね」

村長の娘さん（十歳、素朴で可愛い）の淹れてくれたお茶を飲む俺。

「おお、このお菓子も美味いよ」

煎餅に似たお茶菓子をボリボリと貪り喰うフェル。

村長との話は一番マトモに話が出るジルに任せ、俺とフェルは全力で寛いでいたのだった。

まあ、俺が話しても良いんだけど俺ではこの世界について分からないこともまだまだ多いので、やはりそこら辺にも詳しいジルが適任だろう。

ちなみにフェルは駄目だ。

コイツに任せたら話が脱線して全然進まなくなる。ランクは高いのに残念な人なのだ。

\* \* \*

「話、全然終わらないね」

「……そうだな」

もうかれこれ三十分程は経っただろうか、未だに村長とジルの話し合いは終わる様子がない。

最初に出されたお菓子も無くなり（フェルがほとんど食べた）、お茶も何杯か飲んで水っ腹。そろそろ待つのに疲れてきた。

「ここは……秘技『少年（青年） 中』を使うしかないようだな」

俺は退屈なあまりそんなことを口走ってしまい、フェルがやたらと興味津々で身を乗り出してきた。

「ねえねえ、なにそれ？ なに？」

「秘技だからな。そう簡単には教えられねーよ」

フツ、と不適に笑い言ってやる。

「え！？ そんなに凄いことなの！？ なになになんの！？」

凄い食いつきだ。いつものように間延びした語尾もなくなってる。

「そんなに知りたい？」

「知りたい！」

俺は指を顎に当て、さも考えてますというポーズをとる。

「まあ、いいか。誰にも言うなよ」

「うんっ！」

瞳を輝かせ満面に笑みを浮かべるフェル。

その様は、お前はほんとに二十歳か、と訊きたくなるような可愛らしさだった。

「じゃあ教えよう……」

俺は勿体ぶった話し方で話し出す。

「少年（青年） 中とは……オリ主に与えられる特殊能力だ」  
「ほへへ」

フェルは分かっている様子でぼけっとしている。だが、まだ説明は終わっちゃいないぜ。

「 の中には様々なものが入る。例えば今の場合だと『説明』が適切だ。これを入れ『少年（青年）説明中』とすることによって説明が終わった状態にすることが出来るのだ！」  
「な、なんだってえー！」

力を込めて言うとノリ良く驚いてくれるフェル。

「さらに、『移動中』にすることにより、移動という無駄な時間を省き、目的地に到着した状態にしてくれるのだ！」

実際には説明する時間も移動する時間も減っているわけじゃないがなっ！

「この能力はオリ主ならかなりの確立で習得しているある意味必須スキルとも言えるだろう」

「へへ」

「だが、この能力には落とし穴もある」

「落とし穴？」

「ああ。この能力を多用するオリ主は嫌われやすいのさ」

俺は悔しい表情を作る。

「それは……なぜ？」

「こんな便利な能力を持つオリ主への嫉妬もある。だがそれ以上にこの能力を使いすぎると途端にツマラなくなってしまうんだ」

俺も良く二次創作とか読みふけたけど、この能力を使うオリ主の多いこと多いこと。ゲームとかならまだしも文字だけの小説でそればかり使われるのは読んで残念な気分になるぜ。気分だけじゃなく内容も残念なものが多いんだぜ。

そついうのを読むといつも思ってた。

文字の情報しかないんだからちゃんと説明しろよ、ってな。

「ん……よくわかんないや。それより何でそんな悔しそうな顔してるの？」

「そんな顔してた？」

「うん、してた」

「すまん。嫌なことを思い出してな」

調子に乗って落ち込むとか……俺は馬鹿か。

「気になったんだけど、オリ主ってなに？」

お、語尾が戻ってきた。

それにしてもオリ主か……やっぱ気になるか。

「それは……なんてーか……えっと、選ばれた人間のことだ」

適当にそれらしいことを言ってみた。

「へえ……あつ、それが使えるってことは、もしかしてシュウジくんもオリ主なの？」

「ま、まあ、そうなるな」

うおお……自分で認めると急に恥ずかしくなる。

「じゃあ、その能力使うの？」

「い、いや……俺は地道にコツコツを大切に作るオリ主だから」

もう訳が分からなくなってきた！

「……………何を意味の分からないことを話してるの、二人とも？」

そんなところで救いの神のように最高のタイミングで村長との話を終えたジルが呆れた目を向けつつ戻ってきたのだった。

\* \* \*

「鳴き声？」

村長宅の一室、今日は休み明日出発するということで、俺とジルに宛がわれた部屋（さすがに女性と同じ部屋はあれなのでフェルは村長の娘さんの部屋）で村長との話を纏めていた。

今はフェルも同じ部屋にいる。

「うん。なんでも二日ぐらい前からなんだけど、洞窟の奥から得体の知れない鳴き声が聞こえてくるらしいんだ」

村長と話をしたジルが説明してくれる。

「得体の知れない……魔物か？」

「だろうね。それも前からこの辺りで見られてるものじゃない」

「新種つてことか？」

「それよりもただ単にこの辺にはいなかった魔物が住み着いた可能性も高いね」

ああ、そうか。確かにそっちの方が可能性は高いわな。

「それに洞窟の奥に住み着いているんだとしたら、外まで鳴き声が聞こえるのは大型の魔物になりそうですね」

のほほんと言うフェルだが内容は全然そんな感じじゃない。

「大型……ねえ」

俺が戦ったことのある魔物は比較的小型のものばかりだ。魔物も種族によって大きさは様々だが俺は自分以上に大きい魔物を見たこともない。

「一概には言えないけど、基本的に大きくなるほど強大な力を持っている魔物が多いから、もしかしたら僕らの手には負えなくなるかもしれないね」

そうだな……フェルはAランクだが戦闘向きじゃないし、俺とジ  
ルは学院を出たばかりの新人だ。

「村の人も洞窟の一番奥まで行ったことのある人はいないそうだから、ひよつとすると相当深いかもね」

「その場合……魔物も想像以上に大型になる、ってことか？」

「その可能性もある、ってこと」

ジルの言葉に冷や汗が流れる。

おいおい、それってヤバくないか。とんでもない魔物がいるかもしれないってことだろ？

何かあると考えると……このあとステータス弄っておこう。

「んじゃ、慎重に進んで……無理そうならギルドに連絡、ってことでいいか？」

俺は大雑把に明日の方針を考え同意を求める。

「そうなるね。……もし本当に大型の魔物がいるんなら慎重過ぎるぐらいで丁度良いよ」

「わたしもそれでいいですぅ」

フェルの声を聞くと一々気が抜けるぜ。

「じゃ、今日はゆっくり寝て、明日気合入れてくか！」

「うん」

「はぁい」

拳を握り締め気合を入れる俺だったがフェルの返事でやっぱり締まらなかった。

### 第三章 五話 予感（後書き）

やあ、二週間以上振り！

なんて言うか……ごめんなさい。

しかも今回も短め……これはイカンな。

それはそうと、総合pt1000、ユニーク300000突破しました。

これからも宜しくお願いします！



### 第三章 六話 洞窟

洞窟調査、村長の話だと最初に考えていたよりも厄介な仕事になりそうだ。

「声って……これだよな？」

歩きながら二人に問いかける。

「だろうね」

「そうですねえ」

ジルは神妙な、どこか緊張した顔で答え、フェルはいつも通りこちらの気を抜くような声で答える。

洞窟に近づくに連れ大くなるその声。

二人ともそう答えたことから俺の聞き間違いであるという線は消え、大型の魔物が住み着いているという予想が段々と現実味を帯びてきた。

何か非常にメンドクサイ事になりそうな予感がする……。

最近、この手の予感は外れた例がないので油断できない。

「って離してる間にまたお出ましか？」

近くの草むらがガサガサと揺れる。

洞窟に近づくにつれ魔物に遭遇する頻度も上がっている。

やはり魔物が増えている原因は洞窟にあるのだろうか……。

なんて考えていると草むらから数匹の魔物が飛び出してきた。すぐさま戦闘態勢に入り、剣を構えて敵を確認する。

「犬……いや、狼……？　だけど何この色！？」

魔物の姿は狼。

そして、なんと紫の体毛をしていた。じゃなきゃ魔物とは一見しただけじゃ分からないだろう。

「これは……ポイズンウルフだね」

杖を構えたジルが呟く。

ポイズンウルフ……毒狼ですか。

色とか、見た感じそのままですね。

「強いのか？」

「普通の狼よりちょっとすばしっこいけど、強さ自体は大したことないですよ」

「うん。ただ爪と牙に強力な毒を持ってるね」

だろうね。

毒もつてるとか名前聞いた瞬間に分かったよ。

「んじゃ、何かされる前に速攻で倒せばいいのか？」

「そうですね。それか……えいっ！」

「フギャッー！」

フェルの持っている銃から放たれた魔力の弾に当たり悲鳴を上げる魔物。

「牙や爪の届かない遠距離からの攻撃で倒せばいいんですよ」

言いながら、銃の先にフツと息を吹きかけるフェル。  
いや、煙とか出てないし意味の無い行動だけだね。

「じゃあ、魔法メインの攻撃か」  
「だね」

とりあえずの方針を決め、魔物退治。

俺は遠距離というか中距離で使える魔神剣を駆使してジルとフェルを守るようにして戦う。

ジルは俺の後ろで魔力を溜め魔法を放つ。

フェルは……なんつーか、気の抜ける掛け声と共に銃を乱射。  
あっという間に魔物を退治してしまった。

\* \* \*

「その銃便利だよな」

洞窟に向けて歩きながら、俺はフェルの両太股についているホルスターにある二丁の拳銃を見て言った。

「作るのに苦労したんですよ」

するとフェルは自分の作品が褒められて嬉しそうに銃を撫でた。  
この銃はフェルが作ったもので、この二丁しかこの世にないレア物だ。

魔力を弾丸に変える銃。使用者の魔力が続く限り弾が切れること

が無く、しかも一発で消費する魔力も大したことがない。

さらに、込める魔力に属性を加えてやればその属性の弾になる優れものだ。火とか氷とかね。

この銃があれば魔力は高いが身体能力は低いので戦闘が苦手なフェルでも、それさえ何とかなれば一人でも十分戦えるだろう。

というか、今でも時間のかかる大魔法よりも銃を使って戦うことの多いフェルであるため、普通に弱い魔物なら一人でも十分なんだが……それはさすがランクAと言わざるを得ない。

「あ、やつぱ苦労したんだ？」

「それはもう凄いましたよお！ 二日も寝ないで作ったんですよー！」

フェルにしては強い語気で言うが……この武器を二日で作るとか天才だろ。

ま、まあ設計図ってかこういうのを作るって考えるまではそれなりの時間がかかってるんだろうけど

「もう、ご飯食べてたら急に思いついちゃって忘れないうちに作るの大変だったんですよー！」

ごめん、やつぱただの天才だった。

なんだよ思いついて。思いつきでそんな強力な武器作るなよ。それ売ったら普通に軒家買っても数年は豪遊しても暮らせるくらいになるってクロエが言ってたぞ。

ま、俺みたいに剣とかで戦えるならいいけどそうじゃない魔法使いなら喉から手が出るほど欲しい代物なんだろうな。普通に魔法使うよりも連射出来るし、下手な魔法より強力だし。

「こっちはさらにちょこつと改造してあるんですよー」

さっき使っていた銃とは別の方を取り出すフェル。

「へえ〜。そっちは何が出来るようになってんの？」

実はですねえ、と言いながらムフフと笑う。

「こっちはより魔力を込められますう」

それって……

「大量の魔力込めてドツカーン？」

「はい、ドツカーン」

え、なにそれ、最強じゃね？

くっ、魔力だけじゃ足りねえ……俺の生命力も持っていきやがれ

え！これが俺の全力だあ　　っ！！　　みたいなことが出来る

んじゃない？　フェルには似合わないけどな。

てか、こっちの世界に来てから自分の思考がどんどん厨二臭くな  
ってる気がするんだが、多分……気のせいだ。

「二人とも、お喋りもいいけど……見えてきたよ。洞窟だ」

ジルの言葉に前方を見る。

「お、マジか。本当に洞窟だ」

「洞窟ですねえ〜」

少し先に岩肌ポツカリ空いた空洞。

紛う事なき洞窟だった。

「中に入る前に少し休憩するか」

「そうだね。結構魔物と戦闘になったし、それがいいかもね」

「賛成ですう。お腹減りましたあ」

そう言えばそろそろ昼だな。

てなわけで、洞窟手前で休憩しつつ昼飯を食すことにしたのだった。

\* \* \*

「さて……そろそろ行くか」

昼食を食べ、適度に休憩したところで立ち上がる。

ここからは慎重に進むということで、休憩中に荷物の確認も武器の手入れもしっかりと行った。

洞窟に足を踏み入れると、外とは違ったひんやりとした空気に包まれる。

「とりあえず魔物の気配はないね」

ジルが洞窟に入ってすぐに言った。

確かに、見える限りでは魔物の姿は確認できない。

「ま、進んでみるか」

慎重と言っても進まなければ依頼も達成できないのでいつもより遅めではあるが、ゆっくりと歩を進める。

「なんか……外の方が魔物多くなかった？」

暫く歩き進めたところで二人に尋ねる。

想像以上に反響して大きく聞こえる自分の声に内心少しびっくりした。

それはともかく、実際、洞窟に入ってからはまだ一度も魔物に遭遇していない。

「そうですねえ」

「でも……声は大きくなってるよ」

ジルの言うとおり、正体不明の声は段々と大きくなっている。

あ、あと、二人の声も凄く響きました。大した音量ではなかったのに。

「てかさ、こんだけ声が響くとそれに釣られて魔物が寄ってきそうだよな」

「あはは。それもそうだね」

「そういうこと言ってるほんとに来ちゃいますよあ」

三人で笑いあう。  
すると

「キーツー!!」

という鳴き声と共に『何か』が飛来した。

「うおっ!？」

咄嗟に避ける。

飛来した何かは再び上へ移動したようだ。  
そこへ目を向けると……

「ホントにいたあ

っ!！」

洞窟の天井に張り付く十匹以上のコウモリ……ただしデカイ。

「あ、あれなんだ!？」

同じく天井を見上げる二人に声をかける。

「あれは……洞窟コウモリだね」

そのまま！ この世界の魔物の名前は本当にそのままだな！

「一匹一匹は弱いですけど一度に大量に襲ってきますう……あと吸血もしますねえ」

吸血コウモリ！

「吸血なんてされてたまるか！ 速攻で倒すぞ！」

剣を抜く。

「あまり派手な技は使えないよ。基本天井に張り付いている魔物だ



から下手したら洞窟が崩れる危険がある！」

同じく杖を抜くジルが注意を促す。フェルも銃をホルスターから抜いた。

「そ、そうか……」

確かに派手な技では天井が崩れてしまう……なら！

「火炎剣！」

俺は剣に魔力を込め、火の属性に変える。

「コウモリなら火は効くだろ」

コウモリに限らず動物系には効くはずだ。

「うりゃっ！」

切りつけると断末魔の悲鳴をあげ燃え落ちるコウモリ。やっぱり火が効くようだ。

「なら僕も　ファイアボール！」

手の平台の大きさの火球がジルの杖から放たれ、それはコウモリに直撃する。

「ファイアシュートですうっ！」

やはり気の抜ける掛け声と共に、フェルの銃から火の属性をプラ

スされた魔力弾が発射される。それはジルの魔法より速度も威力も上のように、当たったコウモリは悲鳴を上げる間も無く燃え尽きてしまった。

俺の火炎剣もフェルの技術を教えてもらい、魔力の伝導率を上げる細工がしてあるが本家とは比べ物にならないみたいだ。いつか俺もフェルを超える武器を作り出したいもんだ。

『鍊金の剣（鋼） スキル威力5%アップ、消費MP1低下』

俺の剣はステータス画面だとこんな感じた。

ちなみにジルの杖も、他のクランのメンバーの武器もフェル製なのだが……ジルの杖は魔法威力、魔力伝達率上昇の効果があるのだが、このレベルの武器は普通だと、俺たち新人ギルド員では毎日仕事しても買うのに半年はかかる代物だ。

俺の剣はフェル製ではないのでそれ程ではないが、それでも結構な価値が付くらしい。

有名なクランになればフェルのような専属の研究者が所属し、武器防具も相応のものになるらしいが、それ以外のギルド員はそういう所から流れてくる物を買っしかないのも価値が上がっている理由だ。普通の武具屋では、特殊能力付きの武具はまずお目にかかれない。

ま、それは置いて、武器で威力が上がってるおかげか、それとただ単にコウモリが弱いだけなのか。攻撃一発で倒すことが出来る。

「数も多いし、さつさと片付けるか」

そして、俺たちは次々と攻撃を放ち、コウモリを倒していった。

### 第三章 六話 洞窟（後書き）

ということ、主人公陣、武器進化。

ちなみに新しい技もちよこちよこ覚えてたり。

なんか……あんまり進んでない？

次は進めます。

洞窟最深部まで……行けたら、いいなあ。

### 第三章 七話 最奥

最初のコウモリの群れを倒した後も何度か襲われるも倒しながら洞窟を進む。

洞窟の中は暗いため、ライトの魔法の明かりを頼りに進んでいく。その間も、定期的とは言えないが何度も奥の方から鳴き声というか唸り声が聞こえてくる。

「これで最後 っと」

今も襲ってきた群れの最後の一匹を倒し、剣を納める。

「ここに入ってどれ位経つ？ そろそろ休憩するか？」

こう何度も襲われると、いくら弱いと言っても疲れは溜まる。俺や戦闘が苦手とはいえ高ランクのフェルはともかくジルは疲れが見えている。

「僕はまだ大丈夫」

少し息を乱しながらも杖を掲げるジル。

「そうは言ってもこの先何があるか分からないんだから疲れてるなら休もう」

俺はジルの肩に手を置く。

「そうですねえ。奥までまだどれだけあるか分からないですし、休みましょ」

言って、座り込むフェル。

高ランクの癖に一番に座り込むなよ、と思わなくもないが、そのおかげでジルも休む気になったようなので口には出さないでおく。もしかしたらこうなるという考えがあつての行動かもしれないし。俺は袋から何本か薪を取り出し座るみんなの中心に置き、ファイアで火をつける。

「おお、準備いいですねえ。薪まで持つてるなんて」

気温の低い洞窟内で身体が冷えたのか火に向かって手をかざすフェル。

「まあな。何があるか分からないわけだし」

薪を出すついでに取り出した保存食（干し肉）を二人に配る。

「ありがとう」

「どうもです」

受け取って齧るジル。フェルは焚き火で炙っている。

「それにしても……洞窟内はコウモリばかりだな」

俺も干し肉を喰えながら二人に話しかけた。

「確かにそうだね。魔物が増えてると聞いたけど、コウモリは洞窟からは出ないはずだし」

「でも目撃証言は洞窟の外だろ？ そうするとここは関係ないってこと、か？」

「どうだろう……進んでみても状況が変わらないならその可能性もあるね」

ここにきて新たな可能性が見つかった。

「まあ、ここで正解だと思いますけどねえ」

炙った肉をふうふうしていたフェルが会話に加わってくる。

「どういうことだ？」

「大型の魔物がいるところには他から魔物が寄ってきてやすいんです」

「ってことは……」

「この奥にいるのを退治……もしくは追い出さないと解決しないってこと？」

「そうなりますねえ」

なるほどね。

俺たちの対処できる相手であって欲しいもんだね。早めになんとか出来なきゃ応援呼んでる間に村に被害が出ないとも言え切れない。

「ごちゃごちゃ言っても俺らのやることに変化はない、か」  
「だね。どっちみち奥まで行って確かめなきゃ」

そうなるね。

相手を確かめなきゃ倒すのも応援を呼ぶのも出来ないし。  
俺は半分ほどになった干し肉を口の中に放り込んだ。

\* \* \*

再び進みだし、少しした所で十メートル四方程の開けた空間にたどり着いた。

「うわ……また大量に……」

「ポイズンウルフの……群れ」

「いっぱいですねえ」

視線の先には十匹以上のポイズンウルフ。

さらにその奥……俺たちが目指す奥への通路の前には……

「あれは……なんて魔物？」

俺はそれを指差す。

「え……何、あれ」

ジルにも分からないようだ。

「アレはベアスネークですね。前に見たことがあります」

ベアスネーク……ベア（熊）スネーク（蛇）か。

「……………」

確かに腕が蛇の熊だな。

「……強いのか？」

俺は口元を引きつらせて尋ねる。

「強いですね。腕の蛇を鞭のようにして攻撃してきますし、その蛇の牙には毒もありますよ」

マジか……しかもポイズンウルフの群れのおまけ付き。

「勝てると思う？」

「うーん……微妙ですね」

フェルでも微妙なのか！？

「大きい魔法が撃てれば勝てるんですけどね」

「洞窟崩れる？」

「それは大丈夫ですけど……時間が」

撃つために溜めがいるわけだな。

「んじゃ、俺とジルで時間稼ぐってことで良い？」

「僕はそれでいいよ。そうしなきゃ進めないしね」

方針は決まったな。気合入れなきゃな！

「……大丈夫ですか。時間かかりますよ？」

フェルもさすがにのんびりした喋りが出来ないようだ。



「ま、何とかするよ。出来たら教えてくれ」  
「わかりました」

俺はフェルが頷いたのを見て剣を抜いた。

「じゃ、俺が切り込むからジルは援護してくれ！」

「うん、わかったよ！」

「行くぞ！ 魔神剣！！」

フェルが詠唱に入り、俺はポイズンウルフに向けて魔神剣を放ち、そのまま突っ込んでいく。

「おらあ！」

目の前の敵を切り上げて自分も飛び上がる。

「紅蓮剣！」

新しく覚えた技だ。

飛び上がって炎を纏わせた剣を魔物が集まっている場所に向けて投げる。剣が地面に突き刺さり、そこを中心に小さな爆発が起こる。さらに

「フレイムバースト！」

そこに巨大な炎の塊が打ち込まれる。

「ナイス、ジル！」

着地し、地面に刺さった剣を抜く。

「　　っ！？」

と同時に何か嫌な気配を感じ横に飛ぶ。

すると今までいた場所に蛇の鞭が振り下ろされた。

「危ねっ……これが危険察知か。持ってた良かった」

それを見て呟く。

この能力がなかったらそのまま喰らってたかもしれない。  
てか地面挟れてるし……。

「　　うおっ！？」

考えてる間にまた一撃。今度は剣の腹で防ぐ。

「魔神剣！」

衝撃波を放つ。

それはベアスネークに直撃し

「無傷かよ！」

思わず叫ぶ。

レベルに比べるとステータスも上げてるし、リミットがあるとは  
いえ魔神剣でも相当な威力になってるはずなのに……。

「くっ　　はっ！」

防ぎ防がれ、防御力も高いのか切れやしない。

「火炎剣！」

炎を纏わせた剣で一閃　　が、

「なっ……早っ！」

かわされ懐に入られたところをバックステップで距離をとる。  
でかい図体の割りに素早い。防御力、攻撃力も高い。

「こりゃ強いわ」

剣を構え呆れまじりに呟いた。

「フェル！？」

その時、焦ったようなジルの声。  
釣られてフェルの方に視線を移すと、目を閉じて詠唱に集中しているフェルの目の前までポイズンウルフが迫っていた。

「　くそっ」

ここからじゃ間に合わない。ジルの位置からも助けに行くのは難しい。

なら

「錬金っ！！」

地面に手を叩きつけ唱える。

「ゲエツ!!」

地面から生えてきた剣がポイズンウルフを貫く。

「かはっ」

だが、その隙に鞭で身体を打たれる。

そのまま吹き飛ばされ地面を転がされる。

「出来た! この部屋から避難して!」

そこでフェルが叫ぶ。

俺は転がるうちにベアスネークが最初にいた通路の近くにいたため、起き上がるより先に通路へ向かい跳んだ。

ジルもフェルの後ろまで下がる。

「いくよ! アイシクルレイン!!」

フェルが唱えると開けた空間の天井に魔方阵が浮かび上がり、無数の大小様々な氷柱が地面……魔物へと降り注いでいった。

\* \* \*

魔法が終わり、氷を溶かすと、そこに魔物の姿は見当たらなくなっていた。

勿論ベアスネークも、だ。

「お疲れ」

俺は反対側にいたフェルとジルに声をかける。

「攻撃喰らったみたいだけど大丈夫！？ 薬、使って！」

駆け寄ってきたジルが薬の入った瓶を取り出す。

飲むと体力が回復し、鞭で打たれた部分の痛みも和らいだ。

「いやあゝ、疲れましたあゝ」

フェルもやってきて、気の抜けた声を上げて近くにあった岩に腰を下ろした。

その後、少し休憩ということになり、魔神剣や紅蓮剣のことや、実は見ていたらしい鍊金のことについて散々追求された。

適当に誤魔化したけど納得はしていない様子だった。

任務が終わったら色々訊かれることだろう……はあ。

\* \* \*

さらに洞窟を進んで、声が間近に聞こえるようになってきた。  
というか

「そこ、曲がった先から聞こえるよな」

俺たちの数メートル先にある曲がり角。そのすぐ向こうからこの声は聞こえてきているのだった。

「うん。この先だね」

「ですね」

二人の意見も同じ。

壁に沿ってゆっくりと近づいていく。

そして、顔だけ少しずつ曲がり角の先を確認しようと出す。

「　　っ!？」

驚いて声も出なかった。

そこは先ほどよりも広い空間。五倍ぐらいはあると思う。  
さらにそこにいるのが問題だった。

「何が……いたの？」

慌てて引っ込んだ俺を怪しがりながらもジルとフェルも確認する。

「……あれは無理だね」

「……あんなのAランクだってないですよ。下手したらSランクです」

ジルも冷や汗をかいている。

フェルも口がひくついていた。

「あれ……ドラゴンだよな？」

「うん。しかも大きい」

「ていうか竜種の中でも強力な黒竜ですよ」

俺たちが見たものは何メートルとか分からないくらい大きい黒いドラゴンだった。

### 第三章 七話 最奥（後書き）

ドラゴンといふことで。

やっぱり王道が一番ですね！



### 第三章 八話 竜

洞窟の奥地にて、ドラゴンを目にした俺たちは、一先ずそこを離れ作戦会議を行っていた。

「なあ……あれって俺たちで何とかなると思っただけ？」

先ほど目撃したドラゴンの姿を思い浮かべ、無理だろうなあ……なんて思いながらも二人に確認をとる。

「いや、無理でしょ」

ジルはあからさまに冷や汗を浮かべ引きつった笑顔で言った。

「無理ですねえ」

フェルも諦めたように言う。

やはり二人とも俺と同じ結論に達していたようだ。

そりゃ大型の魔物とは思ってたけど……あれはないわ。ドラゴンって……。しかも滅茶苦茶でかいし。どのくらいデカイかって言えば、良く分からんってぐらいデカイしな。

あんだだけ大きいとどのくらいあるか考えるのも馬鹿らしいって感じ。

「んじゃ……帰る？」

何とか出来そうもないのなら、これからの行動はその選択しかない。

「そうだね」

「ですねえ。バレないようにこっそり帰りましょう」

俺たちは頷きあって立ち上がる。

ちなみにここまでの会話は超小声である。

「……………あつ」

立ち上がった瞬間、俺は間抜けな声を出した。

「え？」

「はい？」

それに反応して二人が此方を向く。

だが、二人が反応できたのはここまでだった。

座り方が悪かったのだろう、俺の足は立ち上がったとき痺れていた。そして、間抜けな声を出したあと……盛大にこけた。

腰に挿してあった剣がガツシャーンと地面にぶつかる。その音は、音が響く洞窟の中……下手をすれば入り口まで届いてしまうのではないかと思えるほどの大音量だった。

「シュ、シュウジ！？ 何してんのっ！？」

「これは、拙いですねえ……………」

信じられないものを見る目で俺を怒鳴るジル。

フェルもあからさまに引きつった笑みで頬を掻いた。

そして

『グオオオオオオオツッ！！』

魔物の咆哮。

「……………バレた？」

立ち上がって二人を見る。

「……………だろっね」

「あれだけ大きな音を出せばバレるよねえ」

だよね。

「……………ごめん」

俺は頭を下げる。マジでありえないへましちゃった……。  
その直後

「……………うわっ!？」

「……………な、なに!？」

「……………キャッ!!」

耳をつんざくような轟音、そして激しい地震でも来たような揺れを感じ、揃って耳をふさぎうずくまる。

まるで洞窟が崩壊したかのような、とんでもない音だった。

揺れが収まったところで耳を押さえていた手を離し、立ち上がる。

「……………なんだっただ？」

同じように立ち上がった二人に問いかける。  
まだ微かに岩が転がるような音が聞こえていた。

「わからない……けど、音は多分この先からだね」

そう言っ、ジルはドラゴンが居た方に視線をやった。

「一度確認してみましようかあ」

フェルの言葉に頷く。

何があつたのか気になるし……帰って報告するにしても詳しい状況が分かつていた方がいい筈だ。

「じゃ、じゃあ……行くか」

俺の言葉に二人が黙つて頷くのを見て、ドラゴンが居た場所へ、手遅れだろうけど足音がならないように慎重に近づいていく。

前と同じように、曲がり角の壁に隠れるようにして、何とか確認できるだけ顔を出して先を見る。

「……………は？」

まず確認した俺は、またもや間抜けな声を出してしまった。

「……………ほえ」

「……………うそでしょ？」

フェルも良く分からない声を出し、ジルは信じられないようなものを見たといった感じの、というか信じたくないといった声。

俺たちの視線の先には

「報告とか……してる状況じゃなくなつたっぽくね？」

先ほどドラゴンが居た場所にはごろごろと砕けた岩の山があり、天井には大きな穴が開いていた。

しかも、その穴からは太陽の光が入り込み……それはつまりドラゴンが洞窟の外へ出てしまったということなわけで……最悪だ。

「そ、そう……だね」

「このままじゃ、最悪村に被害が出るかもしれませんねえ」

二人の言葉にこのままだと帰ることは出来ないと確信したのだ。た。

\* \* \*

ドラゴンが開けたのであろう天井の穴から外に出ると周りの木々を倒し、今にも飛び立とうとしているドラゴンが目に映る。

しかも、多分飛んでいくだろうドラゴンの視線の先には、今回の依頼主がいる村。

「ヤバッ！」

このまま行かせては拙いと思った俺は、咄嗟にドラゴンに向けて魔神剣を放った。

「グルウオオ      ツ！」

衝撃波はドラゴンに命中し      全く傷はつけられなかった      飛

立とうとしていたドラゴンは羽を下ろし、此方に振り向いた。

「シュウジ……どうすんの？」

震える声でジルが尋ねてくる。

だが 俺も咄嗟のことでは何か村から気をそらせようと思ってやったことであって……何も考えていないのだった。

「……………何も考えてないんですねえ」

銃を取り出し、両手に構えたフェルが呆れたように呟いた。

「し、仕方ないだろ！ あのままじゃ村に行っちゃってたっばいし  
！！」

「まあ、そうだけどさ……今度は僕らがヤバそうだよ」

「完璧に敵意もたれてますね………凄い睨んでますよ」

「……………ごめん」

俺は謝った。

秘密はバレるだろうけど……多分何とかなるって思ってる俺と違って二人は下手したら死ぬと思ってるだろうしね。

「謝ってもしょうがないよ。もう過ぎたことだし」

「ですねえ 来ますっ！！」

フェルの言葉の直後、ドラゴンが大きく息を吸い 炎を吐いた。

「うおおおおっ！」

それは避けられないほどの広範囲の炎だった。

「二人とも俺の後ろに!!」

避けれないことを悟った俺はすぐに二人に声をかけた。

二人は何も言わずに俺の後ろへ移動する。その間にも、フェルは何発か冷気を込めたのであろう弾丸を打ち出すが、まるで効果が無い。

「行くぞ!」

二人が俺の背後へ来たのを確認して剣を振り上げる。  
そして

「海波斬!!」

炎や風を斬る超スピードの斬撃を放つ。

「くっそ……」

炎は斬れた。

だが、斬ってもすぐに新しい炎が襲ってくる。

「だったら うおおりやあああつつつ!」

俺はドラゴンの炎のブレスが終わるまで連続して海波斬を放ち続けることにした。

\* \* \*

「ハア……ハッ、ハア……ハアア、ゴホゴホッ！」

あまりの激しい呼吸に咽てしまった。

あれからどれだけ剣を振り続けたのか……ブレスが止まったときにはもう腕の感覚が無かった。

「大丈夫ですか？」

「ゴホッ、うん……はあ、まあ、ね」

息も途切れ途切れに答える。

「それよりナイスだったよフェル。おかげで休める」

「いえいえ、シユウジくんがいなかったらそもそもあのブレスをどうにも出来ませんでしたからあゝ」

俺の礼に笑顔でそんな風に返してくる。

今、俺たちはドラゴンから少し離れた木の影に隠れている。

ブレスの攻撃が途切れた瞬間、俺が防いでる間に用意していたらしいフェルの魔法でドラゴンの目をくらまし、その隙に隠れたのだ。

「ゴクゴク……ふう、落ち着いたかも」

袋から取り出した薬（調合の練習で大量生産した体力回復薬）を飲んで少し落ち着く。手の感覚も少しずつ戻ってきた。



「二人にも……ハイ」

ジルとフェルにもそれぞれ薬を渡す。

二人に渡したものは体力と微量だがMPを回復させる効果がある  
今作れる薬の中でも結構上位の物だ。

「ありがとうございますぅ！ んきゅ……でもシユウジくんって  
節操ないですよぉ」

「んあ？」

フェルからの突然の評価に変な声を出してしまった。

「うん。魔法に剣術、魔導具作成に薬の調合。こんなに色々やって  
る人はなかなかいないかも」

戸惑っているとジルが的確に説明してくれた。

……なるほど、確かに俺が知っているギルド員の中にもこれだけ  
節操無く色々やってる奴はいなかった。

「ま、まあ……それは置いてさ。つーか何よりも今大事なことは、  
あのドラゴンをどうするかじゃね？」

「そうだね。……でも、どうするの？ 正直言っ僕には何も考え  
付かないよ」

優秀とは言っても、ジルもまだまだ低ランクのギルド員だ。それ  
も当然のことなんだよな。

「わたしもあの竜に対抗できそうな魔法は持ってないですぅ……ご  
めんなさい」

申し訳なさそうなフェル。

「いや、謝ることないって。あんなのどうにか出来る人間なんてそういないって」

そんなフェルを慰めるように俺は言った。

「それにしても……変だね」

「なにが？」

ジルの呟きに間髪入れず尋ねる。

「いや、確か……竜種は人間に対して友好的な種族のはず。……それが行き成り攻撃してくるなんて」

「そう言えばそうですね」

ジルの説明を聞いてポンと手を打って納得するフェル。

「なんか気が立ってたんじゃない？」

「そう……なのかな？ 何かおかしい気がするんだけど……」

そう言って、手を顎に当て考え出してしまうジル。今襲われたらひとたまりもなさそうだ。

「友好的って……どんな風に？」

そんなジルは放っておいて、俺は気になることをフェルに質問することにした。

「そうですね……竜種は基本的には人の寄り付かない所に住んで

るんですけど、たまにそこに迷い込んだんじゃう人間とかがいると人里の近くまで送ってくれたりするらしいですえ。あと、数は多くないですが高位の竜だと人語を解す固体もいますねえ」

話だけ聞くとめっちゃめっちゃいい奴らっぽいんですけど……。

「ん、じゃあさ、あの竜は喋ると思う？」

「どうでしょう……黒竜は高位の竜ですから、落ち着けばあるいは、ですかねえ」

やっぱり高位なんだな、あいつ。

下位であの攻撃力だったら竜やベエよな。

「んじゃ……落ち着いてもらおうか！」

どうしようもなかった状況で一筋の光明が見え、俺は手を打った。

「落ち着いてもらって……どうやってですかあ？」

フェルが尋ねてくる。いつの間にかジルも此方に視線を向けていた。

「どうやって……理性に無い奴を落ち着かせるには……」

「落ち着かせるには？」

ジルとフェルの声が重なる。

俺は二人に向かって微笑み

「とりあえずぶん殴る！」

そう宣言したのだった。

### 第三章 八話 竜（後書き）

お気に入り登録500件！

皆様、ありがとうございます！

何か段々更新が遅くなってる気がする。

一応ストックはまだあります。

次回決着。

### 第三章 九話 連携

「ぶ、ぶん殴るって……ど、どうやって?」

俺の言葉にジルが引きつった表情で聞いてくる。

「どつって」

顔の横で拳を握り、

「こ、こつやって?」

振り下ろす。

「……………」

それを見て言葉をなくしたジルとフェル。そんな二人に苦笑を見せ、

「まあ、あいつの頭に思いっきりぶち込んで目エ覚まさせるってこと」

「いやいいいやつ! 無理だつて!」

「そ、そうですよぉ〜! アレはわたし達だけでどうにか出来る相手じゃないですぅ〜」

簡単に言ってみるが、二人とも先ほどの竜の攻撃を思い出したのか顔面蒼白でいやいやする子供のように顔を左右に振る。

「いや、多分なんとかなるって」

気楽に言いながらリミッターをひとつ外す。

前に外したのはジル達との戦いの時……あれから仕事やなんかでレベルも上がってリミッターをつけている状態でも結構ステータスも上がっているの、ひとつ外しただけでジル達と戦った時に近いステータスになるよう調節済みだ。

まずはこの状態で、あのドラゴン相手にどれだけやれるか試してみることにした。

「何とかなるって……ならないと思うんだけど」

「なるなる！ 絶対大丈夫だって！」

まだ不安な顔をしている二人に笑いかける。

「だからその自信はどこからくるの……って、もしかして、僕らと戦ったときのような隠し玉でもあるのかい？」

言いかけて、俺との戦いを思い出したのか、ジルがそう尋ねてきた。

「隠し玉？ 前に戦ったときってどういうことですかぁ？」

「ああ、前に戦ったことがあるんだよ。ジルとアリアとはね」

不思議そうなフェルに軽く説明する。

このことは実は克蘭メンバーには黙っている。それで二人への態度を変えるような奴はいないって分かってるけど、態々言う必要も感じない。だから、それを知っているのは俺たち当事者とリーダーのクロエだけなのだった。

「隠し玉ってなんですかぁ？」

フェルの興味はそっちに移ってしまっただけ。何やら研究者の瞳で俺を見つめてくる。

「ま、まあ、それはおいおい……」

「見せてくれるんですかっ!？」

「うおう!！」

肩を掴み、鼻息荒く、俺がほんのちよつと動くだけでキス出来てしまいそんな位置にまで顔を近づけてくる。

「え、えつと……必要になったら……見せるしかないと言いますか」

しどろもどろに答える。

曖昧に言ってしまったが、実際やばくなったらリミッターを全部解除して本気でやらなきゃならなくなるんだろっしな。

「なんとか……出来るの？」

ジルが俺を真っ直ぐ見つめる。

「ああ、出来る!」

俺は即答で断言する。

それを聞いて「そう」と一言だけ呟いてジルは杖を握った。

「なら、信じるよ」

「……ありがとな」

ジルの言葉を聞いて、つい彼の頭を撫でてしまった。



なんか丁度良い位置にあったもんだから、つい、ね。

.....

ジルは俺と目を合わさずにドラゴンを見ていた。気のせいかな  
んだか少し照れているような気配を感じた。

何か俺……こっちに来てから人の頭撫でることが多くなってる気がする。

はっ！？ まさかこれがオリ主のナデボか！？ なんて思ったが

ジルは男だ。俺はその考えを即座に捨て去った。

「わたしも信じますう！　なので早く見せてくださいね！！」

「あ、ありがとう……が、頑張るよ」

迫ってくるフェルに、ジルの頭から手を離し腰を引きつつ答えた。

「ん、ごほん」

俺は咳払いをひとつして気を取り直し、二人に向き直った。

「んじゃ、作戦な。俺が突っ込むからジルは魔法で援護してくれ」

「僕の魔法じゃ傷ひとつつかないと思うんだけど」

そんな風に自信なさげに言う。

「目とか口、関節や指先を狙ってくれ。生物である以上その辺りは他よりも弱いはずだと思う」

多分そうなんじゃないかな？  
なんかの漫画で見たことあるし。

「で、フェルは……一番強力な魔法の準備しといてくれ」  
「わかりましたあゝ」

二人が頷くのを見て俺も剣を構え、

「それじゃ 行くぞ！」

号令と共に走り出した。

\* \* \*

「とは言ったものの……どう攻撃すりゃいいんだ？」

ドラゴンに向かい走りながら考える。

やっぱり顔面に一撃入りたいけど……普通じゃあそこまで届かない。いくら身体能力が上がってるとはいえ、あそこまで跳躍する脚力なんてないからな。

「よつ と」

ドラゴンに一番近い位置にある木に登る。

この時点で軽く十メートルは跳んでる自分にビックリする。頑張れば十五メートルくらい跳べるかもしれないが、それでもやはりドラゴンの頭までは無理そうだ。ま、リミッターを完全に解けばいけるかな？

「こつからなら……行けるか？」

枝に手をかけ木の天辺まで登ってドラゴンを見上げる。

それから下を見るとジルはドラゴンから見えない場所で杖を構え俺の動きを見ている。フェルも集中して魔法の準備に取り掛かっているようだ。

「行くか」

剣を握り締め足に力を込める。

「はっ！」

一気に跳ぶ。

木が揺れ、ドラゴンが此方を向きその瞳に俺の姿を捉えて口を開ける。

「ブラスト！」

口を開いたドラゴンの顔のすぐ傍でジルの放った魔法の小さい爆発が起こる。

「ナイス！ うおらあ　っ！」

怯んだ隙に頭に思いつき剣を叩きつけた。

そして手が痺れるほどの硬さを感じ、さらにバキンッと不吉な音。

「はいい！？」

根元から折れた剣の刃が俺の顔スレスレを回転しながら後方へ飛

んでいった。

「　　っ！」

剣を見送って再びドラゴンを見ると首を後方へ逸らし反動をつけて俺に頭突きをしてくるところだった。

空中で避けることも出来ずに喰らってしまう。

「うおおっ!？」

そのまま地面へ叩きつけられる。

地面が抉れる気配と背中にとんでもない衝撃を感じた。

「シュウジ!？」

「ゴホッ　ゴホゴホッ！」

肺から一気に空気が抜けて苦しいが、咳き込みながら何とか立ち上がる。

「だ、大丈夫!？」

ジルが俺のすぐ傍まで駆け寄ってきた。

「うおお！　俺凄え！　あの高さから落ちたのに生きてる！」

正直死んだと思ったけど、物凄い痛いだけで普通に喋れるしチート凄いわ。今までで一番ステータスが上がってるってことを実感できた。

「さっきはナイスだったよ、ジル！」

「え、う、うん。それより身体は？」

「大丈夫。だからまた宜しくな！ 錬金！」

折れた剣の柄を捨て、今度は両手に一本ずつ二本の剣を錬金した。

『グオオオオオオ』

その時、ドラゴンが光に包まれた。

「……これは？」

何が起こった？

「フェルの……魔法？」

ジルが呟き、俺はフェルの方に視線を移した。数メートルしか離れていない位置にフェルはいた。

こんなとこまで飛ばされたのか……。

フェルの足元には良く分からない魔方陣、そしてフェル自身もドラゴンと同じ光に包まれていた。

「これは何の魔法？」

フェルの近くに寄って尋ねる。

「わたしはあまり強力な攻撃の魔法が無いので……これは、魔法を使っている間、大幅に、相手の能力を、下げる効果が、あります……」

手をドラゴンにかざし苦しそうに言う。

「今なら攻撃も、効くはず、ですう」

俺はフェルに頷き、ドラゴンに向かって走る。  
早く決めてやらなきゃフェルが辛そうだ。

「アバンストラッシュ！」

攻撃を放つ。

『グ、グルオオオオ』

ドラゴンの鳴き声、そしてその皮膚には  
大きな切り傷  
よし、効いた！

「んじゃ、終わらせるか！」

俺は再び剣を逆手に、腰だめに構える。

「鍊金！　そこで、アバンストラッシュ」

顔面へ向けてアバンストラッシュ　アロータイプの闘気だけが  
飛んでいくものを放つ。

そして

「リミッターもう一個解除！」

言って跳ぶ。

そのスピード、跳躍力は先程の比ではなく、ドラゴンの頭まで届く。

アロータイプで放ったアバンストラッシュの闘気に追いつき、

「クロスッ!!」

近距離用のブレイクタイプを放ち、アローとブレイクの複合技アバンストラッシュクロスをドラゴンにお見舞いしてやった。

「ッ」

ドラゴンは声を上げることも無く重力にしたがって倒れていく。俺が着地すると同時にドズウウンという音と地響きと共にドラゴンが倒れ伏し、動かなくなった。

「た、倒したの?」

「す、すごいですう」

ジル、それと魔法を解除したフェルが啞然とした表情をしていた。

「多分な……死んではない、よな?」

一応皮膚も切り裂けると分かっていたので錬金で切れ味をなくしてから技は使ったけど……。

出来れば話してみたいしな。

「生きてる……みたいだね」

ジルがドラゴンを見て言った。

俺も見るとドラゴンの腹がゆっくりと膨らんだり萎んだりしていた。息、してるようだ。

「二人ともお疲れ。目覚ますまで休憩にしようぜ」

俺は持ってきた薬を全部出して座り込んだ。

「目、覚ました途端襲ってきたりしない……かな？」

「ありえますねえ」

二人も座るがそう言って不安そうな顔をしていた。

「大丈夫だと思うけど……そうなたら今度はやるしかないかな？」

俺は薬を飲んで減った体力が回復するのを感じながら言った。

「ま、何とかなるって」

「楽観的ですねえ」

フェルが呆れたように俺を見て、

「でもシュウジが言うと思うから不思議だよね」

そう言ってジルは微笑んだ。



### 第三章 九話 連携（後書き）

ユニーク50,000！

ありがとうございます。

さらに今回の更新で多分PVも30万に！

決着！

今回は全力出さずになんとかかりました。

チートと高ランクで大した苦勞も無く終わり、次でこの章も終わりです。

そろそろ違う世界に行きたい……。

### 第三章 十話 縛

「ふいゝ……疲れたゝ」

俺の攻撃で気絶し、力なく地面に倒れる竜の首の傍らに腰を下ろす。

チートのお陰で体力的には然程疲れていないが、こんな大物との戦いというのは初めてのことで精神的にかなり疲れてしまっていたのだった。

フェルも魔法を使った位置で肩で息をしながら座り込んでいるし、ジルは啞然とした表情で俺と竜を交互に見ていた。

「ほ、本当にやつちゃった……」

呆然と呟くジル。

「言ったる。ぶん殴るって」

俺はそんなジルに拳を上げて見せた。

「ま、まあ……殴ったって言うより剣で叩いたって方が正しいけど」

うん。別に拳で殴ったわけじゃないもんな。

「でも、まあ……一撃は一撃だ。ちゃんと静かにさせたる？」

「そ、そうだね。……今でも信じられないよ」

言いながら腰を引かせつつ俺の傍まで寄ってきたジルも腰を下ろした。

「はあ、はっ……はあはあはあ……んっ、はっ」

そして、苦しそうな息遣いが聞こえてきた。

「……フェル？」

それはフェルのもので、そちらを見ると苦しそうに胸に手を当て呻いていた。

立ち上がり、急いで駆け寄る。

「どうした!？」

フェルの肩を掴み、目の前にしゃがみこむ。

「はっ、はっ、はっ」

答えられないほどの様子のフェル。

肩に触れている状況。仕方なく、俺はフェルのステータスウィンドウを表示。

「……………これか？」

状態異常などにかかっているわけではなく、見る限り今の状況の理由になりそうなものと言え残りMPが一桁になっていることぐらいしかない。

とりあえずこれを何とかして見て駄目だったらまた詳しく探ろう。  
今の状況で使える技をチートで習得、それをすぐさま使う。

「マホアゲル」

これは自身のMPを他者に分け与える魔法だ。

魔力回復の薬は使い切ってしまうているし、今の調合レベルではそれ程回復させられる薬を作ることも出来ないため、すぐにフェルを回復させようと思ったたらこの魔法を思いついた。

フェルにかざした手が優しい光に包まれ、俺からフェルにMPが分け与えられる。

フェルのMPが100を越えた辺りで供給をやめる。

50を超えた辺りから息も落ち着いてきて、今では普段通りと言ってもいいくらい回復していた。

「魔力が……戻りましたあ？」

自分の手を見つめ不思議そうに首を傾げる。

「もう大丈夫か？」

俺はフェルの肩から手を離し尋ねる。

「はい。っっていうか、何したんですかあ!？」

「ん？ 俺の魔力を分けただけ。詳しいことは聞かないでくれるとありがたい」

「むう……気になりますけど……まあいいです。今度さっきのことと一緒に聞かせてもらいますう」

うへえ。

「てか魔力って使いすぎるとあんな風になるの？」

俺はそんなになるまで使ったことがないし、そんな風になった人

を見たのも初めてだった。もし、そうならこの世界での魔法つてのは使いすぎると危険ってことになるんじゃないか？

「はいいゝ。最悪気絶して数日間寝込むことになりますねえゝ」

それがMPを0まで使った代償か。

「今回の魔法はそんなに魔力消耗するやつなのか？」

ランクAのMPを根こそぎ持つてくつて……禁術だろ。

「それほどでもないですけど……今回は相手が強大でしたからあゝ」

竜を見るフェル。

聞いた話を総合して……あの魔法は相手によって消費MPが変わる代物らしい。

「そうか。ま、回復したなら話は後だ。まずはこの竜を何とかしなきゃ、な」

俺は気絶している竜の頭をコツコツを叩いた。

\* \* \*

竜を起こす……の前に、起きてまた暴れられないように竜の身体を魔力の輪で拘束する。簡単に言えば『リリカルなのは』のバイン

ドッぱいものだと思ってくれれば良い。

まあ、チートで拘束術を検索して良さそうだったら取得した。それで竜の手足、胴をガチガチに拘束していく。

「……………あれ？　これって……………」

拘束していく途中、俺はある事に気がついた。

「これは…………俺がやったものじゃない」

それは傷だった。

それも切り傷。その傷が竜の腹側に数メートルの範囲に渡ってある。

戦って分かったが、この竜は相当に頑丈だ。その頑丈な竜の皮膚を綺麗に切り裂いている。

一体誰がどうやって……………こんなのを人間がやったのか？　それとも竜同士かそれに匹敵する敵との戦闘か。

もしかして竜の気が立っていたのはこれが原因か？

「なんにしても…………このままじゃヤバイか」

傷は比較的新鮮らしく、今でもまだ血が流れ出てきていた。

「ベホマ」

俺はジルとフェルの二人に気付かれないようその傷を治す。

もし原因がこれだったなら、もう起きても暴れないかもしれない。そんな期待をしてみるものの拘束は解かない。

「んじゃ、起こすぞーっ！」

俺は二人に向かって叫ぶように言う。

「え、ちょ　！？」

「ひ、ひえええ　ま、待ってくださいいゝ！」

慌てて離れる二人を見送り、俺は

「起きろ、ネボスケっ！」

竜の頭を叩いた。

……チートな性能の身体能力で思いつきり。

### 第三章 十話 縛（後書き）

.....。

.....。

.....。

..... 短くてごめんなさい。

..... 最近ちょっと忙しくて.....。

来月一杯まで更新遅れ気味になるかも。  
なるべく出来次第更新はしていきます。



### 第三章 十一話 不穩

「なぜ、癒したのだ、人間」

それが目覚めた竜の第一声だった。

「そりゃ、アレだよ。俺は別にお前を殺すのが目的じゃなくて話をするために戦ったんだ。傷なんてあると話も出来ないと思ったんでね」

俺は竜と目を合わせ答える。

傷を治したことが上手く作用したのか分からないが、先程の戦闘の時とは違い、その瞳は冷静なもので拘束魔法を解こうと暴れるようなことも無かった。

「そうか。……だが、貴様、本当に人間か？ 手傷を負っていたとはいえ、我を単騎で打ち負かすなど」

「単騎じゃねーよ」

フェルの補助魔法にジルの迎撃魔法があつたろうが。

「ふん。まあ、いい。それで話とはなんだ？」

「お前、何でこんなところにいたんだ？ この辺に魔物が集まっているのはお前が原因なのか？」

「なぜ、ここに……か。我が住んでいる山まで帰ることがどうにも出来そうもなかったのだな。仕方なくここで傷が癒えるのを待っていた。魔物に関してはその通りだろう。恐らく我の力に引き寄せられた者が集まっていたのだろう」

ふーん。まあ、嘘は吐いてなさそうだな。

「次の質問だ。……何で急に襲ってきた？」

「気が立っていた、としか言いようがないな」

竜の答えは簡潔なものだった。

「気が立ってって……やっぱりあの傷のせいかな？」

「……………」

俺の質問に竜は押し黙った。

「……まさかつ、人間にやられたのか!？」

もしそうなら人間の俺たちを見た途端襲ってきたのにも納得がいく。

「まさか。我の身体を人間があそこまで傷つけることなど出来るはずがない」

俺にやられたけどな。

チートだけど。

さらに言えば、厳密には人間ですらないけどな！

種族、神見習い、だし。

「じゃあ、誰にやられたんだよ？ そんなに言うお前を傷つけたんだから相当な相手だろ」

「……………」

「なんだって？」

「……………娘だ」

「親子喧嘩かよ!？」

俺は思わず竜の頭を引つ叩いてツツコんでしまった。

「むう……だが、さすがにそれだけでは我もあなりはせん」

「……どういうことだ？」

ただの親子喧嘩じゃないってことか？

「娘は……人間の男に操られているようだった。どうやって竜である娘を操ったのかは分からんがな」

それは……普通怒るわ。

俺だつてクランのメンバーや、サーシャ、リヴィが操られて攻撃してきたら、その操ってる奴を許せないだろうし。

「なら、もしかして……傷が治ったらその男をどうにかするつもりでいた？」

「当然だ。必ず探し出し八つ裂きにして喰ろつてやるわ」

く、喰うんだ……。

「そ、その男をどうやって捜すつもりだったんだ？」

俺は竜の剣幕に若干引きつつも質問を続ける。

「そんなこと、人間の住む場所をひとつ残らず調べるまでだ」

ちょ、そんなことしたら

「竜が街に来たら大騒ぎどころじゃなくなるだろ!？」  
「それがどうした?」

関係ない、とばかりに言い放つ竜に俺は頭を抱えた。  
こんなのが街に来たら、上空に現れただけでも大混乱になるんじゃないか?

「ちょ、ちょっと待ってくれ! 考え直せ! 下手したら討伐隊とかが結成されるような騒ぎになるぞ!？」  
「だから、それがどうした? 人間がどれだけ集まろうと我は負けん」

負けん、じゃねえーよっ!  
何を得意げに言っちゃってんの、こいつ!?

「ゆ、猶予をくれ! その間に俺がその男を探し出してやるから!」  
「シュ、シュウジ!? な、何を勝手に言ってるの!？」  
「そ、そうですよぉ。それに危ない気配しかしませんよぉ!」

コイツに街に来られるより良いだろ。  
つか、こいつがこんな奴なせいか、戦ってるときより二人がビビってるじゃないか。フェルなんか泣き入ってるし。

「そんなこと言っても、竜を操ってる男が何するつもりか分からないし、聞いた以上調べなきゃいけないだろ」  
「そ、そうですけどぉ……」

俺はフェルたちに向かって言う。

「なぜ、そこまでする?」

竜が不思議そうに問いかけてくる。

「なぜって……さっきも言ったけど、お前が街に来ると騒ぎになるし。事情を聞いた以上調べなきゃいけない。その竜を操れる男つてのが何かを企んでないなんてとても言えないしな」

いや、きっと何かとんでもないことを企んでるはずだ。そんな気がする。

「分かった。傷を癒し、我に勝った貴様の言うことに従おう」

「ホントか!？」

「ただし! 一月だ。それを超えれば我が自ら動く」

一月……それが期限か。

「わかった。絶対に探し出すから、お前は一月は絶対に静かにしてろよ」

「約束は守る」

「よし。……あ、あと、ここからさっさと出てけよ。近くの村が魔物が増えて困ってんだ」

「良いだろう。我は私の住処に帰る。一月後、再びここに来ることにしよう」

「じゃ、俺もそれまでに調べてここに来る。それでいいな?」

竜が頷くのを見て、俺は拘束魔法を解いた。

「ふむ……確かに違和感無く治っている」

立ち上がり、身体を動かして傷の具合を確かめる竜。

「おい、人間」

「なんだ、竜」

「貴様にこれをやろう」

そう言った竜は、口で自らの鱗を剥がし俺の前に置いた。

「……これは？」

「竜の鱗だ。人間にとっては貴重なものらしくてな。良い武具が作れる」

「へえ」

「それをやろう。我との戦いで貴様の剣はボロボロだろう」

言われて剣を見ると確かにボロボロに欠けていた。

「ついでにこれもやろう」

そう言つて鱗の横に置いたのは牙だった。

「良いのか？」

「ああ。我ら竜族は人間と違い歯も鱗も何度でも生えてくるからな」

う、鱗つて生えるもんなの？ てか人間と違つてつて、人間に鱗はねえよ！

「ま、貰えるもんは貰つとく。じゃ、一月後にここだな！」

「ああ、期待しているぞ」

俺は竜に背を向け二人の元へ駆け寄つた。

「よ、よく普通に話せるね」

「そうですね。とても低ランクには見えなそうです」

「まあいいじゃん。それより早く帰ろうぜ。あいつが立ち去れば依頼は解決だし、何より調べなきゃいけないことも出来たしさ」

「色々話がありますけどお、今はそんな気力もないですし……帰りながらにしましょうかあ」

「そうしてくれると助かる」

「とりあえず、村とギルドに報告だね？」

ジルの言葉に頷き、俺たちは村を目指して歩き出した。

\* \* \*

「ふん、妙な人間だったな。我を恐れもしないどころか正面から打ち負かすとは」

そう呟いて竜は飛び立つために羽根を広げようとした。  
だが

「やあゝっと見つけたぜ。クソドラゴン」

「グウウウッ!!」

今まさに飛び立とうとした竜の首に黒い剣が突きたてられた。

「ついでに逃げられないようにしてやるぜ」

竜の首に剣を突きたてた男がそう言って剣を振るうと、まるで紙でも切ったかのように竜の羽根が切り裂かれた。

「グオオオオツ!!」

竜の叫び。

「どうだ。子供の身体で切り裂かれる気分は？」

男は卑下た笑みを浮かべ竜を見る。

「子供……だと？」

「ああ。この剣はテメエの子供の成れの果てだ」

「娘は……どうした？」

「とつくに死んでるぜ。ま、俺が有効に活用してやったからありがたき思いな」

「貴様あああ!!」

竜は叫ぶと同時に超高熱の炎のブレスを吐き出す。

「ふん。おい!!」

「……はい」

男が呼びかけると、底のように男の前に現れる人影。

「フシユウウウ」

ブレスが終わる。

「なにっ!?!」



そこにはブレスの直撃を受けたにも関わらず傷ひとつ、火傷ひとつ無い少女。その後ろには少女に守られブレスの直撃を免れた男。

「女……なぜ、貴様から娘の気配を感じるのだ」  
「……………」

少女はなんの感情も示さない瞳で竜を見つめたまま動こうとしなかった。

「くくく……………」

男が笑い、少女に近づき…………少女の服、袖の部分を引きちぎった。

「　　っ!？」

竜が言葉を失う。

服が破れたことで外気に晒された少女の腕は…………黒い、竜と同じく黒い鱗に覆われていたのだった。

「良い実験が出来た。これは竜のブレスにも耐えられるほどの強靱な身体だという、な」

良いながら男は黒い剣を少女に渡す。

「殺れ」  
「……………はい」

少女が男の言葉に従い剣を振り上げる。  
振り上げられた”竜を切り裂く剣”は”竜を傷つけることの出来

る竜の力”でいとも簡単に竜の首を胴体と切り離した。

### 第三章 十一話 不穩（後書き）

前回短めだったので早めに更新！

この世界での物語も終盤に入りました。  
次から新章です。

出来れば一週間以内に更新したいです。

## 第四章 一話 武器（前書き）

更新遅れて申し訳ありません！

## 第四章 一話 武器

「だから最近、私も全然サーシャには会えてないのよ!」

そう不機嫌そうに言ってコップをテーブルに叩きつけるように置くりヴィ。

「そうなのか……同じクランに所属してるのにな。やっぱり国一番と名高いところだから忙しいんだな」

それに対し、会えないことに落胆しつつも話を進める俺。

\* \* \*

今日は休日。

ドラゴン退治から十日あまり経っている。

あれからフェルからの追求を適当に答えはぐらかしつつ依頼を受ける日々を送っていたのだが、今日はこれと言った依頼が見つからなかったため久しぶりの休日となった。クランメンバーたちは各々思い思いの休日を過ごしていることだろう。

俺はと言えば、あの日、ドラゴンとの戦い後に貰った鱗と牙をサーシャとリヴィに送るつもりで製作した。あまりに大変な作業だったため鍛冶スキルなどを一旦だけチートを使ってレベルを上げた。武器や防具を渡そうと二人の所属するクランを尋ねることにしたのだった。

そこで出迎えてくれたのはクランのリーダーであり数少ないリンク保有者であるリスターさん（男性・二十代前半）だった。高リンク故の覇気や威圧感などは若干あったが基本的に穏やかで親しみやすい良い人だった。

用件を伝えると、サーシャは居ないようで、リヴィも仕事があるらしいのだが自分が行くから休んでいいと告げ、俺と過ごせるようにしてくれたのでお礼を言い、リヴィと一緒に落ち着いて離せる場所へ向かった。

そして冒頭に戻るわけだが

なんでもリヴィ達の所属するクランはクラン内でチームを分けてそれぞれが仕事を受けているらしい。その所為で休みもバラバラ。別のチームになってしまったリヴィとサーシャも中々会えなくなってしまったようだ。

「色々話したいことあるのにさ」

不貞腐れたようにフルーツジュースを飲む。

元同級生であり親友になったサーシャと会えないで淋しいのだから。

「つつても俺よりは会う機会も多いだろう？」

「それは……そうだけど」

「ま、会えたときに一杯話せばいいさ」

「……………うん」

「それよりも……だ」

俺はサーシャの話題を一旦打ち切り、真面目な顔でリヴィを見る。

「なによ？」

じつと自分の顔を見つめる俺に怪しげな目線を向けてくる。

「お前……いつの間にランク上がったんだ」

そうなのだ。

リヴィは学院卒業して僅かな期間で既にランクをCまで上げていたのだ。これはリヴィを待つ間にリスターさんから聞いたことなので間違いない。

「ていうか、私はシュウジがまだFランクってことのほうが信じられないんだけど」

半目でこちらを見る。

「サーシャだってDにはなってるわよ？ まあ、Cランクの実力は既についてるけど」

「は、ははは」

乾いた笑い声しか出せねえ。

「そんなんで克蘭を立ち上げるなんていつになることやら」

鼻で笑い、肩を竦めるリヴィに若干腹が立つが、ここは年上の余裕でなんとか堪えてみせた。  
てか言い返せないし。

「で、でも俺だってなあ……」  
「俺だって……何？」

ドラゴンと戦ったり 戦うどころか退治したし 色々ランク  
以上に危険な依頼をこなしてるんだ。

……ただ色々あって認められてないけどさ。

ドラゴンだって結局生かしたまま逃がした訳だし。

「何でもないです」

「しっかりしてよね。私とサーシャもシュウジがやるクランに入る  
予定なんだから」

「返す言葉もございません」

大きいこと言った手前素直に聞くしかない。

「ま、まあこの話は置いて！」

「自分で振ったくせに」

「じ、実はプレゼントがあるんだ！」

「都合の悪いことは無視するのね」

リヴィの言葉を聞かなかったことにして俺は当初の予定である贈  
り物の入った袋をテーブルに載せる。

「まあいいけどね。で、プレゼントって何？」

俺に呆れている感じを出しつつもワクワクした様子を抑え切れて  
いない子供なリヴィである。

「何か今、変なこと考えてない？」

「め、滅相も！」

「いいけどさ……開けていいの？」

「おう。そのために用意したんだ」



そしてウキウキと袋を開けるリヴィだが……

「……………」

中身を見た途端なんだか落胆しているようだった。

「き、気に入らないか？」

全部自分で作ったため不安になる。

「てか、女の子にプレゼントって言って送るのがコレ？」

「……はい？」

「私の期待を返せーっ！」

「何がなんだかーっ！？」

空になった袋を顔面に投げつけられた。

\* \* \*

「てか何か見たこともない素材ね」

気を取り直して、俺の送った品をじっくりと見つめリヴィが言った。

「うん。ドラゴンの牙から作った杖と、ドラゴンの鱗から作った簞  
手と胸当て」

杖は魔力の伝導率が良いのか同じ消費魔力でも他の杖より威力の高い魔法が使えるし、鱗で作った防具は刃物は通さないし、魔法も弱いものであれば完全に防げる。さらに重量も軽いので女の子であり成長しきっていないリヴィとサーシャでも負担になることなく身に着けることができるだろう。

「ドラゴン！？　なんでそんな貴重なものを持つてるの！？」

「まあ、色々ありまして……あるドラゴンさんから譲り受けました」

ポカンとするリヴィ。

「相変わらず想像も出来ないことをするね、シュウジは」

「あ、あはは……ま、まあ、それはいいとして、どう？　使えそう？」

俺が聞くと杖を手に、箆手や胸当ても触って確かめるリヴィ。

「今使ってるどの装備よりも良い……」

「そ、そうか！　そりゃあ良かった！」

贈った甲斐があるってもんだ。

「サーシャにも同じの用意してたんだけど……リヴィから渡してくれるか？」

「え……？　う、うん。わかった」

俺はもうひとつの袋をリヴィに渡す。

「シュ、シュウジも何か作ったの？」

「自分に？」

「う、うん」

俺は苦笑して、

「いやあ……それが、二人に作ったら牙も鱗もほんのちょっとしか余らなくてさ」

さすがに剣とか作れるだけの量は残らなかったんだよね。

「へっ！？　じ、自分には何にもないの？」

「そうなるな」

「そ、そう……」

なんだか分からないがリヴィの頬がほんのり赤く染まる。

「た、大切にする」

「おう。つってもちゃんと使ってくれよな」

「……うん」

何か凄い嬉しそうんだけど急にどうしたんだ？

「ま、自分の武器もどうするか考えないといけないけどな」

「シュウジって錬金つてのでいくらでも作り出せるんじゃないの？」

リヴィとサーシャには錬金について少しは話してある。

「そうなんだけど……それだと強度に問題が出てね。前の戦いじゃ何本も折れちゃったし」

「はあ！？　剣が折れるって……何したのよ！？」

驚くりヴィにこの前のドラゴンとの一件を説明する。

「ドラゴンと戦って、しかも倒すって……何でフランクのままなのよ！」

なんか知らんが怒り出す。

「俺に言われても」

「はぁ……まあいいわ」

俺がそう言うとりヴィは大きなため息をついた。

「で、武器だっけ？」

「そう。何かいい案ない？」

「もっと強い武器は創りだせないの？」

「今の俺じゃ無理だなぁ」

チート使えば聖剣だろうが魔剣だろうが神器だろうが創り出せると思うけど。

「魔法剣だっけ？ あれでも駄目なの？」

「強度が上がるわけじゃないからな」

「ふーん。……ならいつそのこと魔法そのものを剣にしちゃえば？」

「これがホントの魔法剣ってね」

「……魔法剣」

リヴィの言葉を繰り返す。

言ったりヴィ本人は見る見るうちに顔を真っ赤にしていた。

「じよ、冗談だけ」

「それだ！」

「ひゃっ！？」

行き成り立ち上がった俺に驚くりヴィ。

「ど、どうしたの？」

「それだよ、リヴィ！」

「ど、どれ」

「魔法剣！」

俺の魔力がある限り折れることの無い剣。

魔力自体を剣にしてる話は結構あるし、ダイの 冒険なんかでは魔法を収束させたりしてたから、それを利用すれば属性のある魔法剣だって作れるはずだ。今までのように刀身に炎を纏わすんじゃないくて刀身自体が炎の魔剣。

「ありがとうリヴィ！ 早速帰って試してみるよ！」

「え、ちょ……え？」

咄然とするリヴィを気にする余裕も無く、俺は自室へと走るのだった。

#### 第四章 一話 武器（後書き）

コロナとトトリを一緒に買ってようやくコロナのほうが終わリ、トトリも中盤。

これが遅れた理由です…… すいません。

新章突入＆多分コレがこの世界最後の章。

とりあえず後2〜3話とエピソード的な話を書けば終わるところまで書き終わってます。

次の世界がどこにするかまだ決まってるんですけど。

またアンケートとろうかと思っています。

そろそろ他の世界でもやってけそうぐらいに力はいってきてる…

…はず。

## 第四章 二話 崩壊

魔法剣が完成した。

いや、言葉にすればたつたこれだけなのだが、そこに至るまでにはとてつもない苦勞があった。話し始めればキリがないので簡単に説明しよう。

リヴィにヒントを貰った俺は、まず錬金で柄だけを用意した。んで、いつもの魔法剣の要領で試してみたんだけど、これがまた駄目駄目だった。

まず、剣の形にならない。それに切れない。刀身がないんだから当たり前だけど。

そこで、魔力を刀身に変えることから挑戦してみることにした。これもいつもの魔法剣のように魔力を薄く刀身の形になるように練っていく。

何とか日本刀ぐらいの太さに魔力で刀身を作することに成功し、試し切りをしたものの、刀身の強度が弱くグニヤリと折れ曲がってしまった。分かり易く言うとな長いゴムで切りつけた感じだ。

そこで時間はかかったが、刀身の大きさは変えずにさらに多くの魔力を圧縮。

圧縮、圧縮、圧縮。

それで試し切りをしてみると……スパツと綺麗に何の抵抗もなく切ることが出来た。試しに厚さ十センチほどの鉄の棒を作り、それを切ってみたのだが……それすら真つ二つ。切断面なんかツルツルしていた。

これで完成でもいい気がしたが、そこからさらに魔力に熱を持たせてみる。

それでさっきの鉄の棒を切ってみると、切断面がドロリと解けて

いた。

同じように水の性質を持たせてやると切れ味が若干上がった気がした。風、切った鉄の棒が真つ二つ……ではなく四つに切れた。氷は切断面が凍った。

他にも色々出来そうではあるが、とりあえずこれだけでも十分すぎる。

それから、魔法剣を作り出す工程を素早く行う訓練をしたが苦勞することもなく一瞬で出来るようになってしまった。

一度覚えたものは簡単に出来るようになるらしい。これもチートか。

\* \* \*

「と、いうことで、これが俺の新しい武器だ！」

夜、夕飯を終えた俺はクランメンバーに得意気に魔法剣を作った見せた。

「……………」

皆が皆、ポカンとしたようにそれを見る。

「な、なにそれなにそれなにそれ!？」

一番早く正気を取り戻したフェルが鼻息荒く胸倉を掴んでくる。

「見たことない技術ね。切れ味も鋭いし……こんなのランクSだつて無理よ」



え？ 俺、またマズツた？

「さっすがシュウ！」

抱きついてくるアリアは……多分何にも考えてない。

「もうシュウジが何をしても驚かないよ」

ジルは呆れてるっぽいし。

「えーっと……あ、そうだ！ 俺用事があつたんだっ！」

俺はその場を逃げ出した。背後からフェルが「待つて！ それのやり方教えて！」とか言ってるのが聞こえてきたけど無視だ。

\* \* \*

逃げ出した俺は街中を歩いていた。

街中と言っても街灯とかはなく薄暗い。

「はあ……俺、なんで考えなしにああいうことしちゃうんだろ」

落ち込みながら、昼間リヴィと話した店の方へ足を向けていた。

「あのときは早く試してみたくてリヴィを置いて行っちゃったけど……今更戻ったところでもう居ないよな。っーか怒ってる……よな

あ  
」

あのリヴィのことだ……会ったら罵詈雑言で罵ってくれるに違いない。

「早めに謝った方がいいよな」

そう思った俺はギルドに向かって、リヴィのクランの場所を訊いて謝りに行くことにした。

あわよくばサーシャにも会えるといいなあとか思いながら足早に向かう。

\* \* \*

「な……んだ、これ……」

教えられた場所に着いた俺は呆然とした。

「どうなって……嘘だろ」

家屋はボロボロ、所々から火の手が上がり黒煙が空へ向かう。

「サーシャ！ リヴィ！」

俺は急いで建物の中に入っていく。

入った瞬間外とは比べ物にならないほどの焦げ臭さが鼻を襲う。

「リヴィ！」

入ってすぐ、倒れるリヴィと鎧姿の男が目映った。  
急いで駆け寄る。

「リヴィ！ 大丈夫か！？」

「……う……シュウ、ジ？」

生きてる！

「何があつた！？ それに、この人は……」

リヴィの隣で倒れる男に視線を向ける。

鎧ごと胴をななめに切りつけられ身体の下は血の海で、もう生きていないと確信できるような有様だった。

「克蘭の……リーダー……アタシを守って……」

リヴィの克蘭のリーダーは……確かランクSじゃなかったか？  
そんな人を殺すなんて、一体何者なんだ。

「何があつた！？ サーシャも無事か！？」

「サ、サーシャ……サーシャとガイが」

ガイ？ 誰だそれ。

「そいつと一緒にいるのか！？」

コクリと頷く。

「無事……なのか？」

俺の言葉に悲しそうな表情を見せたリヴィイはフルフルと小さく首を振る。

「サーシャとガイが……」

涙を零し、

「……………これを、リーダーを……………殺し、た」

そう、告げた。

なん……………だつて？

サーシャが……………これを？

「……………嘘だろ」

あのサーシャがこんなことするはずがない。

「事実……………でも、サーシャの様子が……………変だった」

でも、リヴィイがそんな嘘をつくはずがない。

なら、これは事実だ。

サーシャがやった。

そして、もう一人、ガイという人物が。

「なんで……………こんな……………」

リヴィイはそう呟いて泣き出してしまった。

「俺が会って確かめてくる」

「無理……だよ。リンクスのリーダーでも……手も足も……出なかった」

「それでも……確かめなきゃいけない」

俺はサーシャの親父さんにアイツのことを頼まれてんだ。  
いわば、俺は代理の保護者。

だから、何が何でも会って、何でこんなことになってんのか確かめなきゃいけないんだよ。

「何か理由があるんだろ。じゃなきゃサーシャが親友のお前にこんなことするかよ」

「……………シュウジ」

「全部、俺が確かめてくる。だからお前は休んでろ」

「……………うん」

それ返事をしてリヴィイは意識を失った。

俺はリヴィイを抱き上げる。

「絶対……お前の目の前にサーシャ連れてきてやるから」

意識のないリヴィイに回復魔法をかけ、全速力で俺の部屋へ連れ帰った。

#### 第四章 二話 崩壊（後書き）

まず、更新遅れて申し訳ありません。  
軽く書けない状態になってました。

あまりにも書けないんで他の小説を新しく書き始めてしまったり、  
それも今日か明日あたり掲載しようかと思っています。

あと2話で終わる予定。

次の世界はどこにしようかなあ……。

#### 第四章 三話 大切

ドバンツとドアを蹴破る。

リヴィをおぶっているし、一刻も早く休ませてやりたかったからだ。

俺はまずはさっさとリヴィを布団に運ぼうと部屋に向かった。

「な、なにごと!？」

シャワーでも浴びたのか、タオルで髪を拭いていたクロエが玄関を確認しに出てきた。

「シュウジ……その娘は……リヴィエド？」

クロエと一緒に玄関に来たジルが俺の背負うリヴィを見て呟いた。

「あ、ほんとだ」

アリアもジルの隣でリヴィを見た。

というか、克蘭メンバー全員が玄関に出てきていた。

まあ、そりゃ、いきなり玄関が蹴破られたら確認に来るよな。

「とりあえず説明は後でするから！ みんなはリビングで待ってて！」

そう言っただけ俺は階段を登った。

リヴィを布団に寝かせる。

穏やかな寝息をたてているのを見て一安心だ。服に血はついていないものの、目立った外傷もなくなっているところを見るに回復魔法もちゃんと成功したらしい。

「それにしても……サーシャが……」

リヴィが意識を失う前に言っていたことが未だに信じられない。だって、あのサーシャがあんなことするなんてとてもじゃないが想像すら出来ないから。

何か原因があるはずだ。

多分、リヴィの言っていたガイって奴が関わってる。

それ以外に理由は思い当たらない。

最悪、サーシャが洗脳されている可能性もある。

「絶対突き止めてやる。サーシャも無事に連れ帰ってみせるから待っててくれ」

俺はリヴィに布団を掛けて部屋を出た。

\* \* \*

「さっきのはリヴィエドさん……だよな？ 何があったの？」

リビングに入ると皆椅子に座って真剣な表情でこちらを見ていた。皆、優秀なギルド員であり、俺がリヴィを背負ってきた時点で事件の匂いを嗅ぎ取っていたとしてもおかしくない。

クロエなんか優秀も優秀、ランクAの凄腕なんだからな。



全員を代表して、背負っていた人物……リヴィのことを知っているジルが話しかけてきた。

「うん」

俺はジルに頷いて椅子を引っ張り出して腰掛けた。

「リヴィの……さっき背負ってきた娘のクランが潰された」

俺は見えてきたことを説明した。

リヴィの所属するクランが宿舍ごと破壊されたこと。リーダーであるリンクスのギルド員まで無残に殺されていたこと。

そして、意識を失う前のリヴィの言葉も。

「ガイ……確かにそう言ったのね？」

クロエが真剣な眼差しで問いかけてきた。

「ああ。そいつがやったんだろう」

「でも、おかしいわ。アイツにリーダーを殺す……というか、まともには戦える力なんてないはずよ」

「知ってるのか？」

「ええ、元同僚よ。そして、潰されたクランは前まで私が居たクラン。リーダーの強さも良く知ってるわ」

クロエの実力ならあのクランにいても違和感はないな。

「じゃあ、ガイって奴の事も詳しい？」

「それほどじゃないわね。嫌な奴だったから近づかないようにしてたもの」

なるほど。

嫌な奴、か。

「サーシャが洗脳されてる可能性は？　こんなことする娘じゃないんだ」

「そんな術は持ってなかったはずだけど……私が抜けた後に身につけた可能性もあるわね。人の心をどうこうするのに躊躇いがあるような人間じゃないし」

言葉の端々から嫌悪感が感じられる。

恐らく、クロエがコレほど嫌っていることからまともな奴ではないんだと思う。

「そんな人間が、何故あれほど有名で人気もあるクランに所属していたんですか？」

ジルが尋ねる。

「あいつはね。リーダーの弟なの」

身内でランクもそこそこだったからクランに入れてしまったのか。

「優秀な兄を殺してやりたいほど憎んでたって感じが」

よくある話だよな。

優秀な兄弟、感じる劣等感。

「とにかく、まずはギルドに連絡よ。あれだけの規模のクランが潰されたのだからギルドをあげての捜査になるわ」

クロエが言う。

だが俺は、そんな悠長なことを言っている余裕はない。

「俺はすぐにでも探しに行くぞ。サーシャは絶対助けるんだ」

「駄目よ。相手の力が分からない。最低でもリーダーを殺す『何か』がある」

「それでも、俺はサーシャを連れてくるって約束したんだ」

サーシャの親父さんからもアイツのことを頼まれてる。

クランを作りたいだの何だの言ってサーシャから離れてしまった俺にも責任はあるんだ。

「シユウジ。貴方が行つて助けられる保障はない。それどころか…

…貴方も殺される可能性のほうが大きいわ」

「大丈夫。俺がやられることはないよ」

「今は怒りでそう思うかもしれないけど貴方のランクは」

「ランクだけが全てじゃないよ。それに俺はみんなに隠してることもあるから」

「隠してること？」

「うん。ジルやアリア、それにフェルにはその一端を見せたこともあるんだけど」

チートのことだけだ。

今回、俺は最初からリミッターとか言つて能力を抑えるのを辞める。

全力でサーシャを取り戻す。

「あの力……」

「ああ、あれね」

「ドラゴンを倒したときのやつですね」

三人はそれぞれ思い当たったのか納得していた。

「なにそれ？」

クロエは不思議そうな顔。

「まあ、言っても分からないと思うけど……とりあえずランクSでも戦える」

てか勝てる。

チート全開なら多分瞬殺。

「とにかく駄目！ 相手の居場所も分からないんだから、早く助きたいなら搜索にギルドも使って人員を当てるべき」

たしかにクロエの言うことは最もだ。

俺が一人でやるより、ギルドに知らせて大人数でことにあたった方が圧倒的に早く搜索出来る。

普通は、だけど。

「それは大丈夫。さっきは焦ってたから分からなかったけど、リヴィを倒した奴の魔力反応を辿れば居場所は特定できる」

確かスキルに魔力追跡とかそういうのもあったはず。

ステータス画面を開き確認する。

あった。

チートで取得。

さらに回復系、解呪系など役に立ちそうなものを悉く取得してお

く。

「それは……本当なの？」

「うん。本当。今なら手に取るように分かる」

スキルを取得した瞬間、リヴィのクランの辺りにあつた魔力反応を思い出し、さらにどっちの方にいるかまで理解できた。

完全に後を追える。

「本当に勝てる見込みはあるの？」

「俺さ、大切な人に手を出されて、今、本気で怒ってるんだよね」

俺はクロエを真っ直ぐ見返す。

「絶対に負けない」

言い切った。

「……………そう。分かったわ」

クロエは諦めたように呟いて、

「皆、すぐに出発の準備を！」

クランメンバー全員に向けて言い放った。

「ちょ、クロエ！？ 危険だし俺だけで行くから、皆は来る必要は……」

「危険だから……そんなところにシュウジだけで行かせられるわけないじゃない。これは私達全員でやらなきゃいけない事件よ」

「でも、皆は関係ないのに」

「貴方の大切な人が利用されて、傷つけられて……それは私の大切な人が傷つけられたのと一緒にの事よ。私達は同じクランのメンバーなんだから」

「クロエ……」

「さ、移動の邪魔にならない程度に役に立つものは全て用意しない！」

皆が皆、反論もなく頷いた。

その後すぐに、俺達は魔力を追跡し、敵のもとへ向かうのだった。

#### 第四章 三話 大切（後書き）

新しい連載を始めました！

こっちが疎かにならないよう頑張ります。

と言っても更新遅くなりましたが……。

あと一話……終われるか？

凄く長くなるか、もしかしたら二話に分けるかもしれません。

その場合二話投稿、同時には出来ないとしても同じ日に出来るようにしたい。

せめて一日以内に。

次の世界マジどうしよう。

リリカルはもう一つの方でやってるし……

禁書、ゼロ魔、東方

人気で行けばこの辺とか？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6232m/>

---

永遠に続く刻の中で

2011年6月17日03時14分発行